ISSN 0285-4406

ラーフィダーン

第III-IV巻　1982-1983

目　次

ラーフィダーン第III-IV巻出版に際して　藤井秀夫 ……(3)

テル・アブ・ソール, 1981, 発掘調査概報
国士舘大学イラク考古学調査団
テル・アブ・ソール班 ……(5)

イラク, アル・タール洞穴群の動物遺体　安部みき子 ……(27)

蒙古ノイン・ウラ出土下袴について　坂本和子 ……(31)

アル・タール出土染織品研究その後
藤井秀夫・坂本和子・岡田浩海・市橋幹蔵 ……(47)

M. ミトワリ著：エジプトのリビア砂漠のオアシスと
ナイル渓谷の歴史的交渉　訳者：葭本鶴江 ……(53)

前千年紀のアラビア湾岸考古学（英文）　ムニール・ユーセフ・タハ ……(75)

イラク, アル・タール洞窟出土の染織遺物（英文）
藤井秀夫・高木　豊・坂本和子
岡田浩海・市橋幹蔵 ……(89)

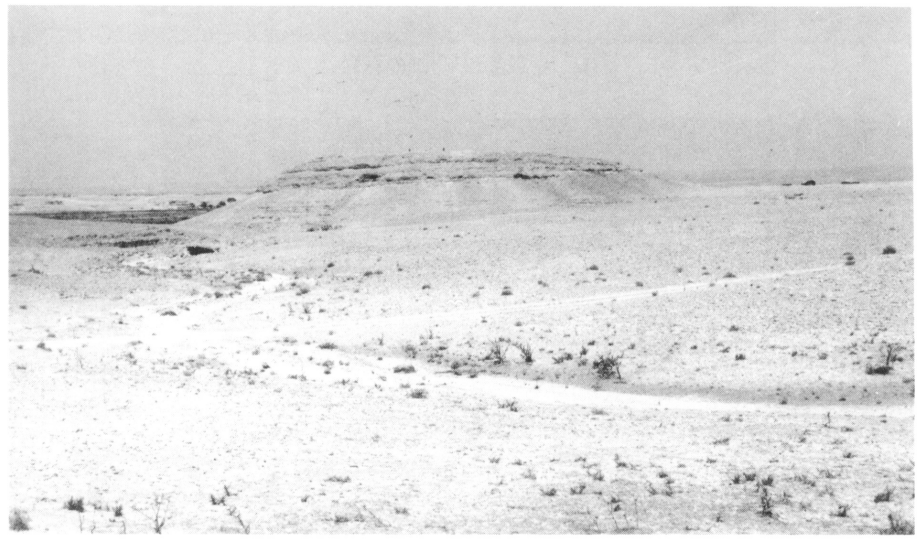
彙　報 ……(97)

国士舘大学イラク古代文化研究所

正 誤 表　CORRIGENDA (VOL. III-IV)

	誤 errata	正 recta
p.34 l. 15 p.36 l. 2	p.38	p.50
p.35 l. 12	(S S —Z)	(S>—Z) S
p.39 l. 13	永年	永平
l. 26 l. 28	袤服	袞服
p.45 l. 29	ルポ・レスニチェンコ	ルボ・レスニチェンコ
p.49 l. 8 l. 10	Y 状	縄状
p.53 目 次	岩壁面	岩壁画
l. 16	アオシス	オアシス
p.56 l. 8	Hassanain	Hassanein
l. 13	物質学	地質学
p.61 l. 32 p.62 l. 4 p.65 l. 11 l. 17	ガンビセス	カンビセス
p.62 l. 6	Macavlay	Macaulay
l. 32	Sckhet	Sekhet
p.63 l. 14	強力の	強力な
p.64 l. 2	アブリエス	アプリエス
l. 21	カルが	カルガ
p.68 l. 36	Gohn	John
p.71 l. 2	土L	土壌
l. 15	大破L	大破壊
p.72 l. 13 l. 24	*Al Jawfikia*	*Al Tawfikia*
l. 33	*Gupiter*	*Jupiter*
p.73 l. 26	*Last*	*Lost*
p.74 l. 22	*surreying*	*surveying*
p.94 l. 7	tapestrv	tapestry
l. 11	varns	yarns
l. 15	kdnds	kinds
l. 16	cane	case

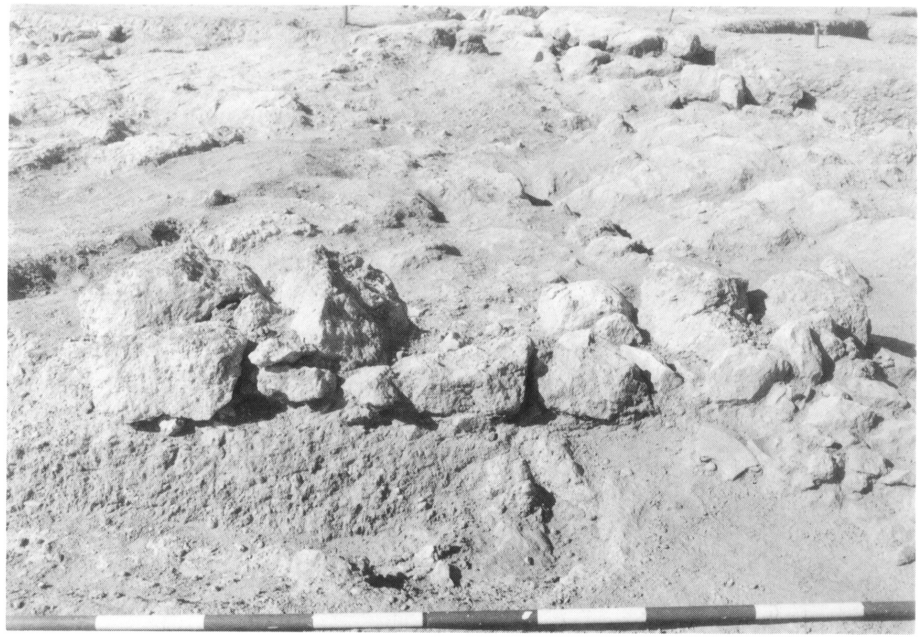
1　西方対岸よりテル・アブ・ソールを望む



2　南東側よりテル・アブ・ソールを望む

3　ユーフラテスにかかる五連のナウール（揚水用水車）の遺構

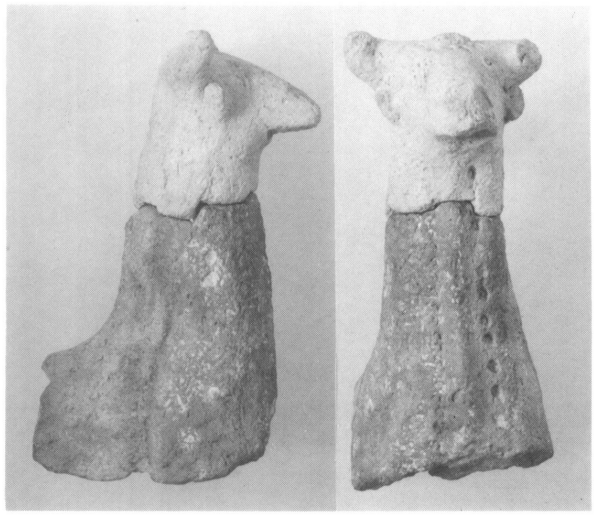
図版 2



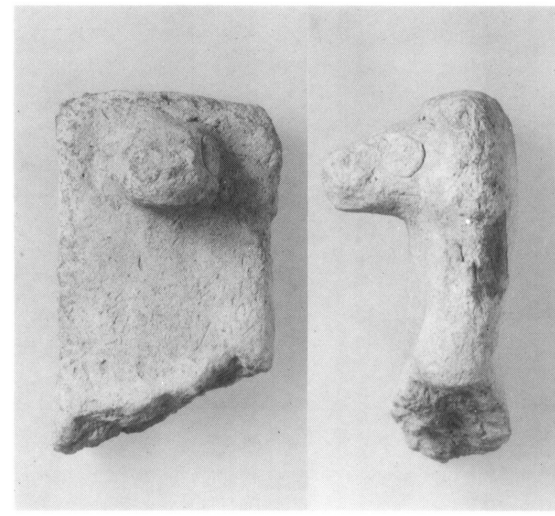
1　丘頂部LIV-25の石列

2　テル西斜面の井戸状たて坑

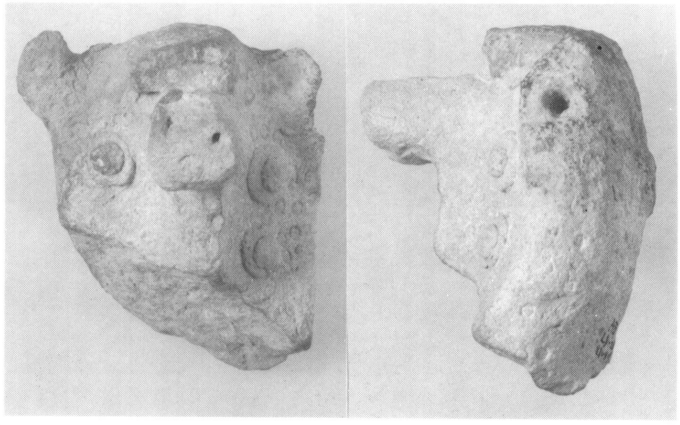
3　屈葬人骨（左方が西）



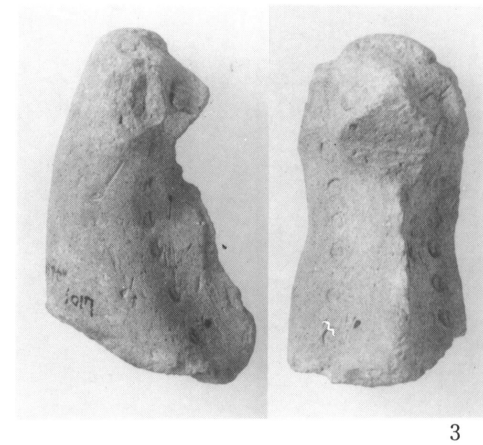
1



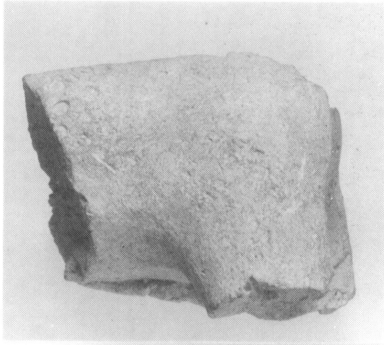
6



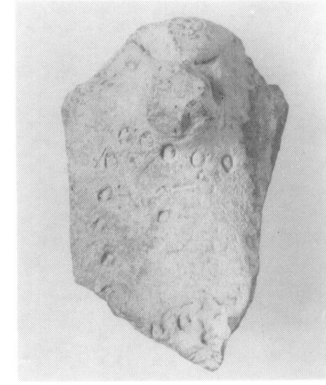
5



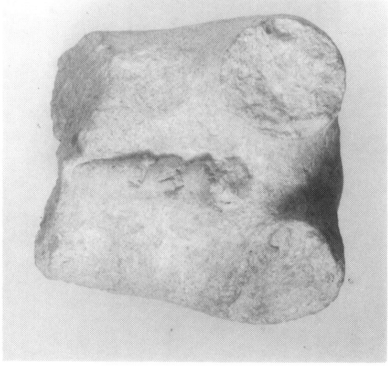
3



7

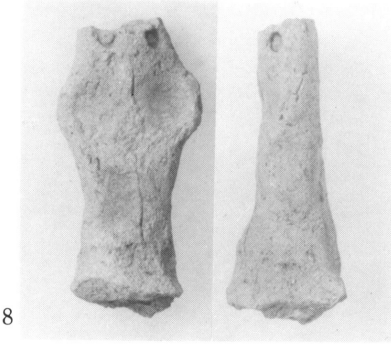


2

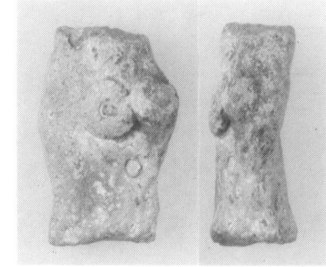


4

8



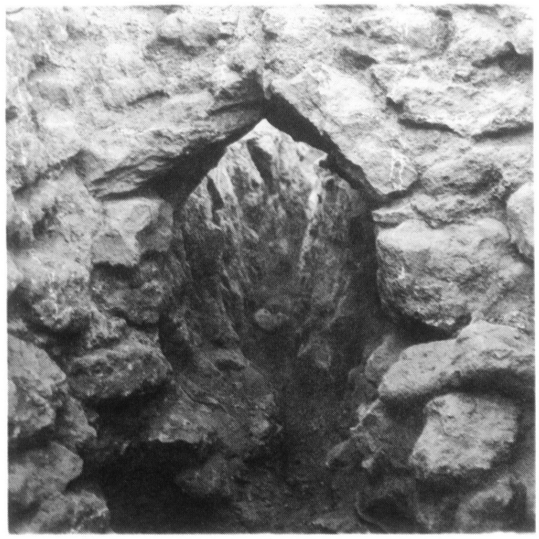
9



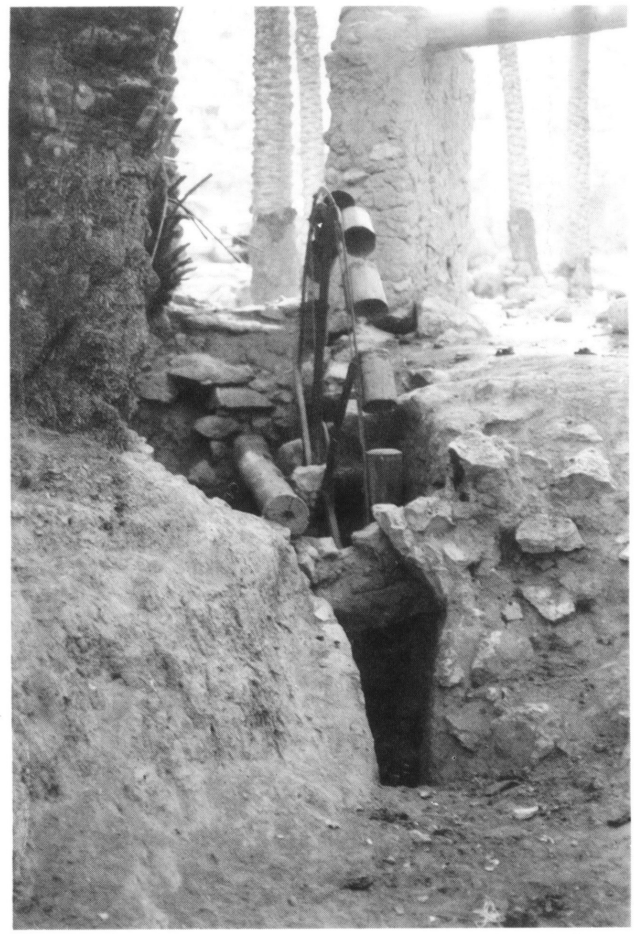
丘頂部出土の土偶（各番号は図 12 の遺物番号に対応）

図版 4

1　マウンドDの遺構（北東から）



2　マウンドD石室北面の開口部



3　アナの町中にある水車

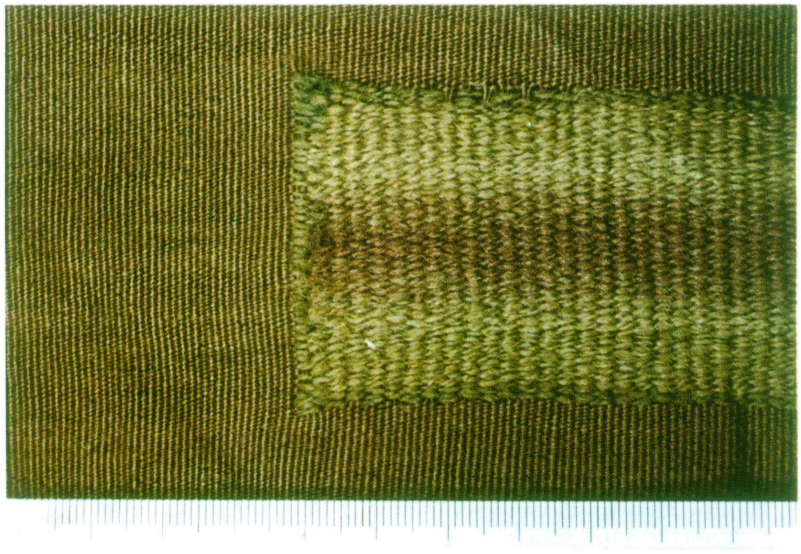
1　ライヤーシ墓に集う日本隊とイタリア隊

2　マァジド村北の墓坑（北から）

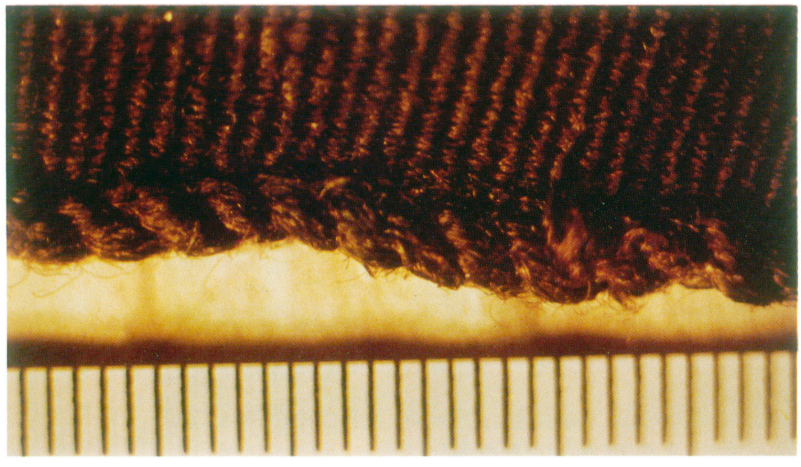
3　マァジド村南の墓坑（西から）

図版 6

1　ノイン・ウラ出土下袴に見られる
経糸始末（裏より）

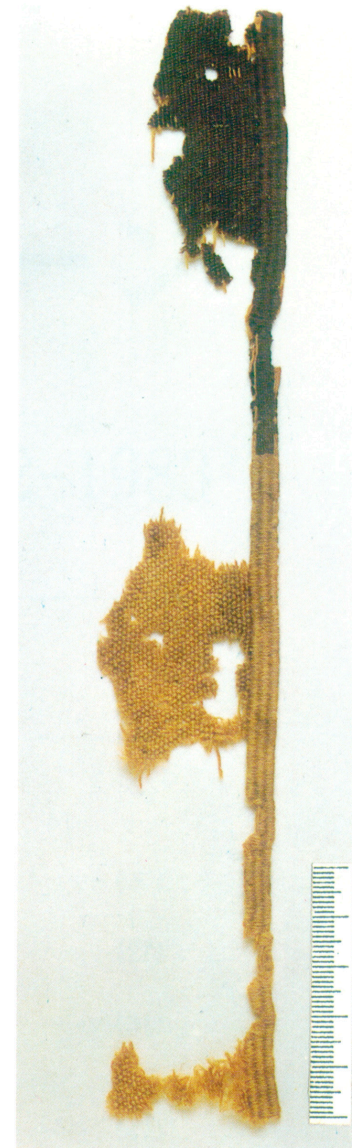


2　下袴の繧繝縞



3　パズィルク２号墳出土
絨毯の経糸始末

1　Specimen　226



3　Specimen　67

2　Specimen　225

ラーフィダーン

第III-IV巻　1982-1983

目　次

ラーフィダーン第III-IV巻出版に際して　藤井秀夫 ……(3)

テル・アブ・ソール, 1981, 発掘調査概報
国士舘大学イラク考古学調査団
テル・アブ・ソール班 ……(5)

イラク, アル・タール洞穴群の動物遺体　安部みき子 ……(27)

蒙古ノイン・ウラ出土下袴について　坂本和子 ……(31)

アル・タール出土染織品研究その後
藤井秀夫・坂本和子・岡田浩海・市橋幹蔵 ……(47)

M. ミトワリ著：エジプトのリビア砂漠のオアシスと
ナイル渓谷の歴史的交渉　訳者：葭本鶴江 ……(53)

前千年紀のアラビア湾岸考古学（英文）　ムニール・ユーセフ・タハ ……(75)

イラク, アル・タール洞窟出土の染織遺物（英文）
藤井秀夫・高木　豊・坂本和子
岡田浩海・市橋幹蔵 ……(89)

彙　報 ……(97)

国士舘大学イラク古代文化研究所

ラーフィダーン第III－IV巻出版に際して

藤井秀夫

本論文集は第III巻と第IV巻の合冊本である。御承知のように，第I巻は、イラク古代文化研究所が主となって実施した，アッタール洞窟調査（1969年から1977年まで）出土の染織，皮革遺物の研究に関する特集記事であり，第II巻は，同じくイラク古代文化研究所が主となって実施した，ハムリン盆地遺跡調査(1977年から1981年まで)の概報記事であった。その直後，イラク古物遺産庁から，ハディーサ盆地遺跡の緊急調査を依頼された。これは，ハムリン盆地遺跡の場合と同様，ユネスコを通じて，日本政府経由のものであった。外務省にも，文部省にも，これに応じる対応予算がないため，私は柴田梵天総長にお願いし，本学の学術研究として，ハディーサ遺跡調査を採り上げて頂く事とした。私学振興財団の学術研究振興資金の援助を仰ぐ所以となったのも，このためである。アッタール調査とハムリン調査が文部省科学研究費海外学術調査で行われた事とは軌を自ら異にする。このため，当初予定していた第III巻の出版は，この俄かに生じたハディーサ盆地遺跡調査のため，一年間，見送りせざるを得なくなった。これが，第III巻と第IV巻合冊出版のいわれである。

そして，1983年12月現在，わが研究所は，イラク古物遺産庁の重ね重ねの要請を受けて，さらに，エスキ・モスールの発掘調査を遂行中である。ハディーサ調査は，オウシィア調査をもって今月，成功裡に終了した。この報告出版は，ハムリン調査の本報告，アッタール調査の継続報告と共に，将来に残された私達への宿題となった。一調査毎に区切りをつけながら，報告書を出版していきたい私達の願いとは，裏腹に，緊急ダム建設のために，水没を余儀なくされている遺跡の調査を，東京で，手を拱ぬいて，いるわけにはいかない。どんな苦難が立ちはだかろうと，現地調査を客観情況に応じ，遂行していく事が，私達苦学生の使命でもある。

しかし，私達はこうした情況下においても，少しでも斯界に，年次報告書をおくらねばならないと判断し，ここに合冊本をもって，本研究所の紀要を出版した。

従って，本巻は，御披読頂ければ，御理解を頂けると思うが，第I巻，第II巻の特集記事とは異なり，単一論文，報告を内容とするものである。識者の方々のよろしき御叱正を願う次第である。本報告を通じ，「ローマは一日にしてはならず」という言葉通り，私達の歩みを見て頂ければ幸いである。

なお、この機会を得て，一事記しておきたい。

すなわち，1981年発行の第II巻，イラク，ハムリン調査の概報（特集記事）が上梓されるや，イラク古物遺産庁は，アラビア語編を加え，かねて，イラク古物遺産庁が認める正式報告書として，同著を世に出すことを提案してきた。そこで，1982年，同庁は正式に同庁の遺跡調査局長 Dr. Munir Yoosif Taha に命じ，同上概報の英文記事の翻訳を行わしめ，1983年11月，同報告書は，日本語，英語，アラビア語の合本版として誕生した。もとより，本文のみのアラビア語の別刷も出版させた（図面，写真は，1981年出版の日本語，英語に共通)。

この三国語より構成されているイラク・ハムリン調査概報が，古物遺産庁発行シリーズである，ハムリン盆地遺跡調査報告第6巻となって古物遺産庁へ引き渡されたことはいうまでもない。これが刊行にあたり，携さわれた関係者各位に対し，茲に，あらためて深甚な謝意を表わしておく。

メソポタミア考古学に関する限り，日本はまぎれもなく後進国である。欧米勢に如何にして，一日も早く追い

つき，そして，追いこすかが私達の宿志である。それには，絶えざるフィールド・ワークがまず要請される。そして，次に報告書の作成である。

私達は，どのようにして，これらの二要素をこなしていくか？

それは私達への試金石でもある。

これからも，従前にまして，フィールド・ワークと報告書作成，そして，その出版を遅滞することなく，実施していく積りである。

1983年12月27日，イラク共和国バグダードの宿舎で，これを識るす。

（国士舘大学イラク古代文化研究所所長・教授）

テル・アブ・ソール，1981，発堀調査概報

国士舘大学イラク考古学調査団
テル・アブ・ソール班

国士舘大学イラク考古学調査団は，1981年6月から12月まで，イラク考古庁との共同事業として，ハディーサ地域におけるテル・アブ・ソールの発掘調査とライヤーシ遺跡の分布調査を行なった。調査団の構成はつぎのとおりである。

調査団代表　藤井秀夫（国士舘大学教授，オリエント史学）
発掘主任　岡田保良（　同　講師，建築史学）
調査員　川又正智（　同　講師，考古学）
井　博幸（　同　助手，考古学）
小口裕通（　同　助手，東洋史学）
松原隆治（南山大学大学院，考古学）
牛木久雄（東京工業大学研究生，地球物理学）
ミズヘル・モハメッド・ラヒーム（イラク考古庁調査官）

ハディーサ・ダムの建設によって水没する地域の考古学的調査は，1978年以来イラク考古庁によってすすめられていた。1979年，考古庁はユネスコを通じて各国政府にこの地域における緊急調査の要請を行なった結果，フランス，イタリア，ポーランド，イギリスなどとならんで，日本からも私たち調査団がこれに応ずることになった。翌1980年，国士舘大学では，この調査を大学単独の事業とすることを決める一方，ハムリン遺跡調査の整理に従事していた藤井は，他の調査団員とともにハディーサ地域を訪れ，考古庁のモハメッド・ハジャージ氏の協力を得て，調査対象とする遺跡の選定にあたった。この年の6月と7月には，考古庁長官から藤井と国士舘大学総長あてに，正式の招請状が届いている。

藤井が選定した遺跡は，一つはテル・アブ・ソール，他の一つはライヤーシ遺跡であった。当初の計画では，1981年にテル・アブ・ソールの発掘調査を完了し，1982年以降ライヤーシ遺跡の調査にとりかかることとし，大学では，日本側が分担する調査費用の全額を，しかも3ケ年にわたって用意するという配慮がなされた。さらに，私学振興財団よりこの調査にかかる経費の一部を助成していただくことになった。

1981年5月，国士舘大学柴田梵天総長は，藤井以下の調査団とともにイラク考古庁を訪れ，ムアイヤッド・サイド・ダメルジ長官と相互に，ハディーサ地域における国士舘大学による発掘調査に関する協定書をかわすはこびとなった。調査団は，翌6月に現地にはいり，調査を開始した。

調査期間中，ハディーサ地域の責任者ラーティブ氏をはじめとするイラク考古庁の方々，またバグダードの日本大使館やイラク駐在の多数の日本企業の方々などから，惜しみないご芳情をいただいた。心より感謝申し上げる次第である。なお，現地調査及びこの報告の作成にあたっては，調査団員以外にも国士舘大学イラク古代文化研究所の多大の協力を得，特に沼本宏俊副手には多くの整図を担当していただいた。合せて謝意を表したい。

（藤井秀夫・岡田保良）

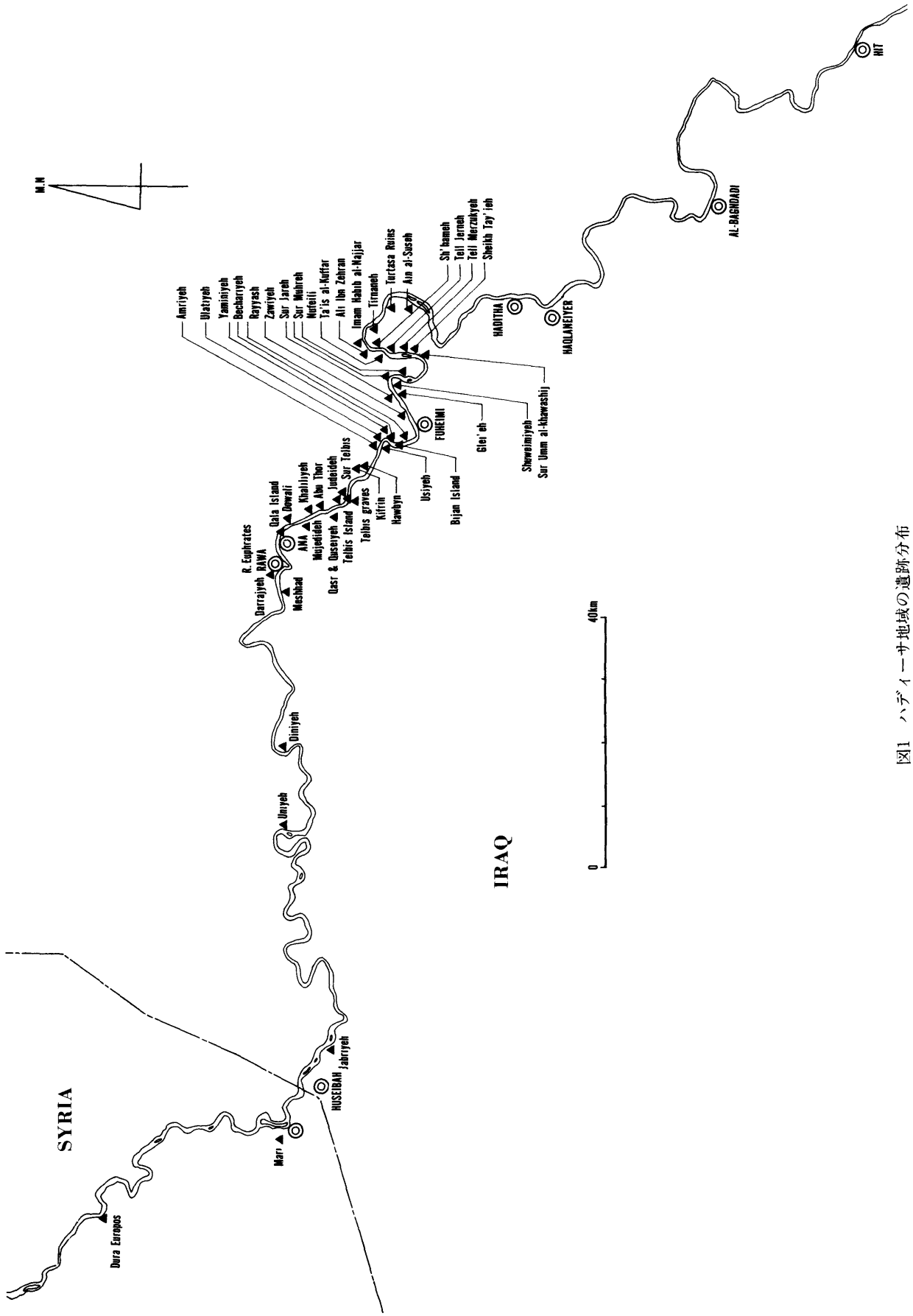


図1　ハディーサ地域の遺跡分布

1　テル・アブ・ソールの立地

テル・アブ・ソールは，アナ市の東南約8㎞，ユーフラテス川の左岸から450mはなれた地点に位置する。この丘は，河岸に平行してつづく段丘の上に，さらに突出した形でそびえる石灰岩からなる独立丘である（図版1-1・2）。ユーフラテス川の水面からの比高は，段丘上面で約20m，アブ・ソール丘頂で約40mである。海抜高は付近の水準点から計測して，丘項最高部で164.1mであった。[1)]

このあたり一帯からシリアにかけては，川原は耕作地となり，段丘の崖で限られて帯状に長く続くが，段丘の上面では直ちに沙漠となる。町や村は河畔の低地または崖の上の縁辺に沿って形成される。畑では，ナツメヤシのほか，タマネギやジャガイモなど多種類の野菜を栽培しており，灌漑のための水車と水路橋が景観に特徴を与えている（図版1-3）。

紀元前9世紀，アナ付近はバビロニアとアッシリアの境界域にあたり，スフという小国があって，その首長の住む城館がアナ島（地元ではカラと呼ばれる）にあった。アッシリアのトゥクルティ・ニヌルタ二世は，この島を屈服させたことがあり，後にバビロニアのナボポラッサルがこの地まで進めた軍を退却させねばならなかったともいう〔Smith, 1970〕。

アナの町を含む，ハディーサ・ダムによる水没予定地域には，主としてイラク考古庁による1978年以降の調査によって多数の遺跡が確認されている（図1）。それらのうちでも後期アッシリア時代の遺跡が最も顕著である。アブ・ソールの上流7㎞にあるアナ島，5㎞下流に位置するテルビス島，その左岸にあるテルビス城址，さらに下流の，ザウィヤ，グレア，ジュルア城址，ビジャン島などでは，その時代の城館や住居群が発掘されている。また，オウシーヤやサワリの遺跡では，初期王朝期の遺構が発見され，前2千年紀の遺跡とくに墓地の分布もいくつか知られている〔British School of Archaeology in Iraq, 1981〕[2)]。そのほか，後期アッシリア時代の墓地は全域に分布し，ヘレニズム時代から初期イスラム時代の遺跡も少くない。中でも，アブ・ソールの下流10㎞の左岸に立地するキフリン遺跡は，パルティア期の都市遺跡として注目され，現在トリノ大学を中心とするイタリア考古学調査団によって調査が継続されている。また，アブ・ソールの2㎞上流には，八角形ミナレットの遺跡を有する廃墟ハリリア遺跡があり，近代の探検家たちは，これを古アナの一部とみなしている。[3)]

F.R.チェスニーが作図した探検図によれば，ユーフラテス川のアブ・ソールのふもとにあたる地点に，Camel Fordという記載があり，そこは人畜が渡河することができるような浅瀬であった。そこは現在でも，人が歩いて渡れるほどの深さである。かつて，アブ・ソールの丘は，旅人や行軍にとって，単なるランドマークとしてのみならず，そこで大河を横断することのできる交通の要地にあたっていたと推定できる。

テル・アブ・ソールには，南北約100m，東西約80mのほぼ平担な丘項部に，多数の遺物が散布していたが，このほかにも，段丘のテラス上面にも一部に散布地があり，さらにそのふもとの耕地となっている川原一帯には，崩れた壁や土器片の散布を伴ういくつかの小丘が点在していた。私たちは，丘項を精査するのと併行して，丘麓部をも調査すべく，各所にトレンチを設けて発掘を行なった（図2）。[4)]

2　丘項部の発掘

1）層位と遺構

テル・アブ・ソールの項部には，周縁に沿って近代の軍事用トレンチがめぐる。その内側の地表面には多数の土器片が散布しており，とりわけ最高所にあたる，中央のやや西側（グリッドLIV-24・25付近）で濃密であった。

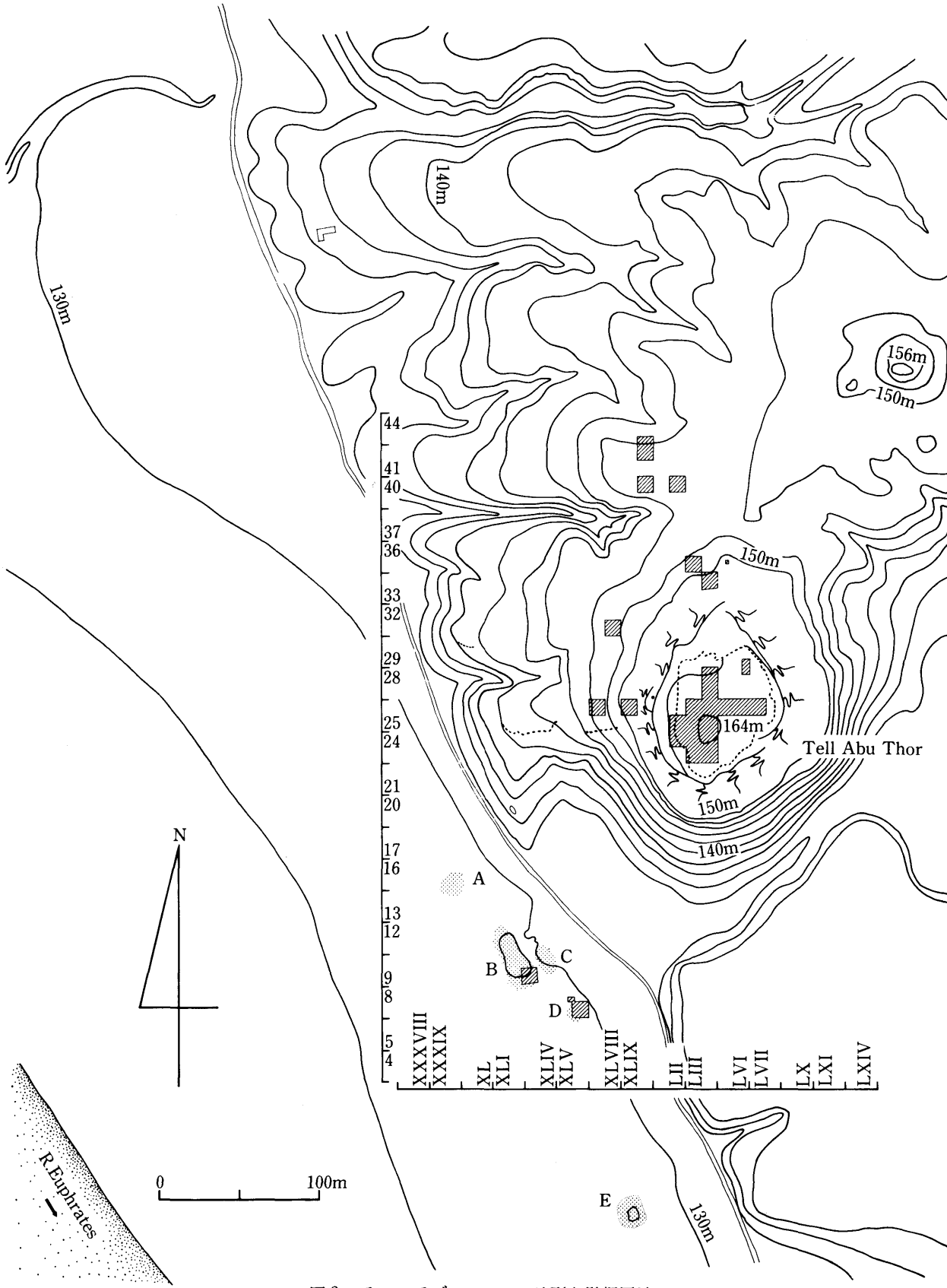


図2　テル・アブ・ソールの地形と発掘区域

164m
S
LIV-24
164m
LIV-25
greyish silty soil
greyish fine sand
164m
LIV-26
N
pinkish fine sand
bed rock
164m
E
LV-26
164m
LIV-26
164m
LIII-26
W
0
2m

図3　丘頂部の層位

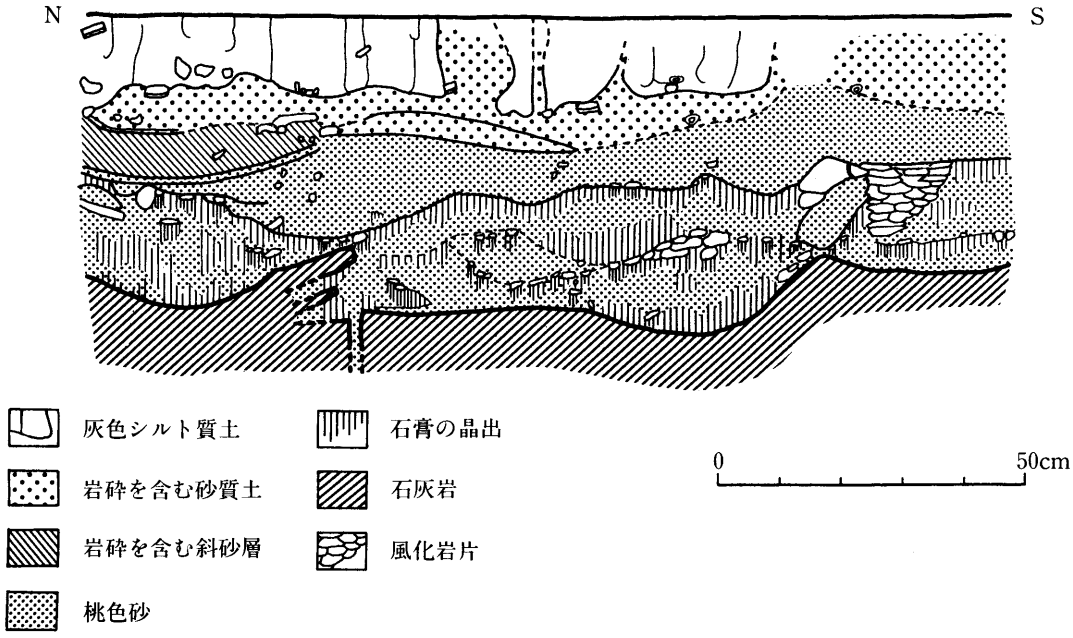


図4 丘頂部LIII—25東壁の土相（牛木隊員による）

しかし，遺物を包含するのは，ほとんど表層のみで，一部には基盤となる岩体を露頭するところすらあった。

丘頂部に堆積する土は，大きく，遺物を含む上層と含まない下層とに分けることができ，一部に限って中間的な層位をみとめる(図3)。上層は，石灰岩の礫を含む明灰色のシルト質または砂質の表土で，中央の限られた範囲でのみ20～30cm程度の厚さがあり，周辺部ほどうすくなる。出土する遺物は細片ばかりで，完形に復しうるものは一点もなく，土器片に混じって近代の銃弾が発見されるなど，この層は後代の攪乱を著しくこうむっていることがわかる。下層は岩体の直上に堆積する細砂層である。主として自然の風成砂から成るとみなしうる。この層には，基盤の風化によって生じた石灰岩の礫を多数混入すると同時に，下半には，整然と霜柱状に結晶化した天然石膏をみとめる(図4)。遺物は含まない。

グリッドLIV-25付近には，下層にあたる無遺物の細砂層が希薄で，上層の直下には灰色を帯びた別の細砂層があり，そこからは，土器の細片やビーズ類が出土する。これが中間層である。ある時期に，下層の砂層が一部攪乱されたことを示すものと考えられよう。また，グリッドLIV-25の東北部では，例外的に下層の中ほどの空隙から，ガラス製ビーズが数点出土したが，この層が人為的に掘りおこされたとは考え難く，より上の層にあったビーズ類が，自然に生じた下層の中の空隙に沿ってころがりこむことがあったと考えている。

この同じグリッドの南部に，ひとかかえほどの石をならべた壁体あるいは壁の基礎の一部とも見られる遺構を発見した(図版2-1)。長さ2.0m，幅0.5mで，1段のみ遺存していた。この石列は中間層より上に築かれており，石の間や直下には，上層と同様の土器片が出土する。この地点から南側へ，グリッドLIV-24にかけて，こぶし大の礫が不定形に集中し，かつ遺物も多数出土することから，これを何らかの遺構があった痕跡とみなすこともできる。さらに，グリッドLIV-25からLIII-25にかけては，かつては露頭していたと推定しうる，岩体の平滑な面を検出した。その上面は，いかにも過去に利用されたと思えるほどに平担であった（図6)。

丘の西斜面の中腹には，岩体をくりぬいた円形の井戸状のたて坑がある(図版2-2)。直径1.5mで，深さは7.1mまで掘り下げたが，底面には至らなかった。内側面に，0.5m前後の間隔で刻まれた，垂直にならぶ窪みを3列確認した。これらは足掛りと見られるが，掘り下げた最下底より下にはないと観察できたので，もし埋まった

土をすべて排除したとしても，深さは8 m前後であろうと推定している。発掘する前の，たて坑周辺にうず高く堆積していた砂礫を観察すると，この遺構が，丘頂やテラス上にめぐらされた軍事用トレンチと同時期に利用されたらしいことがわかる。しかし，それ以前にすでに掘られていた可能性も否定できない。貯水あるいは物資の収納のために掘さくされたと考えているが，積極的根拠は乏しい。

グリッドLIII-24では，棺を用いず，たて穴に直接屈葬された人骨を発見した(図版2-3)。顔は南を向き，骨自体はあまり長期間を経ていないように窺われた。明瞭な埋葬はこれ一体のみであったが，グリッドLIV-25付近には，ビーズ類と微小な骨片が混じって出土する地点が3箇所あり，これらは多数出土する土器類が示す時代に近い頃の埋葬の痕跡とみなしている。

2）遺物

土器とその他の遺物は，上層と中間層の発掘によるほか，地表面からも多数採集した。中間層から出土した遺物は，少量の土器細片とビーズ類で，それらは上層から出土する遺物のうち，近代以降の製品を除けば大差ない。

土器類は，すべて小破片で，完形に復原できるものは一点もない。器種としては，ゴブレット，ビーカー，壺，椀が多く，三足容器の破片もみられる。施釉された土器は一点もない。そのため，土器片の整理，分類にあたっては，まず口縁部と底部に大別して実測を行ない，それぞれに細分類をして図示することとし，これに特徴的な体部だけの破片の図を加えた（図7～11)。

概観すると，土器の胎土は，一部の例外(149，170，171)を除けばどれもよく類似している。色調は，桃色を帯びるものと緑灰色のものがあり，胎土の中には，大かれ少なかれスサの混入が見られる。焼成はやや軟質といえる。それらの中で，小型のゴブレット（62～74）には緻密な胎土を有するものが多く，小型ないし中型の椀（44～61）も同様である。また，椀の口縁部とみなしうる破片の中には，全面に赤色化粧土を施したものもある（44～48)。ビーカー型の底部にも同様の化粧土をみとめる例（113）がある。

例外とした3点は，器形としても出土例は少なく，胎土にはほとんどスサを混入しない上に，焼成もきわめて堅緻である。底部の破片のうち，確実に三足容器と復原できたのは1点のみ(157)であるが，これとよく似たやや偏平な脚部と思われる破片は多い。また，これらとは異なった形状をした，土偶の破片とまぎらわしいような棒状の脚部らしいものも多数採集している。

土器のほかには，100点近い素焼きの土偶と，多種類の材料で作られたビーズ類200点以上を採集している。土偶のほとんどは動物をかたどったものであるが，写実性に富んだものから粘土板状に簡略化されたものまで種類が多い(図12，図版3)。それらの動物を特定することは，なかなか容易でないが，牛，羊，鳥など，いくつもの動物がモデルにされたらしい。中には人間像とみなしてもよいような小品もある。土器類と同様，すべて破片ばかりで，完形に復しうるものは一例もない。

ビーズには，石製，ガラス製，貝殻製のほかに，卵殻（ダチョウのもの）を円く打ちかいて中央に穿孔したものも見られた(図13)。これらは上層からも出土するが，グリッドLIII・LIV-25付近の中間層から，微細な骨片を伴って出土する例が多い。

3　丘麓部の発掘

丘麓といっても，段丘の上には近代の軍事用トレンチをみるほかには，顕著な遺構はない。ただし，大型の甕型土器の胴部2点を別々の場所で発見した(XLIII-30とL-43)。また，丘から300 mほど北の，テラス上面には，

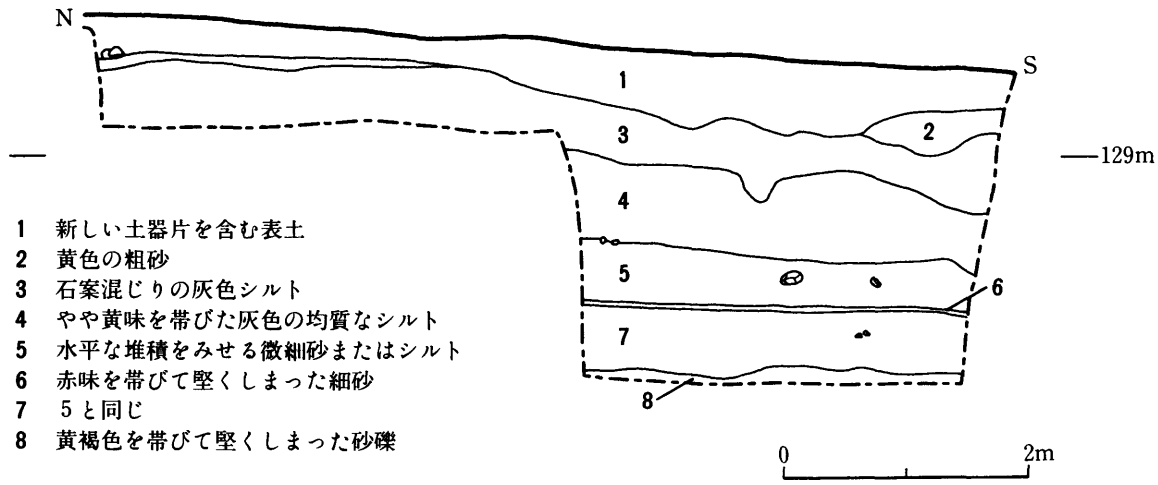


図5　マウンドBトレンチ東壁の層位

それらに類似した大型の土器片が多数散乱している地点もあった。

段丘を下りきった西麓の耕作地には，その南よりに，5つの低く小さなマウンドが点在する（図2，A～E）。私たちは，これらのうち，マウンドBとマウンドDを試掘し，マウンドEの平板測量を行なった（図14）。

マウンドB　南北にやや長いマウンドBでは，地表に比較的土器片の目立った南部を試掘した。その結果，地表下の浅いところに，ごく限られた種類の土器片ばかりが大量に投棄されていたことが判明した。それらには，窯かすとみられる破片も多数混じっていたことから，発見することこそできなかったが，近くに土器窯が存在すると推定している。出土した土器の器種は，ほとんどが丸底の把手付壺である。把手を2つ持つ例は，一点も確認していない。短時日の間にまとめて生産されたものであろう。

さらに深くトレンチを設けた結果，地表下1.6m以下に，かつて河床になっていたらしい土層を確認した（図5）。これより下，地表下2.5mまでは，磨滅した土器片を少量出土する。これらの小片は，器形は判然としないが，その色調や胎土をみる限り，アブ・ソール丘頂に最も多くみられる土器と変りがない。

マウンドD　このマウンドは，周囲より0.2～0.3mほどの高まりしかないが，地中には，3m近い立ち上がりを有する石組の室が埋れていた（図15）。その遺構の平面はD字型をしており，南北4.9m，東西2.7mの大きさを有する（図版4-1）。西側と南側の壁がわずかに外傾していることと，外壁面がきわめて粗雑であることから，この石組の室がつくられるにあたっては，まず大きなたて穴が掘られ，その西と南の側壁にもたせかけるようにして石が積まれたことを知る。基底の砂礫層上面から3段までは，比較的大きな石が，粘土をモルタルとして積まれる。それより上は，やや小ぶりの石を，細礫混じりの石膏で固めながら積みあげている。このモルタル材料のことを，現地の人たちはキルスと呼んでいた。

この室の北面には，高さ1.1m，幅0.5mの開口部があり，北方にのびる同様な石組の暗渠に通じる（図版4）。また西壁には，基底面から1.9mの高さに，上記の開口部と同じつくりの龕を設けている。

室内を埋めていた土砂は，基底から0.6m前後までは，比較的大きな土器片が混在する堅緻な砂礫（下層）で，それより上は，周囲の耕地の下になっている土と同様なシルト（上層）であった。しかし，龕の中の堆積や，西壁に接するわずかな部分には，北から南へ約10分の1の下り勾配をもつ砂層とシルトとが互層をなす状況を観察している。このことは，室内が一度埋まったあと，再度掘りなおされた後に完全に廃棄され，その前とはまた異なった状況で埋没してしまったことを意味しよう。

上層と下層及び室外から出土した遺物は，破片ばかりであったが，ほとんどが同じ器形の土器であった。それは，円筒形の胴部とくびれた高台をもつ瓶である。近年まで，近郷の水車にとりつけられ，水を汲みあげていた瓶とよく似た形と大きさで，焼成や口縁部，底部のつくりがやや粗雑であるという程度の差にすぎない。この種の土器のほかには，内面に施釉された大型の椀形土器の底部，緑色釉の小陶片などがわずかに出土した。

こうした事実から，この遺構が水利に関係した施設であったことは想像に難くない。つまり，北側の暗渠によって石室内に水をひきいれ，それを家畜などの動力で水車を回すことによって汲みあげるという，アラビア語でサキーア，日本では時としてペルシア井戸とも呼ばれる，水車つきの井戸であったと推定するのである〔Forbes, 1965: pp.32-43〕。これがいつ頃のものであったかは決め難いが，非常によく似た石組を伴う水車の遺構が，現在のアナの町にも遺存していることに注意したい（図版6-2）[5]。

4　まとめ

アブ・ソールの丘頂に，顕著な遺構は発見されなかった。また，丘麓部のマウンドDで発掘した遺構も，丘頂と関係のある施設とは考えられない。とはいえ，丘頂から多数出土した土偶は，他に類例が乏しく，この小丘が，古代に特殊な目的で利用されたと想定しうる点と，それより後の時代のこととはいえ，今日とは異なった水利施設が低地部に展開していたことを知ることができた点において，今回の発掘調査の目的は果しえたと考えている。

ここで，アブ・ソールの利用状況について，あらためて検討してみよう。丘頂から出土した遺物として，多数のビーズがある。骨片の伴出と考え合せると，それらが埋葬に伴うものであったことは容易に想像できる。そして小片ではあるが，他の遺跡の墓址に多数出土しているような大甕の破片も少なからず採集している。もし，この丘頂における埋葬が，いわゆる甕棺埋葬であったとすれば，当時の地表は現在より少なくとも1m前後高くなければ，墓坑を穿つことなどできなかったにちがいない。それらが今では掘方すらとどめないのである。それならば，この場所にそれだけの土砂が堆積した要因を何に求めるべきであろうか。風成層や岩体の風化が，それほどの土砂を生むことは，現在の周辺の丘をみても，とうてい考えられない。したがって，人為的に運びこまれたと考えるほかなく，またその目的が，わざわざ棺を埋めるためであったとは思えない。

結局のところ，おそらくは，特異な土偶の類を使用するような，何らかの非日常的施設が設けられることがあり，それが後に廃墟となり，墓地を提供することになったと考えるほかなかろう。その施設とは，望楼としての建物であったかもしれないが，多数の土偶が示唆するところでは，祭場などの宗教的な施設を考えておきたい。そうすれば，きわめて地方色の強い土偶の存在と，この地一帯に普遍的にみられる後期アッシリア時代の墓制との前後関係も納得できるし，それは多くの土器が示唆する年代観とも矛盾しないように思われる。

最後に，マウンドDで発見したサキーアの遺構は，この地域の水利，灌漑の歴史に看過できない問題を投げかけた。その一つは，ユーフラテス川にかかる揚水が目的のナウールと，このサキーアとの関係であり，いま一つは，キルスと呼ばれた細礫混じりの特殊なモルタルが，生産地の特色なのか，あるいは恣意的にそのような材料を用いた用途または時代があったのかという問題である。いずれに対しても，私たちは現在明確な解答を用意していないが，きわめて興味深い問題である。

5　ライヤーシ遺跡

私たちは，テル・アブ・ソールの考古学的調査を終えたのち，次のシーズンに発掘調査を予定していたライヤ

ーシ遺跡の，表面踏査を含む全体測量を実施した（図16）。

アブ・ソールからユーフラテスを下ること約17km，その左岸に，病院や学校をもつ比較的大きな村マァジドがある。普及している地図の中には，この対岸にある村フヘイミを記しているものが多い。マァジド村をはさんで，崖上の縁辺に沿って，小さなマウンドをなす墓址や，土器片の散布する地点がいくつかある。この全部がひとつのまとまりをもった遺跡とは考えられないが，村人たちがひとつのマウンドを指していうライヤーシの名をとって，遺跡名を代表させることにした。その範囲は，北の端を限るワジ・ヘルネフから南へ，マァジド村をはるかにこえて，約3.5kmを対象としている。川岸から東へは，約1kmを調査の対象とした（図版5-1・2）。

土器片が散布する状況は，ワジ・ヘルネフとマァジド村との間が，最も広くかつ濃密であり，次いでライヤーシ墓付近にも多い。また，村の北と南には，現在露顕している墓坑が多数営まれており，確実なものだけで8基を数える。いずれも，平らな岩体上面から墓室を穿っており，前室のような形で階段がとりつく例を二，三確認している（図版5-3）。その形式は，テルビス遺跡やホゥビン村付近に多数発見されている複室をそなえたカタコンベが，崖の急な斜面に開口を穿っているのにくらべ，単室である点，さらにほぼ水平な地表から掘られている点など，型式上の相異を認めうる。ただ，テルビスのカタコンベは川をはさんでテルビス島に，またホゥビンのそれはすぐ段丘の上に，それぞれパルティア期からローマ時代にかけての大遺跡があり，ここライヤーシの対岸ビジャン島にも，アッシリア時代の要塞を継承したローマ時代の重要な遺跡が展開している点は共通している。

崖下の畑地には，一部に廃墟の痕跡があるものの，土器類の分布はきわめて乏しい状況であった。

私たちは，このシーズンのうちにほぼ全域の地形測量を終え，遺構と遺物の分布状況を把握することができた。翌1982年には，上記の地点を中心に発掘調査を実施する予定であったが，急拠対岸のオウシーヤ遺跡の調査に加わることになったため，1983年末現在，ライヤーシ遺跡の発掘は見送らざるを得なくなっている。（岡田保良）

注

1） ハディーサ市のダム工事事務所から，右岸にある B. M.17が標高130.482m という情報の提供を受けた。

2） 図1は，イラク考古庁作成の遺跡分布図(縮尺10万分の1)と，ここに掲げた雑誌 IRAQ の記事に基づくもので，私たち独自の情報を加えて作成した。

3） 1836年に，F. R. Chesney がユーフラテス川を舟で下り，A. Musil は1912年にユーフラテス右岸を，1915年には左岸を踏査しており，ともにアナの町に言及した記録をのこしている〔Chesney, 1850, Musil, 1927〕。

4） 1965年にこの地を通過した A. Musil は，'……we had on the left the Tell abu-Tôr, a blunt cone without ruins on it.'〔Musil, 1927: p.167〕と記しており，その当時この丘にはもはや遺構らしきものは見当らなかった。

5） アナの少年たちは，このサキーヤの遺構を，ユーフラテスにかかる多くの水車と同じくナウールと呼んでいた。

参 考 文 献

British School of Archaeology in Iraq, 1981, "Excavations in Iraq, 1979-1980" *Iraq* Vol.XLIII, London.

Chesney, F. R., 1850, *Expedition for the Survey of the Rivers Euphrates and Tigris* Vol. I, New York.

Forbes, R. J., 1965, *Studies in Ancient Technology* Vol.II, E. J. Brill.

Musil, Alois, 1927, *The Middle Euphrates,* American Geographical Society Oriental Explorations and Studies, No.3, New York.

Smith, Sidney, 1970, "The Foundation of the Assyrian Empire" *The Cambridge Ancient History* Vol.III, Cambridge.

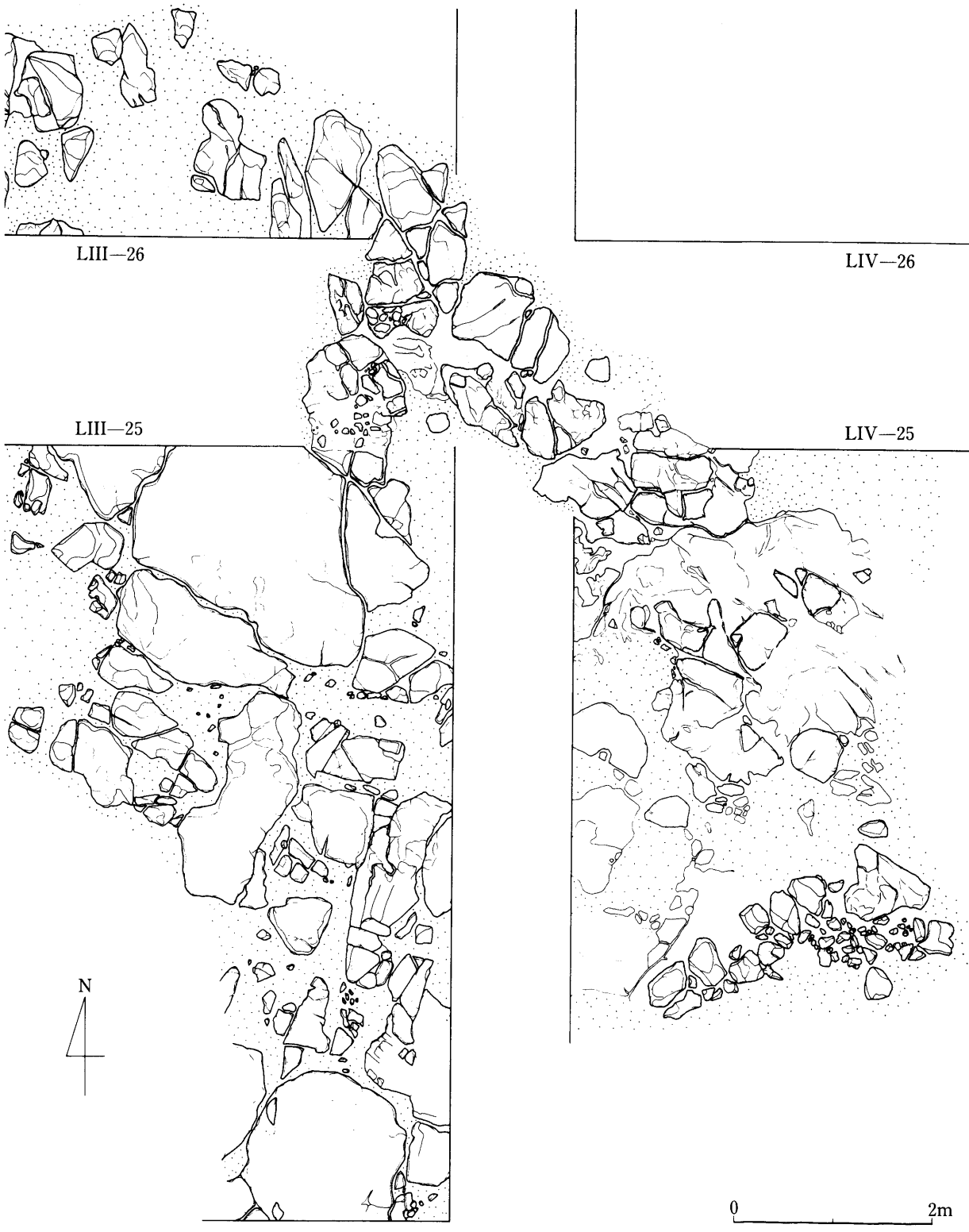


図6　丘頂部発掘後の平面

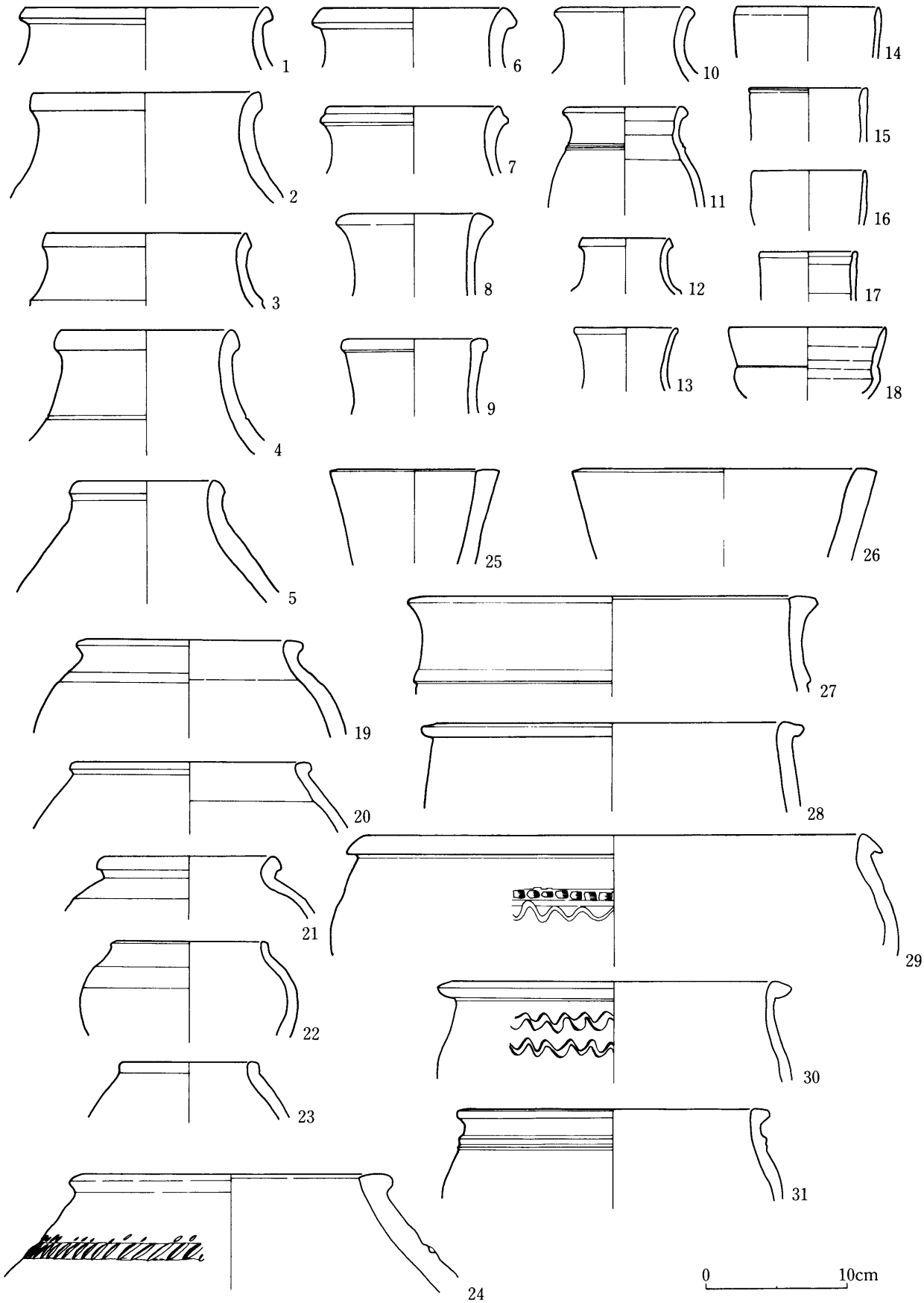

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
10cm

図7　土　器　その1

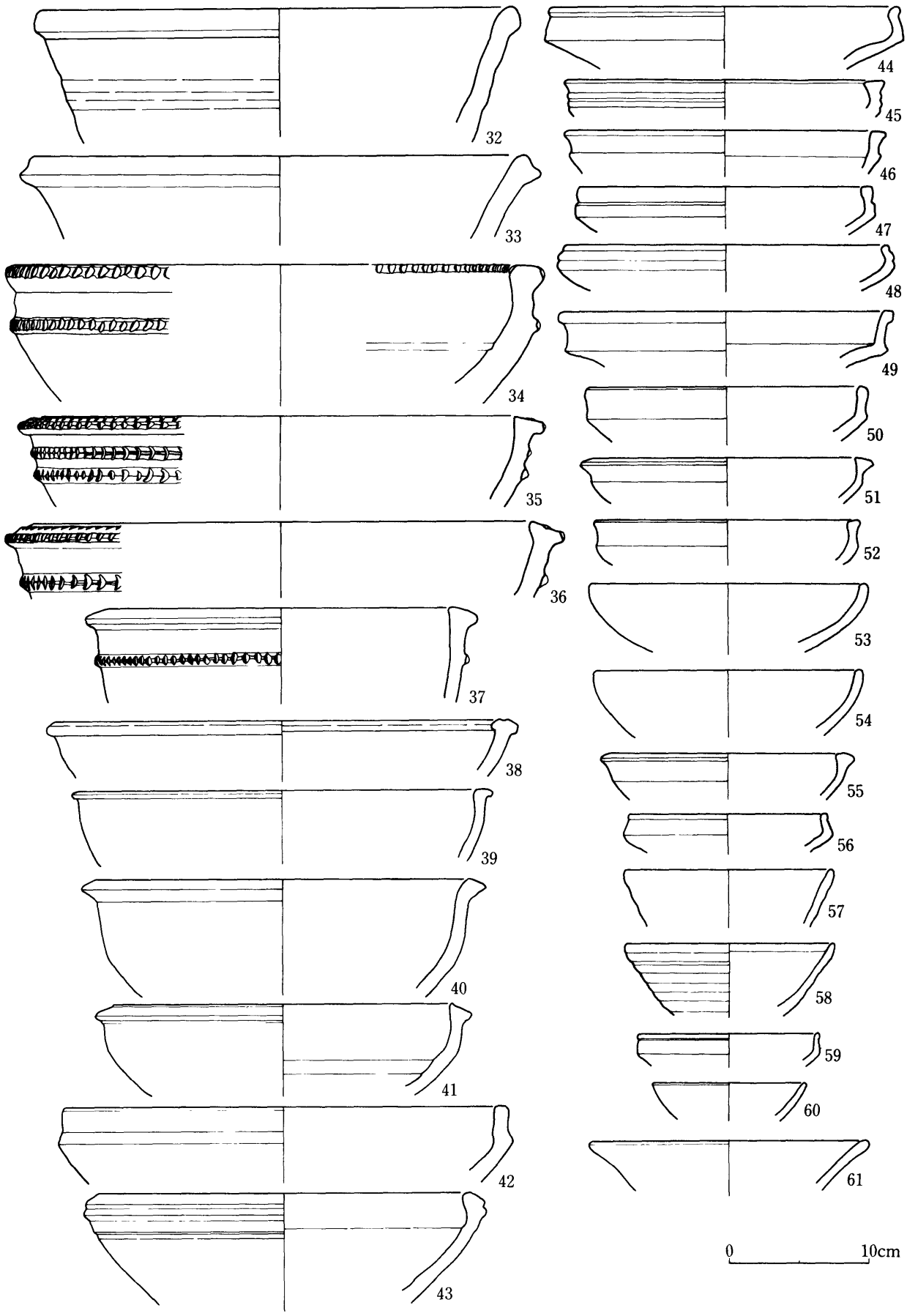

32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
10cm

図8　土　器　その2

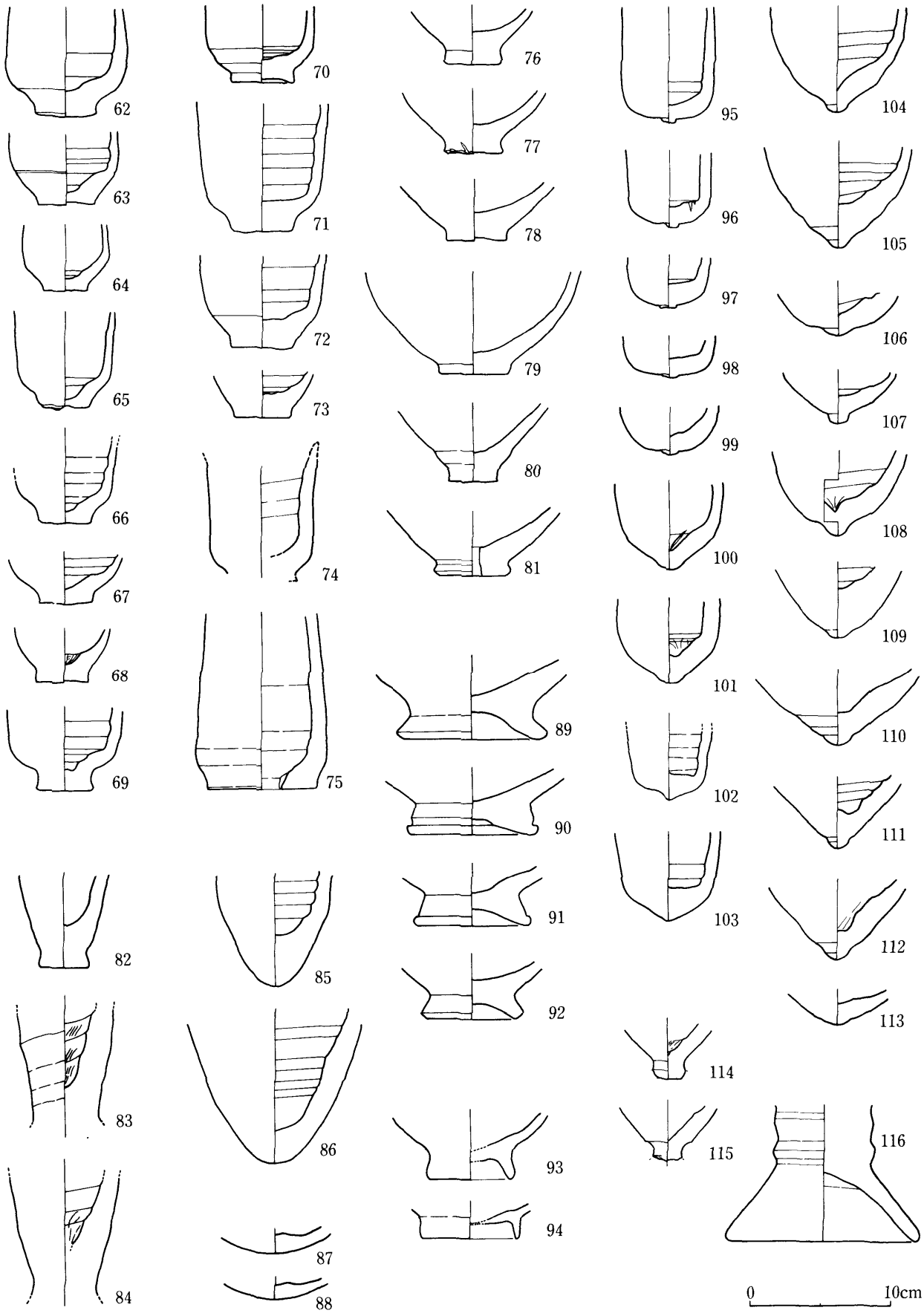

62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
0
10cm

図9 土 器 その3

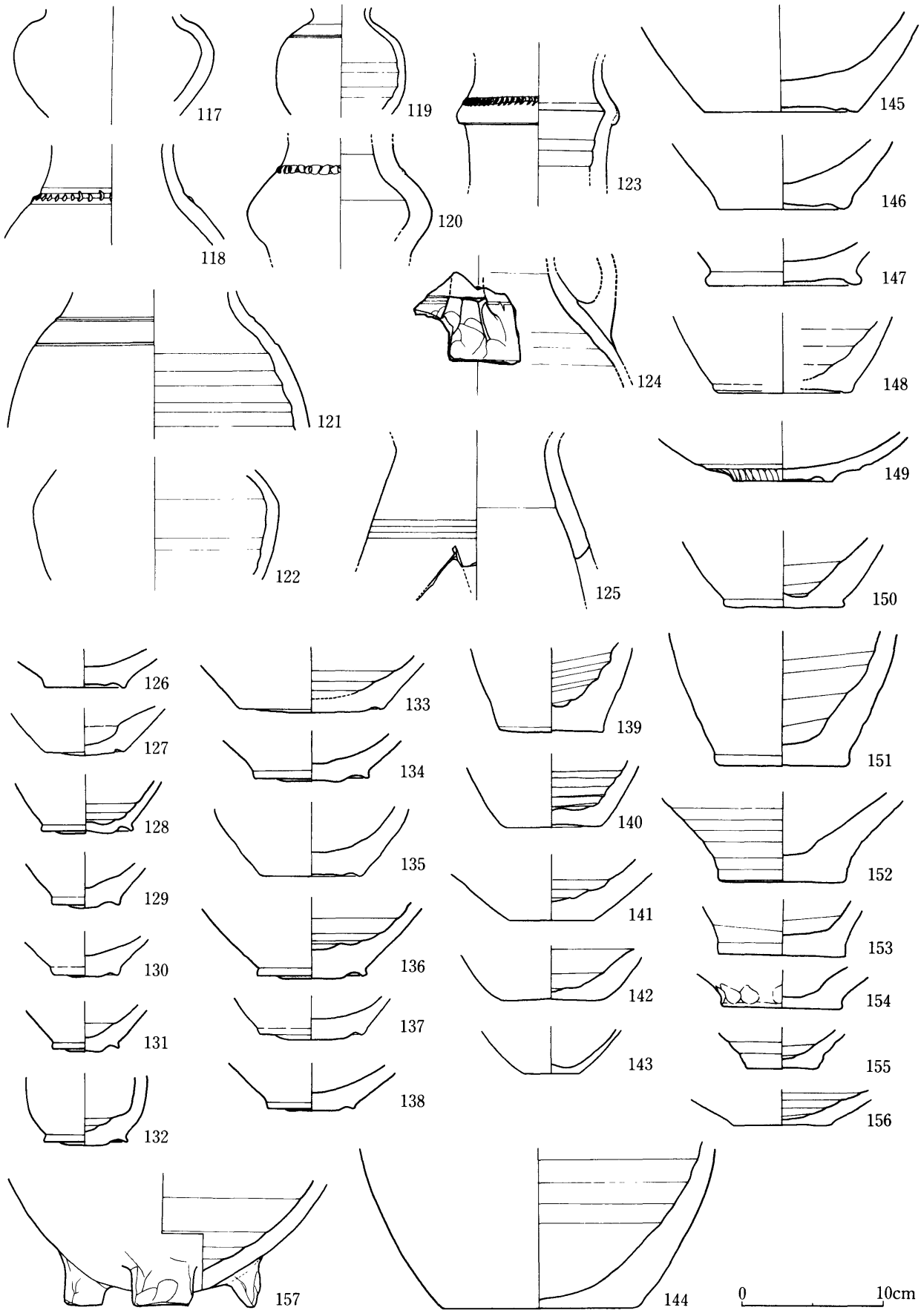

117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
0
10cm

図10　土　器　その4

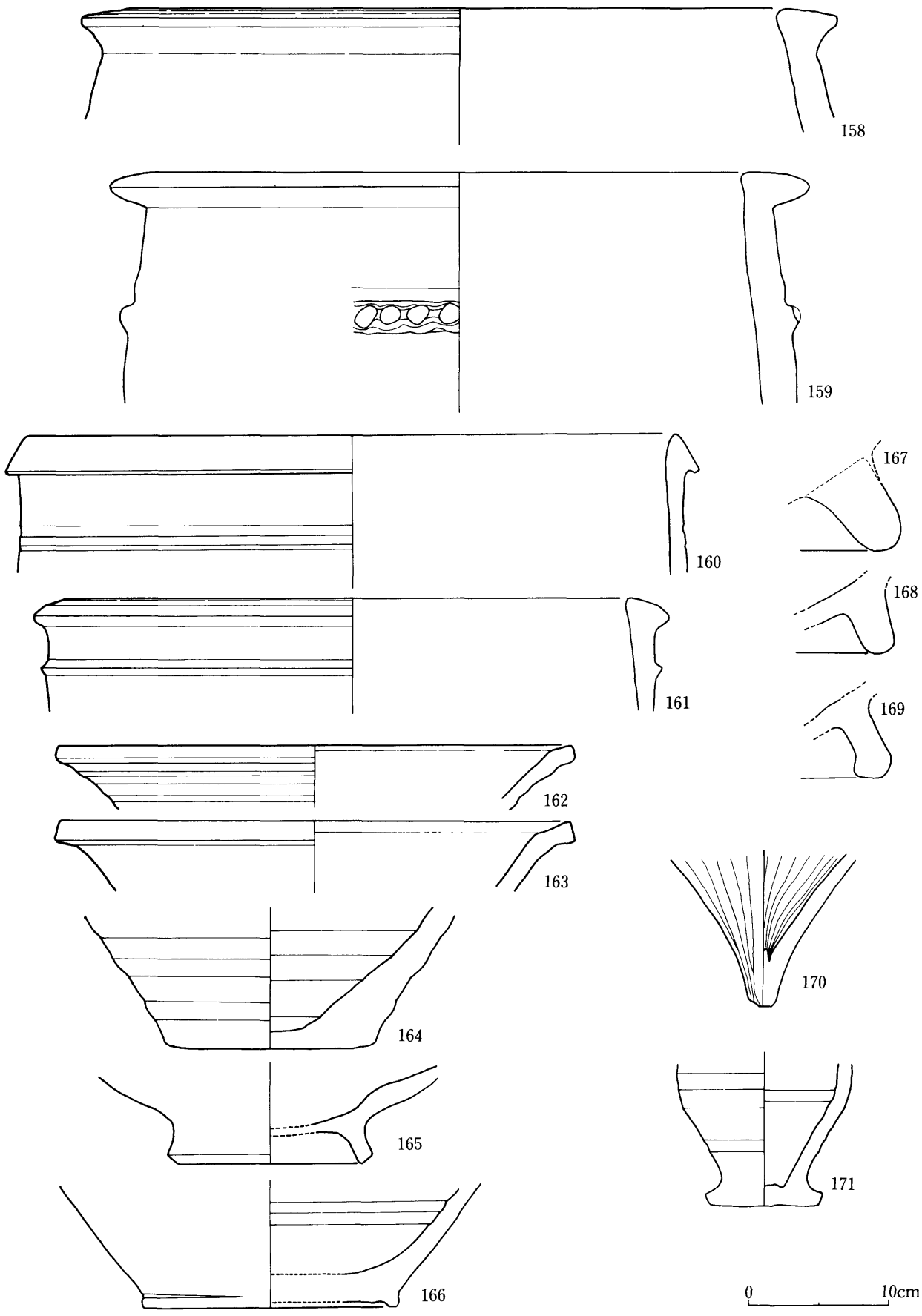


図11　土　器　その5

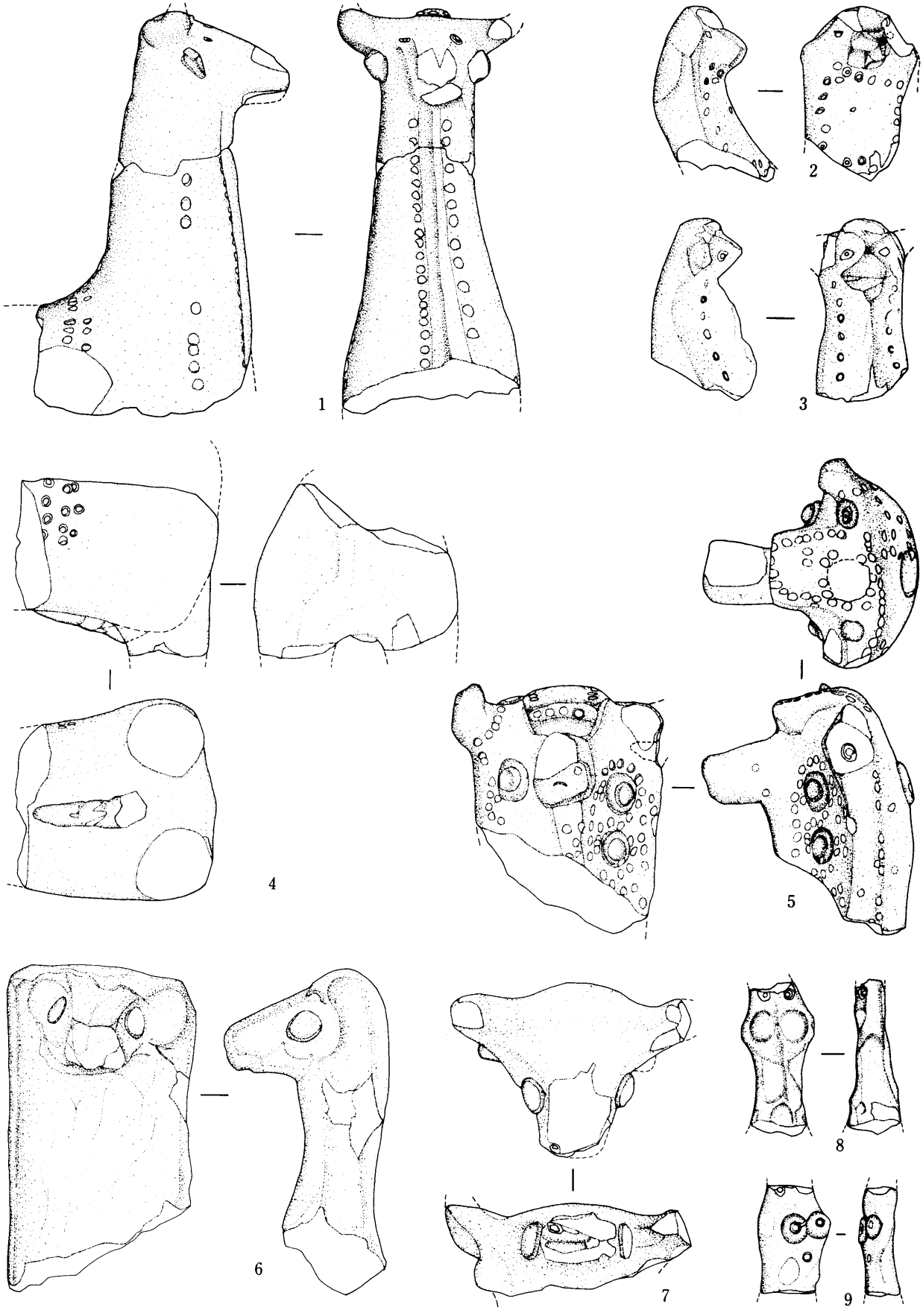
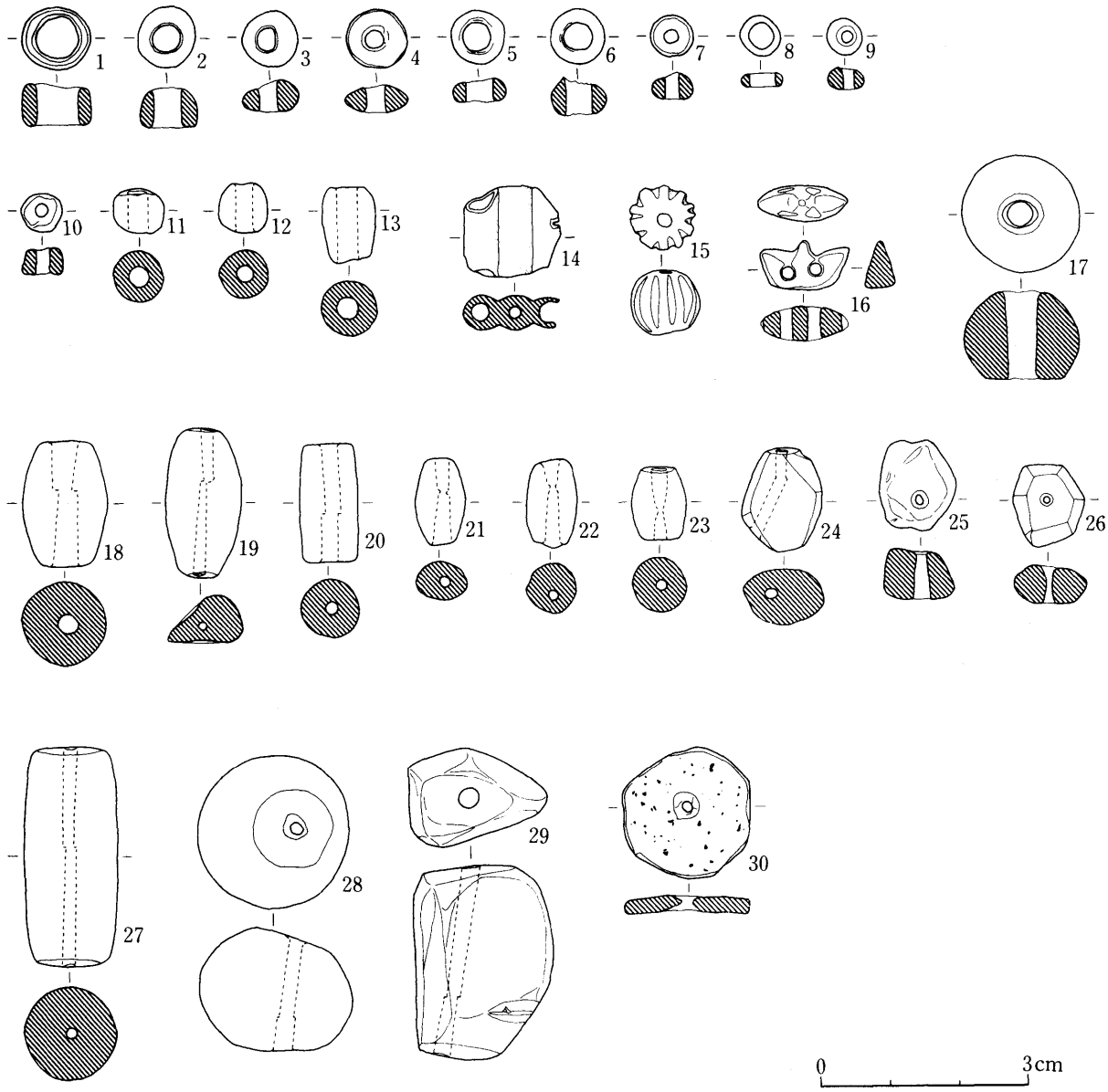


図12　土　偶



1	ガラス	(青緑色)	11	ガラス	(淡青色)	21	めのう	(淡橙色)
2	〃	(〃)	12	〃	(黄褐色)	22	〃	(橙　色)
3	〃	(淡黄色)	13	〃	(青緑色)	23	〃	(暗赤色)
4	〃		14	〃	(黄褐色)	24	クジャク石？	(青緑色)
5	〃	(青緑色)	15	ガラス？		25	めのう	(暗橙色)
6	〃	(淡黄色)	16	ガラス？		26	めのう	(橙　色)
7	〃	(淡緑色)	17	ガラス？	(灰褐色)	27	石	(赤斑混黒色)
8	〃	(濃緑色)	18	めのう	(暗赤色)	28	石	(黒紫色)
9	〃	(赤褐色)	19	〃	(茶褐色)	29	オパール	(灰白色)
10	〃	(橙　色)	20	石	(黒　色)	30	ダチョウ卵殻	(黄色)

図13　ビーズ類

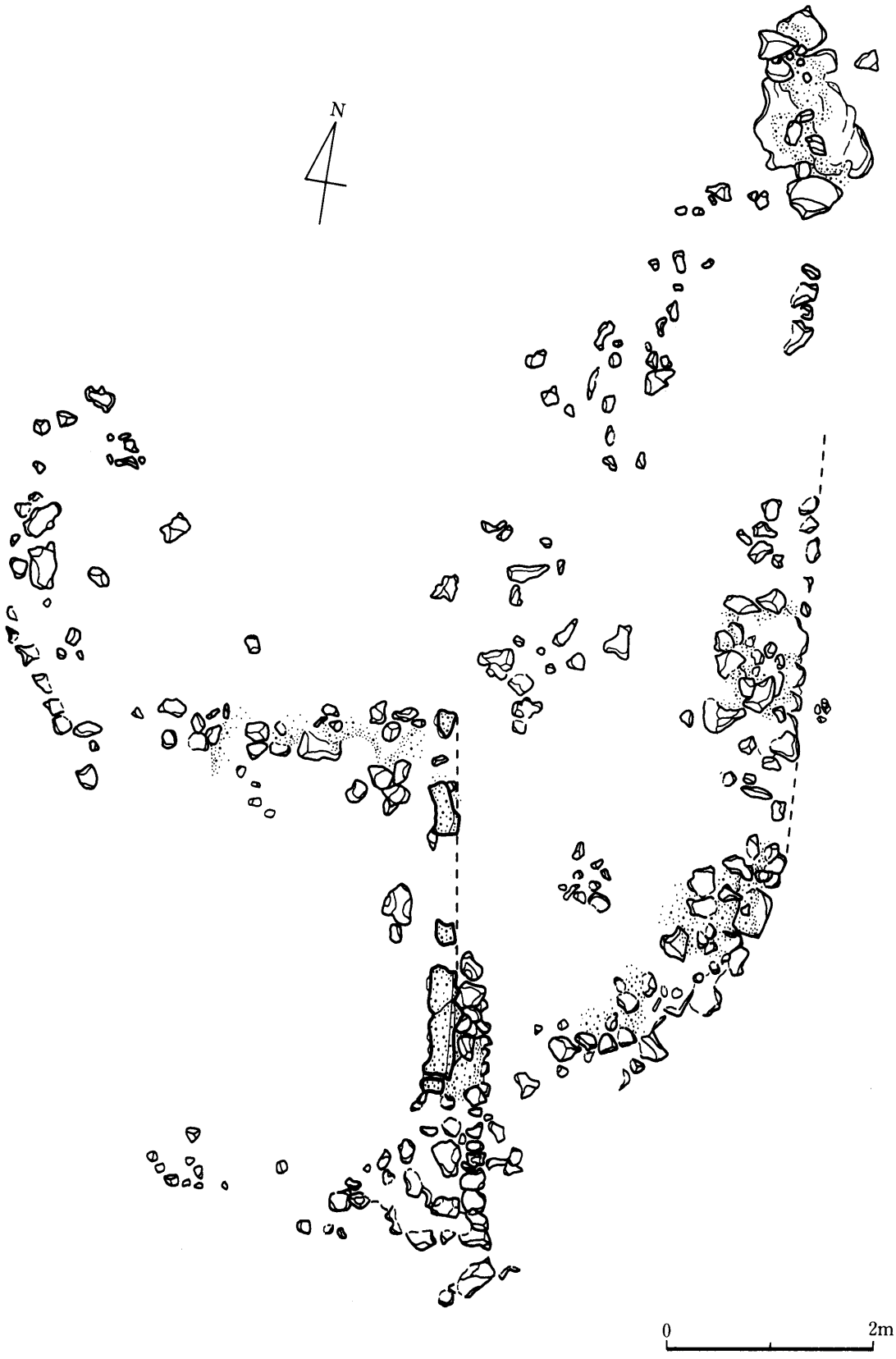


図14　マウンドEの遺構平面

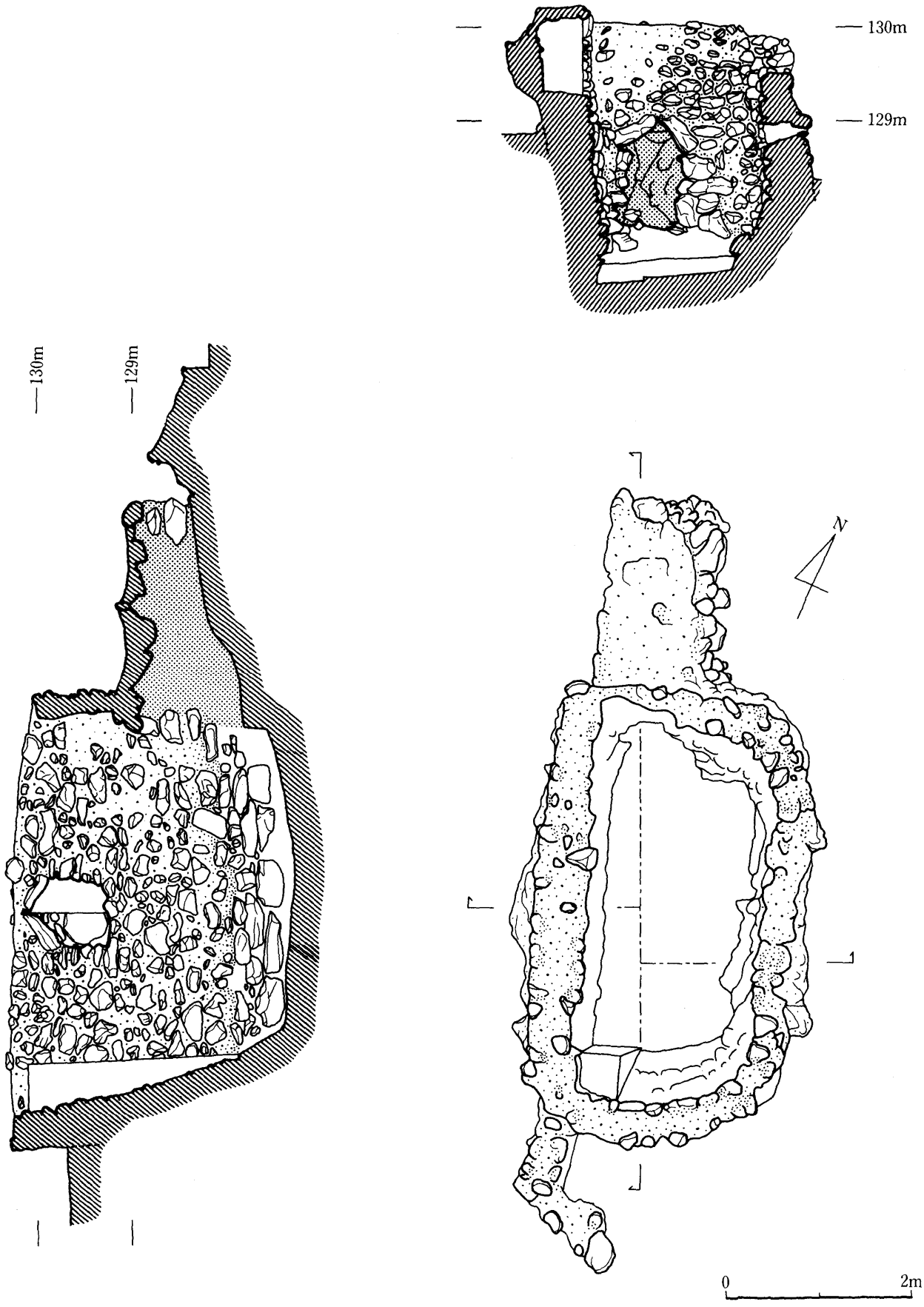


図15　マウンドDの遺構

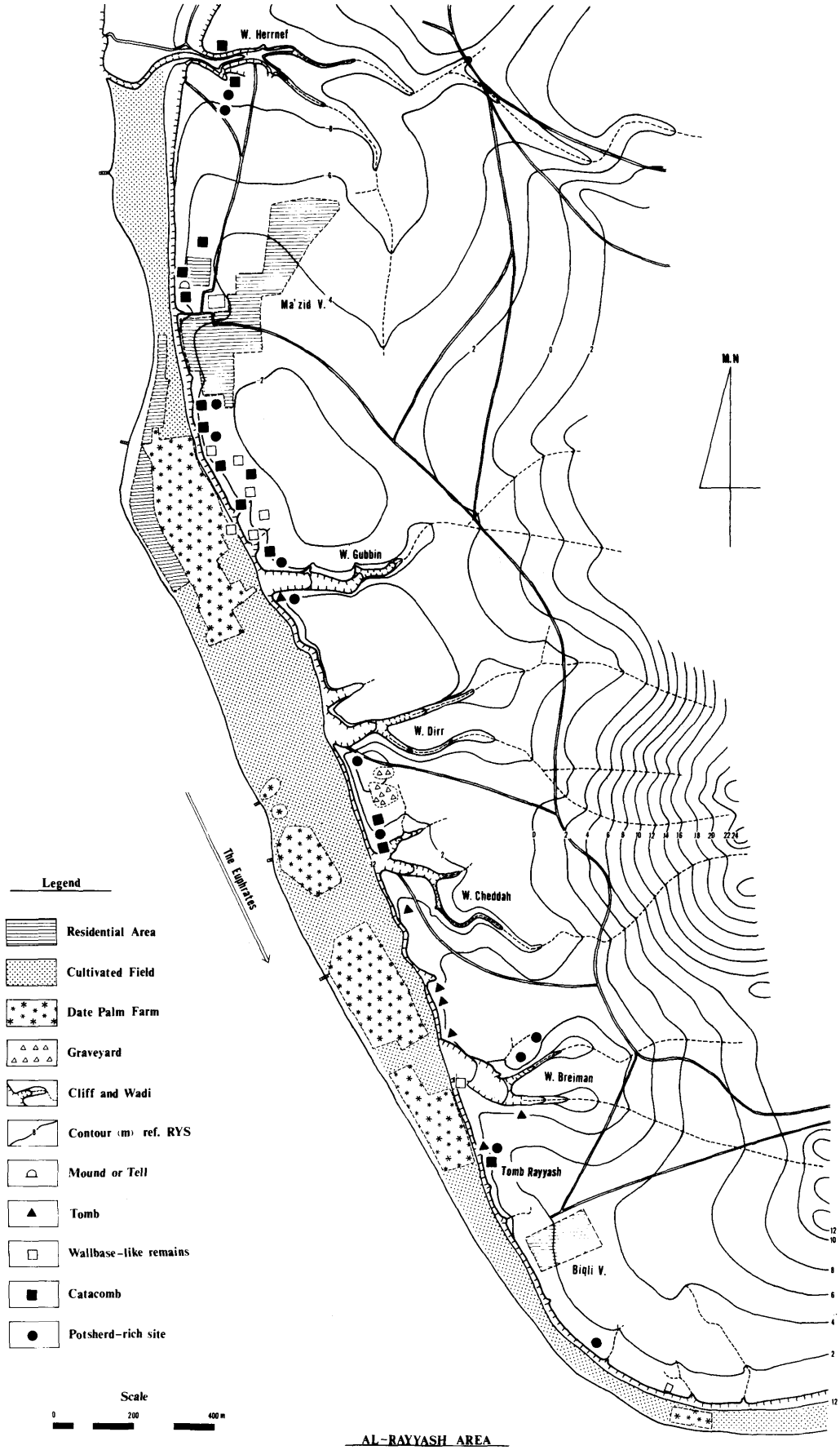

W. Herrnef
Ma'zid V.
W. Gubbin
W. Dirr
W. Cheddah
W. Breiman
Tomb Rayyash
Biqli V.
The Euphrates
M.N
Legend
Residential Area
Cultivated Field
Date Palm Farm
Graveyard
Cliff and Wadi
Contour (m) ref. RYS
Mound or Tell
Tomb
Wallbase-like remains
Catacomb
Potsherd-rich site
Scale
0
200
400 m
AL-RAYYASH AREA

図16　ライヤーシ遺跡

イラク，アル・タール洞穴群の動物遺体

安部みき子

アル・タール洞穴群から出土した動物遺体の保存状態は非常に良好で，靱帯等の付着している骨もあった。しかし，イラクの動物相を構成している動物の骨などの基礎資料が充分でないため，種の同定が困難なものが多く，なかには科さえ同定できない骨片もあった。

出土した動物遺体は洞穴ごとにまとめ，種と最少個体数を表1に，また，各部位における出現頻度を表2・3に示した。最少個体数を推定する場合に椎骨（トリの仙椎は除く），助骨，指趾骨等は除外した。

I　動物遺体の種類

最少個体数でみると，最も多いのは哺乳類で，他には鳥類と爬虫類が出土している（表1）。

1　哺乳綱

同定できた哺乳類の種類は6目9科(うち不明の科1を含む)で,属まで同定できたものは5属であった(表1)。

(a)　偶蹄目

ラクダ科と，シカ科またはウシ科の2科が，C—17を除く3つの洞穴から出土している。

ラクダ（*Camelus*）の出土部位は，そのほとんどが四肢骨で（表2・3），特にC—20～22では破損の少ない大腿骨や中手骨等が出土している。最少個体数はコウモリに次いで多く，全部で9個体出土している。

シカ科とウシ科はイラクには種類が多く，下顎骨の一部と歯の形態での同定は困難である。

(b)　奇蹄目

ウマ（*Equus*）の上腕骨，脛骨の一部と臼歯がC—20～22で出土している。

(c)　食肉目

イヌ（*Canis*）はC—11とC—20～22で出土し，その部位は下顎骨，尺骨と寛骨である。

(d)　翼手目

オオコウモリ類の *Pteropodidae* は，橈骨がC—17からのみ出土している。一方，Tomb Bat と呼ばれる小型の *Taphozous* は，C—17で最少個体数が36と本遺跡出土の動物遺体の中で最も多く出土し，C—11でも2個体が出土している。出土が最も多い部位は前肢で上顎骨が次いで多く，後肢は比較的少ない。

(e)　齧歯目

トビネズミ科の *Allactaga* もしくは *Jaculus* と思われる頭骨が，C—17から出土している。同時に出土した他の齧歯類の頭骨は科の同定が不可能であった。

(f)　兎目

ウサギ（*Lepus*）はC—11で前肢がC—17では後肢がそれぞれ1個体ずつ出土している。

2　鳥綱

本遺跡から，トリの四肢骨と骨盤が少量出土しているが，いずれも種名等は不明である。しかし，大きさは明らかに異なるので，大型と小型とに分けた。

3　爬虫綱

ヘビ亜目の椎骨がC—17とC—33から数個出土しているが，C—17とC—33出土の椎骨の大きさが異なるため，C—17出土のものを小型，C—33出土のものを大型とした。

II　各洞穴ごとの比較

哺乳類の種類数は，C—17（5科，うち不明1）とC—11（5科）が最も多く，C—20～22（4科）がこれに次ぎ，C—33（1科）が最も少ない。

その構成をみると，C—17は小型哺乳類が多く，とくに，小型コウモリが著しく多い。また，鳥類と爬虫類も比較的多い。これと対照的なのはC—20～22で，イヌの他は大型哺乳類のみが出土しており，とくにラクダは全洞穴中もっとも多く，ウマはこの洞穴だけから出土している。C—11からは小型哺乳類や鳥類も出土しているが，大型哺乳類が比較的多く，C—20～22と似た出土傾向を示している。C—33は出土骨が非常に少なく，骨の保存もあまり良くなかった。ラクダは四肢骨の一部と下顎骨が，ヘビは椎骨が出土している。

III　まとめ

本遺跡出土の動物遺体の大部分が哺乳類であり，わずかに鳥類と爬虫類が出土している。洞穴に多く生棲していると思われる小型のコウモリと，家畜種か野生種かは不明であるが，ラクダの出土が多い。各洞穴間における動物遺体からみた動物相は異なり，C—11とC—20～22はラクダなど大型哺乳類が多く，C—17はコウモリなど，小型哺乳類のみが出土している。

Class	Order	Family	Genus	C - 11	C - 17	C - 20 22	C - 33
MAMMALIA	Artiodactyla	Camelidae	Camelus	3		4	2
		Cervidae or Bovidae	Unknown	1		2	
	Perissodactyla	Equidae	Equus			1	
	Canivora	Canidae	Canis	1		1	
	Chiroptera	Pteropodidae	Unknown		1		
		Emballonuridae	Taphozous	2	36		
	Rodentia	Dipoidae	Allactaga or Jaculus		1		
		Unknown			2		
	Lagomorpha	Leporidae	Lepus	1	1		
AVES	Unknown		(Large)		2		
			(small)	1	2		
REPTILIA	Squamata Ophidia		(Large)				1
			(Small)		1		

表1　Faunal list and minimum number of animal remains from each cave

		C - 11							C - 17									C - 20 ~ 22					C - 33		
		Camelus	Cervidae or Bovidae	Canis	Taphozous	Lepus	Aves	Unknown	Pteropodidae	Taphozous	Allactaga or Jaculus	Rodentia	Lepus	Aves (Large)	(Small)	Ophidia (Small)	Unknown	Camelus	Cervidae or Bovidae	Equus	Canis	Unknown	Camelus	Ophidia (Large)	Unknown
Os occipitale								2			1														
Os temporale	R										1	2													
	L										1	2													
Os parietale	R										1	2													
	L										1	2													
Os frontale	R										1	2										1			
	L										1	2										1			
Os nassle	R										1														
	L										1														
Os lacrimale	R										1														
	L										1														
Os zygomaticum	R										1														
Os incisivum	R										1	2													
	L										1	2													
Maxila	R									14	1	1													
	L									14	1	1													
I^1	R										1	2													
	L										1	2													
C	R									12															
	L									12															
Pm^3	R									10															
	L									12															
Pm^4	R									11	1														
	L									12	1														
M^1	R									11	1	1													
	L									10	1	1													
M^2	R									9	1	1													
	L									9	1	1													
M^3	R									8	1	1													
	L									8	1	1													
Mandibula	R		1							16	1							2(1)							
	L		1	1						21	2							1	2		1		(2)		1
I_1	R									10	1							1							
	L									11	2							1							
I_2	R									10								1							
	L									12								1							
I_3	R																	1							
	L																	1							
C	R									12								1							
	L									16								1			1				
Pm_1	L																				1				
Pm_2	L																		1		1				
Pm_3	R									13															
	L									15									2		1				
Pm_4	R		1							12															
	L									17									1		1				
M_1	R		1							8	1														
	L			1						16	2								1		1				
M_2	R		1							9	1														
	L			1						18	1								1		1				
M_3	R		1							8															
	L			1						15									1						

表 2　Numerical frequencies of each bone element from each cave　(Cranium)

			C - 11							C - 17									C - 20 ~ 22					C - 33		
			Camelus	Cervidae or Bovidae	Canis	Taphozous	Lepus	Aves	Unknown	Pteropodidae	Taphozous	Allactage or Jaculus	Rodentia	Lepus	Aves (Large)	(Small)	Ophidia (Small)	Unknown	Camelus	Cervidae or Bovidae	Equus	Canis	Unknown	Camelus	Ophidia (Large)	Unknown
Scapula	R																									1
	L			1							1															
Coracoid	R														1											
Humerus	R	p				1					31				1											
		b		1		1	1				31				1											
		d		1		1	1				36								1		1			2		
	L	p				2	1				27		1		1	1										1
		b				2	1				31		1		2	1										1
		d				1	1				28		1		2								1	1		1
Ulna	R	p					1						1		1	1			2							
		b					1						1		1	2			2							
		d					1								1	2			3							
	L	p			1														1							
		b			1										1				1							
		d			1										1				1							
Radius	R	p					1			1	22								2							
		b		1			1			1	30								2							
		d					1			1	10								3							
	L	p									17								1							
		b									26								1							
		d									14								1							
Os metacarpale	R	p	1												1											
		b													1											
		d													1											
	L	p																	1							
		b																	2							
		d																	2							
Os coxae	R				1						1			1	1		1									
	L								1		1				1											
Femur	R	p									6			1					1							
		b									7			1	1								1			
		d									6			1	1											
	L	p	3								11		1		1	1			3							
		b	2								11		1		1	1			2							
		d									10		1		1	1			4							
Tibia	R	p											1	1	1								1			
		b											1	1	1						1		1			
		d											1	1					1		1		1			
	L	p	1		1				1				1			1										
		b											1			2										
		d	2						1				1			2										
Talus	R																		1					1		
	L																		1							
Calcaneus	R																		1					1		
	L		1																2							
Os metatarsale	R	p																	2							
		b																	3							
		d																	1							
	L	p	2													1			1							
		b	2													3			1							
		d	2													2										

表3 Numerical frequencies of each bone element from each cave (Post cranium)

参 考 文 献

Grasse′, P.-P., 1955a, *Traite De Zoologie* Tome XVII-premier Fascicule, Masson et Cie Editerurs, Paris.

———, 1955b, *Traite De Zoologie* Tome XVII- Second Facicule, Masson et Cie Editerurs, Paris.

Hatt, Robert T., 1959, *The Mammals of Iraq*, NO. 106, Zoology Museum of the University of Michigan, Ann. Arbor, Michigan.

内田 亨, 1963,『動物系統分類学・10 (下)』, 中山書店, 東京.

Walker, Erenest P., 1975, *Mammals of the World* Thid Edition, The Johns Hopkins Univ. Press, Baltimor and London.

(大阪市立大学医学部解剖学教室第2講座)

蒙古ノイン・ウラ出土下袴について

坂本和子

はじめに

ノイン・ウラは，考古学の世界ですでによく知られており，その経緯について今更詳しく述べるまでもない。

ノイン・ウラは，古代中国の歴史に登場した匈奴の文化を知る上で貴重な存在である。単に中国との関係に止まらず，西アジア，中央アジアとの関係も指摘されている。それらの両文化の影響とスキタイ文化の流れを汲む独自の遊牧文化をそこに見ることが出来る。

墳墓そのものや多様な出土品が，今日まで多くの研究者の対象となった。特に多種多様な染織品のうち，絹織物は，漢代の絹織物の技術や文様，及び当時の観念象徴を示し，その為に多くの研究者の注目を集め，すでに色々な角度から研究されている。ノイン・ウラは，それでもなお研究対象として興味のある豊かで変化に富む資料を包蔵している。

毛織物では，無地の毛織物をつなぎあわせ渦文刺繍や動物闘争文等のアップリケによって装飾し，絹織物で枠縁をとった敷物は，原地住民であった匈奴の文化を端的に示した。また，他の毛織物に施された刺繍や織文様から，西方の要素が指摘されている。

染織品のなかに，服飾品として原形を留めるものが数点あり，帽子等の他に５点の衣服が含まれている。４点は絹織物で作られた長い上衣２点（１点はフェルトの裏がついている），下袴１点，行縢（ムカバキ）様のもの１点である。残りの１点は，毛織製の下袴である。発表された写真（図１），及び報告書を通じて，これが毛織物であり，しかも下袴の両側に繧繝で長方形の織り出しの様なものがあることに，かねてより注目していた。

この下袴については，ルデンコ氏〔Руденко, 1962 : p.39〕も梅原末治氏〔梅原，1960 : p.56〕も，調査結果について簡単に述べている。

今回，エルミタージュ博物館で，ノイン・ウラ出土の毛織物について調査する機会を得た。短時日の調査ではあるが，その時に得た調査結果をもとに，毛織製下袴について染織及び服飾の両面から考察を試みた。そしてそれをもとにノイン・ウラにおける東西関係に触れたいと思う。

図１　ノイン・ウラ出土毛織製下袴
梅原末治「蒙古ノイン・ウラ発見の遺物」

Ⅰ　ノイン・ウラ６号墳の概要

本稿の対象となる毛織物の下袴が出土したのは６号墳である。６号墳は，スックテ古墳群の中央グループの北部にあって，一辺24.5mの正方形で，高さ1.62～1.95mの封土がある。墳墓の南へ羨道が延び，その上の墳丘は巾9.25m，長さ22.5mに達する。封土のへこみは，直径8.57m，深さ2.04mで，そこから11.03mに外室の天井があった。

木郭は二重になっていて，外室と内室の間に回廊がある（図２）。外室の内法は3.96×5.34m，高さ1.98m，６本の支柱の上に柱頭があり，３本の梁を支えている。その上に，上部のみ丸いままの角材が20本あって，天井を構

成する。壁げたは７本であった。内室は2.23×3.31m，高さ1.66m，13本の角材が，内室の天井を構成し，それは１本の梁の上にあった。壁げたは６本であった。床は深さ13.15mにあり，20本の角材が並べられていた。

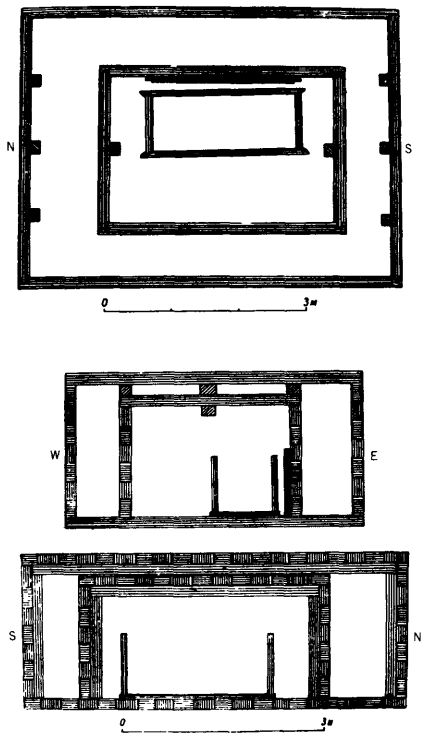


図２　ノイン・ウラ６号墳の木郭
Руденко, С.И. "Культура Хуннов" Ноинулинские Курганы

棺は0.98×2.29m，高さ0.9mで６～８cmの厚さの板で作られていた。棺の上に漆と顔料の跡がかすかに見られる〔Руденко, 1962: pp. 16-18〕。

６号墳は，盗掘に会いながらも，最も多くの遺物が出土した。年代を決定することの出来る重要な出土品，建平５年（前２年）の銘のある漆塗双禽文耳杯や銀製打出犂牛飾牌，鹿文牌，鏡，車馬具，机の脚部，絹布で飾った弁髪，そして多種多様な染織品が，この６号墳から出土している。

なかでも染織品は，注目すべきものがこの６号墳に集中している。例えば，先にも挙げたように，周囲を絹で縁どりされ，フェルトで裏うちされた毛織物の敷物には，中央に渦文の刺繍，その周りに幾何文，その外側をめぐって有名な動物闘争文や植物文がアップリケされている。そのうちの１枚は，回廊の東部，西部，北部に点在した出土状況から，墓室全体に敷かれていたことがわかる。もう１枚は，ほとんど原形を留めた状態で，棺の下に敷かれていた。

３人の騎士と４頭の馬を刺繍し，人物，鳥，怪獣，パルメットの文様帯のある毛織物は，回廊の壁を飾っていた。亀と鳥や魚を刺繍した織物，虎の皮の刺繍などの毛織物を継ぎ合わせた敷物は，外室の天井をほとんど覆うぐらい大きなものである。

前者は，外室の内側面，外側の支柱と壁の間や柱頭部で発見されたこと，後者は，天井の材木の上に残存した出土状況によって，埋葬時のそれぞれの織物の位置を確認することが出来るのである〔Руденко, 1962 : pp.118-121〕。

帽子が２点，絹の長い上衣２着，下袴２着すべて６号墳の回廊東側で発見された。これから検討する毛織物の下袴もそのうちの一つである。

II　六号墳出土毛織製下袴

史記匈奴伝によれば，

自君主以下，咸食畜肉，衣其皮革，被旃裘。

「匈奴は君主より以下皆畜肉を食料とし，その皮革を衣服とし，旃裘（センキュウ）（毛織毛皮の衣）を被（キ）る。」とされている。また，考文帝の頃，単于の閼氏として匈奴に向った公主の傅（モリヤク）として従った中行説は，漢の習俗に染まることを懸念して，

其得漢繪絮，以馳草棘中，衣袴皆裂敝，以示不如旃裘之完善也。

「漢より得た繪絮を着て草や棘（イバラ）の中を走ればその衣袴はみな裂けやぶれる。これにて氈裘の完善なのに劣ることを示しなさい。」〔内田他，1976：p.1，p.21〕と述べたことが記されている。旃裘の「旃」は「氈」に通じ，〔説

文〕氈，撚毛也，从毛亶声。〔段注〕撚毛者，蹂毛成氈也。から考えると，厳密に云えば遊牧民の作るフェルトや毛皮の衣が旃裘にあたる。一般遊牧民はフェルトや皮，毛皮を衣服の材料とし，下袴を着用したことは，史記に述べられた「旃裘」や「袴」によって明らかである。

ここに取り上げた毛織製下袴は，王候貴族のものであった。到来した毛織物で，匈奴の習俗であった袴に仕立上げたに違いない。

ノイン・ウラ出土の毛織製下袴は，図3に示す如く，両足の部分2枚（A，B）と前後の胴の部分の袴（C）2枚，股下の袴（D，E）4枚で構成されている。腰の部分はベルトがなくて，上辺は内に三つ折りにされてまつられている。従って身につける時には，帯鉤の付いた皮帯などで上から押えたものと思う。下端は適当に襞をとって21cmにすぼめ，巾の狭いベルトをつけている。下袴の長さは1.14m，巾は胴部の袴を入れて1.16m，である。

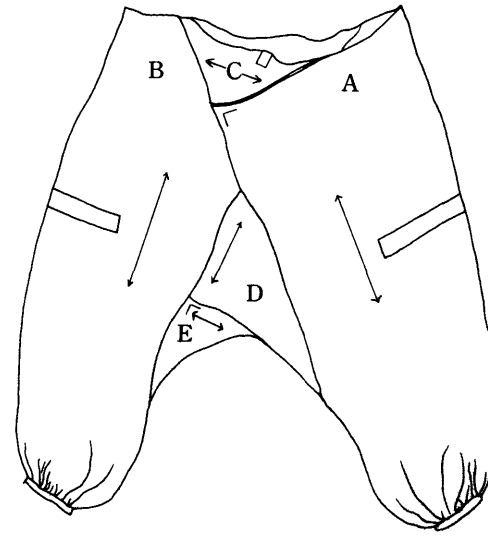


図3　ノイン・ウラ出土毛織製下袴

下袴の両脇に，ウエストから45cm位のところに，地とは別色の繧繝縞文が入っている。現在，地の色はにぶ茶（マンセル5.0R 3.0／4.5）で，繧繝縞は濃い紫味赤（マンセル10.0RP 3.0／5.0）より，灰味黄茶（マンセル8.5YR 4.5／2.0）へと移行しているが，灰味黄茶はもともと緑がかっていたようである。

下袴を詳しく調べてみると，ウエストの一部の裏側に，撚紐（太さ約4mm）が一見縫い付けられた様に見え，その一方の先はカットされてなくなり，他の一方は，胴の部分にはめこまれた袴と縫い合わされて，股上の縫目まで続いている。そしてこの撚紐の見られるラインより5mmはなれて，赤紫色の巾2－3mmの線条が平行に走っている。面白いことにこの撚紐と赤紫の線条の組合せが，股下の袴の一つ（図の裏面）に見られるのである。このことは，下袴の主要部である撚紐と線条のある布（A）と股下の同様の袴布は，同一線上にあったとみられる。

この下袴に使用されている毛織物の経方向は，下袴の上下方向に当り，濃い赤紫の線条の方向が，経糸と直角をなしている。つまり線条は緯糸によって表わされている。従って線条と平行であるライン（胴部の袴と下袴の足部の布との縫目，撚紐付）も経糸と直角をなしている。

このことから，この下袴は，一枚の広い巾の布から両足の部分に相当する布2枚をとり経方向に沿って2つに折り，足を入れる部分を作った。しかもその際繧繝縞が左右対称の位置にくるよう裁断している。その裁断を行う時，一方の耳をそのまま残し，一方は裁ち切っている。耳の有無，裁ち切りの状態は，股下の下端に近い縫代を裏から見て確認した。

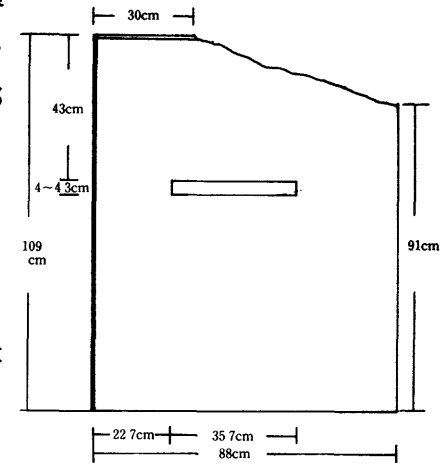


図4　下袴足部(A)展開図

今，濃い赤紫の線条のある足部の布を展開して，織物として検討を加えると，図4に示す如く，一方には耳，反対側は裁ち切りの線がやや斜めになっている。濃い赤紫の線条より，5mm離れて，平行に縫い付けられたように見

える撚紐がある。実はこれは織端の始末なのである(図版６－１)。この縄状始末は，約30cm程残され，あとは布と共に斜にカットされている。布巾は約88cmある。耳から約22.7cm，織端から約43cmのところに，４～4.3cm×35.7cmの繻綢縞がある。

この織物の経糸は0.3～0.5mm，Ｚ撚，撚数10―14/cm，緯糸は0.4mm，Ｚ撚，撚数５－８/cmである。織密度は９―10×28―44/cm²，平組織，綴地合であるが，緯糸の密度に大きな差があり，打込みに強弱のある様子がわかる。

繻綢の文様部では，緯糸はＺ撚とＺ撚を合わせてＳ撚にした双糸で，撚数３－４/cm，太さ1.2mmとやや太い。経糸２本あるいは３本と交錯する平織の変化組織で綴地合である。密度は〔4.2×(２－３)〕×18である[1]。

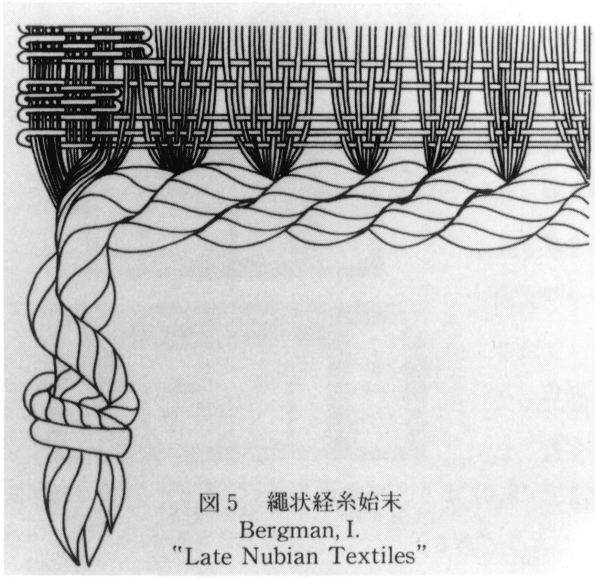


図５　縄状経糸始末
Bergman, I.
"Late Nubian Textiles"

耳はかなり厚みをもっており，単なる緯糸の引返し技法ではなく，緯糸を繰り返して経糸に巻きつけるか，添糸などして耳を強化する技法を用いたとみられる。

織端の始末の仕方は，経糸を一定の長さに切り，数本づつＳ撚にしたものをあわせ，Ｚ撚にして，徐々にＳ撚にされた経糸を加えて撚り込みながらＺ撚に仕上げたものである(図５，アル・タール出土染織品研究その後：本巻 p.38 の図７参照)。

繻綢縞は，先に述べたように，経糸２本あるいは３本と双糸である緯糸を不規則に交錯させ，縞文の端で糸を引き返す綴技法を用いている。経糸の不統一な本数，不規則な配置によって，この部分は地の部分と違って，手でもって織り込んだものと判断される（図版６－２)。文様部の濃い紫味赤及びにぶ赤紫(マンセル7.5RP 4.0／4.5)の糸は，地の緯糸とインターロックすることなく，引き返し，そのハツリメは文様部の灰味黄茶と同じ糸で綴じられている。灰味黄茶の糸が，一本の紫の糸を分け入っているところから，紫の糸が通されてから綴じたことがわかる。灰味黄茶の糸は，地の経糸で，最も文様に近い経糸３本の上で，地の糸を覆う様に巻きつけられ，文様部へ引き返すようにみえる部分と，ハツリメを綴じつけている様にみえる部分がある。いづれにしろ，地の緯が入れられてから文様部が手で織り込まれたと思われる。

繻綢の縞は，濃い紫味赤を中心にして両側ににぶ赤紫，黄茶，灰味黄茶と並んで，巧みな階調でぼかし文様を表わしている。このぼかしを表現するのにふさわしい色の糸を作る為に，糸にする前に染めた２色の毛の束から，適当な配分で，それぞれの毛を取り出し，紡いで糸にするという方法を用いている。

繻綢縞に用いられた濃い赤紫の色は，大阪教育大学の高木教授によれば，貝殻虫によるもので，そのうちケルメスの可能性が大であるということである。

ノイン・ウラの下袴は，以上の様な技法の見られる毛織物を用いて，独特の裁ち合わせによって仕立られたものである。

注

1)　経糸は１cm間に２本あるいは３本を組にしたものが4.2本，緯糸は18本。

III　染織技術及び文様配置の特徴

前の章で述べたように，下袴に用いられた織物には，いくつかの注目すべき点が認められる。

この布は，他の出土毛織物に比べると，比較的毛羽立ちが少ない。おそらくカーディングを行い毛の方向を揃え，あるいは他のものより長めの繊維を用いたものであろう。

織物の端に見られた縄状経糸始末は，かなり広い範囲の出土品に見られる。古いものでは，今回の調査でパズィルク2号墳出土の縫い合わされた絨毯に見出すことが出来た(図版6－3)。アルタイ山地出土の絨毯には，パズィルク5号墳出土の有名な絨毯やバシャダール2号墳出土のパィル密度の高い絨毯片の他に，パィルの為の緯糸を通して絨毯としたものがある〔Руденко, 1968：pp.48—62〕。5号墳のものは織端が糸のまま，どの様な始末もなく放置されているが，2号墳のものは縄状に仕上げている。下袴の布と同様，S撚の経糸数本とS撚の経糸数本をZ撚にして，縄状に撚り続け仕上げている。

ソビエトの学者により前8世紀とされているアルジャン古墳は，ノイン・ウラともアルタイとも地域的に近いトゥワにあって，毛織物が出土している。第2墓出土の毛織物の布端に撚紐($\begin{matrix}S\\S\end{matrix}$ —Z)が見られる。報告では，撚糸が織端に縫い付けられていると述べられているが〔Пламеневская, 1975：pp.202—204〕，織端の始末の可能性がある。

以上は，ノイン・ウラに近いスキト・シベリア文化圏に属する遊牧民のもとにあった毛織物に見られた経糸の始末法であったが，単にこの地方だけでなく，シリア，メソポタミア，パレスチナ，ヌビアにも同様の手法が見られる。

しかし中央アジアでは，ローランの古墓(Cemetery 5と36)より出土した毛織物には耳際に沿って走る緯糸による縄状始末が報告されている〔Sylwan, 1941：p.68, pp.71—72, p.82〕。技術的には，経糸の縄状始末とよく似ている。ローラン出土のマントであったとされている織物の経糸は，端でフリンジとなっている場合が多い。従って，個々の技術に類似は認められるものの，織物全体の構成に違いが感じられる。織機の部分的構造や，経糸の張り方，緯糸の入れ方に地方的な特徴があったのだろう。

シリアのパルミュラでも，多くの毛織物が出土している。そのうちイアンブリコスの塔墓出土の毛織物(L112)46号塔墓出土のチュニック（L103）その他L12の3点に経糸始末があると報告されている〔Pfister, 1934：p.33 1940：pp.23-24〕。

ドゥラ・エウロポス出土のチュニックでは一方の袖から織り始めて，前後の身頃に入り，途中，首のスリットを明けながら両身頃の裾から裾まで巾広く織り，もう一方の袖口で織り終る例が示されている(No. 1)。この際，袖の部分を織る時には，袖として織られる経糸以外の経糸は織られないで，袖丈の長さだけそのまま残される。機台から織物がはずされた後，これらの経糸は縄状に始末される。ドゥラ・エウロポス出土のその他の断片（No. 2，39その他）にも縄状経糸始末があることが報告されている〔Pfister et al., 1945：p.14, p.17, p.23など)。

イスラエルのCave of Letters出土のチュニックやマントは大部分，経糸を縄状に始末したものである〔Yadin, 1963：pp.201—203〕。

パルミュラ，ドゥラ・エウロポス，Cave of Lettersの遺蹟は，紀元後1～3世紀のものと確定されており，ノイン・ウラの年代と最も近いところにある。

同様に，放射性炭素年代及び類似する文様によって，近い年代のものが存在するメソポタミアのアッタール出土染織品のなかに，経糸の縄状始末が見られる（アル・タール出土染織品研究その後：本巻p.38の図7参照）〔藤井他，1983：p.6〕。

年代が遡るが，ウラルトゥの経済文化を明らかにした前7世紀の遺蹟，カルミル・ブルル丘のティンシェバニから出土した衣服の縁飾りの毛織物にも縄状経糸始末と思われるものがある〔Верховская，1955：p.69〕。

一方ヌビア地方のBallanaとQustul出土のチュニックやシーツの多くに縄状経糸始末が見られる。なかには経糸だけでなく，緯糸も同様，縄状に始末されているものがある。これら織物の年代は，メロエ，Xグループ，初期キリスト期に当り，紀元後100—600年である〔Mayer, 1979〕。同じくヌビアのFarasからGamai間の墓地より出土した毛織物は，紀元後100—850年の長期にわたるものである〔Bergman, 1975〕。それらの経糸始末の手法は多種多様であるが，そのなかに今まで述べて来たものと同様の手法のものがある(図5)。報告ではZ撚とZ撚の経糸を合わせS撚の仕上りとなっている。

以上の様に縄状経糸始末は，シベリヤからヌビアに至る広い地域の出土品のなかに見出され，それらの織物の年代も前8世紀より後9世紀にわたっている。

下袴に用いられた織物に見られる繧繝縞は経糸の処理方法（2—3本と緯糸が交錯する）によって，明らかに手で織り出されたことがわかった。無地の一部に綴技法で文様を入れたもの，例えばアッタールでは，経糸2本と緯糸1本が規則正しく交錯する。そして，地の部分（経1本）から文様部（経2本）へ移行する時，経糸が規則正しく交叉するのが見られる〔藤井他，1983：p.5，p.9〕。このことは，綴織の文様部分を織る時に，捩り綜絖が用いられている可能性を示唆している。捩り綜絖と地を織る為の綜絖を連動させながら緯糸を通すという技術上進歩した技法を用いている。エジプトのコプトにも同様の経糸の交叉が見られるものがある。ノイン・ウラ出土の下袴の布は，技術的にアッタールの布や，コプトの布に先行すると考えられる。

文様部分は，地と異なる色を用い繧繝縞を表わしているが，これらの糸は糸にする前，毛の状態で染められ，2色の適当な配分によって，両者の中間色の糸を作り出していた。この様な紡糸の方法は古代よりよく知られ，実際，メソポタミアのアッタールの染織品に見出される〔藤井他，1983：p.4〕。

しかし，イスラエルのCave of Lettersでは，紡ぐ前に染色されたか，紡いだ後に染められたか不明であるが，2色合わせて紡がれた糸はない。あくまでも織物に表わされた色は1色の濃，淡あるいは2色を重ね染めして色の変化を得たものである〔Yadin, 1963 : p.173〕。

織糸の色の表わし方に，この様な違った方法が見られるけれど，繧繝縞という色調の微妙な変化による美の表現は，紀元後数世紀の地中海沿岸から中央アジアに至るまでの古代遺蹟の出土品に見ることが出来る。

繧繝縞の中に見出される濃い紫味赤の色を染め出す為に使用された染料について検討してみよう。赤紫を染め出す染料は，紫系統では帝王紫とも云われる貝紫，紫根，アルカンナ等，赤系統ではラック，ケルメス，コチニール，茜，河原松葉，蘇芳等がある。試料を検討していただいた大阪教育大学，高木教授によれば，染料色素の抽出，同定の結果，アカネもインジゴも検出出来ず，エンジ貝殻虫系統の染料であることが判明した。

貝殻虫には，ラック，ケルメス，コチニール，ポーランドケルメスの類がある。そのうちコチニール（*Coccus cacti L.*）は，うちわさぼてん（*Nopalea cochenillifera S. DYCK, Opuntia coccinellfera MILL.*）に寄生するが新大陸の発見後ヨーロッパに持ち込まれたもので，まず除くことが出来る。ラック（Lac）はラック・ムシ（*Tachardia lacca KERR.*）が，イヌナツメ（*Zizyphus jujuba, LAM.*）やセイロンオーク（*Schleichera trijuga,*

WILL.）等に寄生して生じたもので，ベンガル，アッサム地方の特産である。後1世紀頃，地中海方面にも輸出された。ギリシャの歴史家クテシアス(前5世紀)が，インドから輸入したことを述べている〔シンガー他，1978：p.190〕のは，ラックのことであろう。

しかし，高木教授によれば，色素抽出液を試料としたTLC(薄層クロマトグラフィー)の結果から判定すれば，ラックとは考え難く，基準になるケルメスの標品が入手できない現状では正確に決定することはできないが，ケルメスである可能性が高いものと考えられるということである。

ケルメス（*Coccus illicis, L.*）は，ケルメスカシ（*Quercus coccifera L.*）に寄生する。ケルメスは，記録に残っている染料としては世界最古のもので，すでにモーゼ以前よりその名が知られ，ヌジ（Nuji）から出土した前1300年頃の粘土板に，虫から得られる赤色（Worms Illi-ittiya）として記されている〔Levey, 1955〕。前1100年頃には，ケルメスカシはティグラト・ピレセル1世によってアッシリアにもちこまれた〔シンガー他，1978：p.190〕。聖書中にもヘブライ名 tola あるいは toraschani の名称で記載されている。ストックホルム・パピルスにケルメス（kokkoç）が記述されている様に，ギリシャやローマの歴史家は Coccus という名称でケルメスについて記述している。

旧約聖書の出エジプト記25―4，26―1，31，36―8，35，レビ記14―4，サムエルII 1―24，箴言31―21等に使用されている緋色はケルメスであるといわれている。この色素はパレスチナではフェニキア人が見出し〔Perkin et al., 1919 : p.95〕，ヘブライ人の間ではモーゼ以来高価な色として珍重され，ユダヤ教徒の高位の神官の服の色として用いられていた。

ケルメスカシの繁殖地は，古代ではアララト渓谷の名が見られ，聖書の中では，ガリラヤ，カルメル，ギレアデなどが記述されている。現在ではフランス南西，スペイン，イタリア，エーゲ海に産する〔後藤他，1972：pp.243―248〕。

古代遺蹟より出土した染織品にこのケルメスが使用された例が報告されている。その1例を挙げると，パルミュラの菱繋ぎの中に小さな点を配した文様帯と繧繝帯で縞を表わす毛織物（L60）に使用されている〔Pfister, 1937 : p.26〕。またドゥラ・エウロポス出土の毛織物にも，ケルメスのアルミナ媒染が報告されている。その上ドゥラ・エウロポスでは Nebuchelus の家の壁に，商品の取引記録やその家の購入品目が記されており，その中にケルメスの文字が見出される〔Pfister et al., 1945 : p. 6，p.12〕。ケルメスは，Nebuchelus の家で糸を染め，衣服を製作する為に購入されたのである〔Baur et al., 1933 : pp.140―142〕。ケルメスは商品として売買され，かつこの地で染められていたことがわかる。ケルメスは軍の高官の色であるということだ。

古代近東では，貝紫のにせものとしてインディゴと染め合わされた。Cave of Lettes 出土の貝紫色の毛の束は，糸を紡ぐ前に染められたことを示しているが，それにはインディゴとケルメス（カルミン酸[2]）が染料として使用されていると報告されている。

メソポタミアのアッタールにもラックあるいはケルメスの反応を示す毛織物がある〔藤井他，1983：p. 7〕。

この様に古代地中海沿岸やメソポタミア，シリアの出土染色品にケルメスが使用されている。

次に個々の手法から全体に目を移し，この織物の文様配置を考えてみる。展開した足部の布2枚のうち一方の布には織端から5㎜のところに濃い赤紫の線条が走っている。そして無地の中に織端と耳から一定の位置に，つまり織物のコーナーに，地と違った色を用いた一つの長方形の文がある。もう一方の布は耳から先の布と同寸法のところに長方形の文がある。おそらく織端は別の方法で始末されたのであろう。縄状始末は見られない。

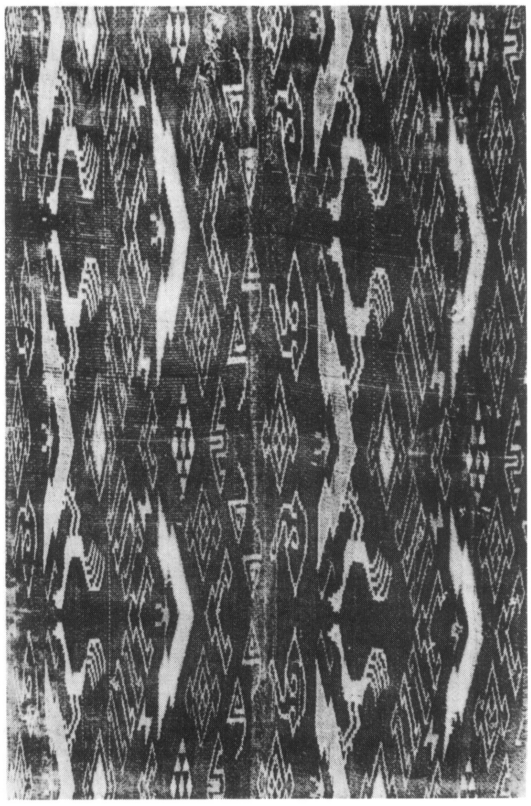


図6　ノイン・ウラ出土漢代絹織物
梅原末治「蒙古ノイン・ウラ発見の遺物」

コーナーに幾何文様のある織物は度々出土しているが，その完形出土品を見ると，アッタール出土，238.5×164cm（C—12，IV—OH—368—13）〔藤井編，1980：p.282〕，ヌビア出土，175×105cm（Grav. 231 1B）〔Thurman et al., 1979：p.109〕，237×139cm（Tomb 4 25/6）〔Bergman, 1975：p.54〕となっている。この数値を考慮して，足部の布の耳を同一線上に置くと，文様部が上下に表れる。この様な織物デザインは東方では見られない。

中国では，素材は絹が主であるが，無地以外は布全体に文様を織り出す傾向がある（第1タイプ）。刺繍の場合でも全体をうづめようと努力している。このことは，長沙馬王堆やノイン・ウラの絹織物を見れば明らかである（図6）。

一方，西方に目を転じ，ノイン・ウラに近い年代の遺蹟出土の織物を見ると，絹を除く毛織物や麻織物では，帯状に区切りながら全体に文様を表わすか（図7），線条を一部に入れるもの（第2タイプ）及び長方形，H型，「型などをコーナーに対称的に入れる（図8）（第3タイプ）織物デザインがある。第2タイプはチュニックに利用されることが多く，第3タイプは巻き布としてマントによく見られる。

西方では，織物の使用目的に応じて，即ち衣服の種類に応じて適当な寸法や文様配置を決定し，織りの段階で決定された通り実行した。逆に中国では，どの様な文様を織り出すかに主眼が置かれ，衣服として変化をつける

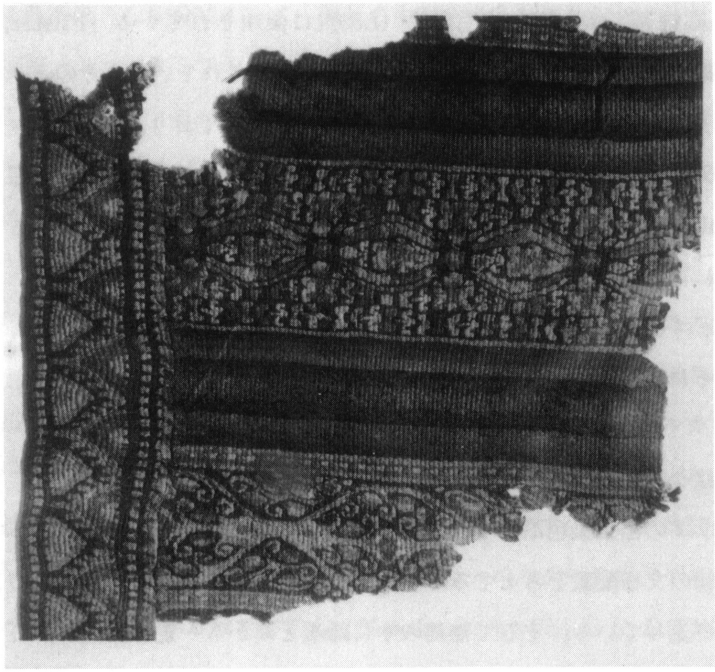


図7　パルミュラ出土毛織物
並河萬里「隊商都市」

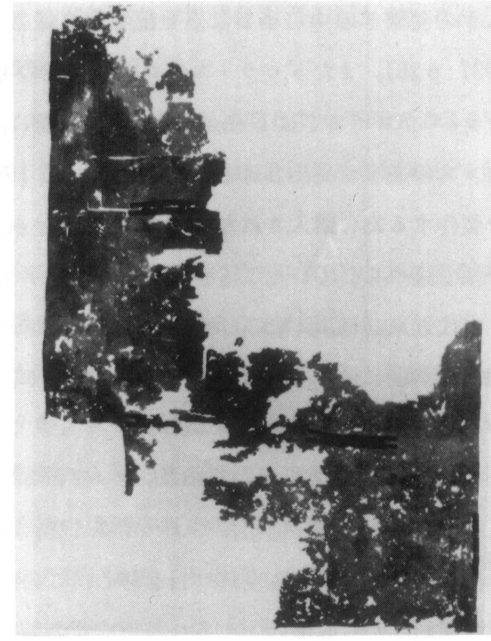


図8　アッタール出土毛織物
藤井秀夫編「イラク，アル・タール出土染織・皮革遺物の研究」

場合は，裁断や衿，カフスに別布を用いることで解決した。

ノイン・ウラの下袴に用いられた布は第3のタイプに属する。本来は巻き布として使用する目的をもって，広巾に織り上げられたものと思われる。第3タイプの織物では，初め一般的に用いられていたものが，儀式用のものと変化していったのではなかろうか。後世の壁画で聖職者が第3タイプの織物をまとっているのをよくみかける。

注

2)　高木教授によれば，ケルメスはケルメス酸であるということだ。

Ⅳ　紀元前後における東西の衣服

ここで，今まで検討してきた下袴を構成している織物の各要素から視点を移し，ズボンそのものについて考えてみる必要がある。その為に，ノイン・ウラと同時代の衣服を取り上げ，東では漢代の衣服を，西ではローマ時代の衣服を中心に据え，ズボンの占める位置を考えてみる。

漢代の衣服（図9）は，周代よりの制度を踏襲し，後漢の永年2年（後59年）に初めて輿服令として公式に公布された。それまでの衣服に関しての記録は，西周時代の金文や，『詩経』に詠まれた衣服に関する詩に見られる。『礼記』礼器篇の中に見られる規定によっても，すでに春秋時代，古代中国の支配階級の中に発生した礼的服装様式の大綱が整っていたことがわかる。それは，天子以下諸候，大夫，士の着用する祭服について，冠の形状，衣裳の色，文様，冠につける飾りなどに関するものであった。

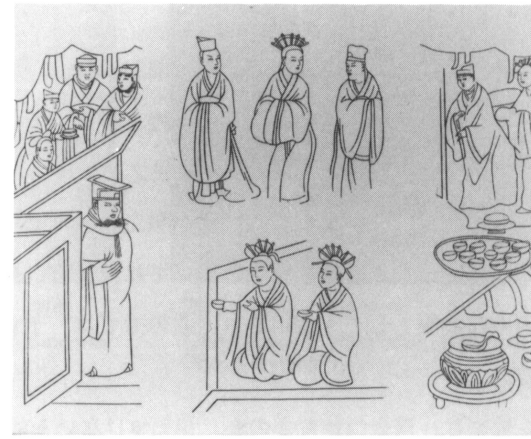


図9　山東金郷朱鮪墓石刻
沈從文編「中国古代服飾研究」

前漢時代には，まだ公式の服制は施行されていなかったが，秦時代の制度が踏襲され，天子は長冠，衿玄（キンゲン）（黒い軍服）文武百官はすべて長冠，祇（テイ）服（丈の短い単の上衣）であった。宮廷婦人の祭祀用の祭服や，蚕告祭に着用する蚕服も定められていた。

後漢の輿服令によって，中国最初の冕（ベン）服，佩，綬の制，および朝服に関する制が公式に定められた。天地明堂を祀る大祭典時には，冕服で，冕冠，袞服が着用されたが，身分に応じて冕冠の垂旒に違いがあり，袞服の色，文様に差がつけられていた。

天子の袞服の衣色は黒色で，裳は赤黄，袞冕12章[3]のうち，日，月，星辰，竜，山，華虫[4]，宗彝を衣に，水藻，粉米[5]，黼黻（ホフツ）[6]が裳に刺繍された。

三公（皇帝，皇族に次ぐ最高位）の袞服は上衣が黒で，華虫，火，宗彝の3章が刺繍され，裳に赤で水藻，粉米，黼黻の4章が刺繍された。

卿（大臣に相当）や大夫（次官）は，上衣が黒，粉米1章，下裳は黼黻2章のみであった。

朝廷に出仕する仕官の常服は，曲裾禅衣あるいは襟衣といって大襟のついたものと，直裾禅衣あるいは襜褕（センユ）といって襟のつかないものの二種があった。

武官の服装は胡服様式を踏襲した袴褶（袴と短い上衣）が用いられた。亭吏（砦を守備する役人）は赤衣，赤

幘(サク)をつけ，亭卒は求盗衣（半臂状の貫頭衣）をつけた。一般官奴は白衣，青幘，従僕は黒衣黒幘，下級衛士は黒衣であった。

この様に，支配階層から被支配階層まで，公服も常服も，すべて身分階層に応じた衣服，その色の区別があり，冠，幘，巾などかぶりものも身分階層によって規定された。

一般民衆は，そのうち文人，士人，老人は黒縁の長襦，長裾，幅巾をかぶり，農民は短襦，内側に丸首の衫(サン)(肌着）であったことが壁画や出土した俑から知られている。

漢代の宮廷女子の服装も，例外なく，祭服，蚕服，助蚕服，入朝服，朝服とそれぞれ色が規定され，頭飾も大皇太后，皇太后，皇后，皇族，公卿諸候夫人，その他官位にある女子それぞれ身分に応じて定められた。一般女官は，襦と裙に袿袍(ケイ)（打掛け）が用いられた，庶民の女子は，やや裾の短かい長襦に袴をはいていた。

概略に過ぎないが，上に述べて来たような漢代の服装は，「礼」の思想に基づく身分階層の確立と，秩序の維持の表象であった。それは，具体的に，冠り物の相違として，衣服の形，色，文様の相違として表われた。

これらは貴族的であり，形式的であったけれども，一方で機能的，庶民的なものとして胡服の普及を見逃すことは出来ない。

胡服の採用は趙の武霊王19年（前308年）に遡る。『史記』趙世家に，「……北有燕，東有胡，西有林胡，樓煩，奏韓之邊，而無彊兵之救，是亡社稷，柰可，夫有高世之名，必有遺俗之累，吾欲胡服。」「……夫有高世之功者，負遺俗之累，有獨智之慮者，任驚民之怨，今吾将胡服騎射以教百姓，而世必議寡人，柰可」「吾不疑胡服也，吾恐天下笑我也。……世有順我者，胡服之功未可知也。……」「於是遂胡服矣。」と見える。

既に述べたように，漢代においては，武官に袴褶が採用されている。また軍装にも狩猟の際にも着用され，民間の作業服としても着用され，北の方では，子女にも着用されるようになってきている〔杉本，1979：pp.128—274〕。

袴には，裆をつけたものと，裆をつけないものがあり，裆をつけたものを窮袴，別名緄裆袴といった。ノイン・ウラの下袴にも裆が見られるが，よく似たものであったらしい。

当時，匈奴の様にスキタイ文化の影響を受けた遊牧民や，半定住半遊牧の民族の間には，下袴を身につけるという慣習があったようだ。残念ながらこの地域に関する史料は乏しく，従って，出土遺物や，彫刻，壁画によって，推定するより方法がない。現にノイン・ウラに裆の入った下袴があり，毛織物と絹織物で仕立てられている。

図10　クリ・オバ出土儀式用容器
「スキタイ黄金美術」

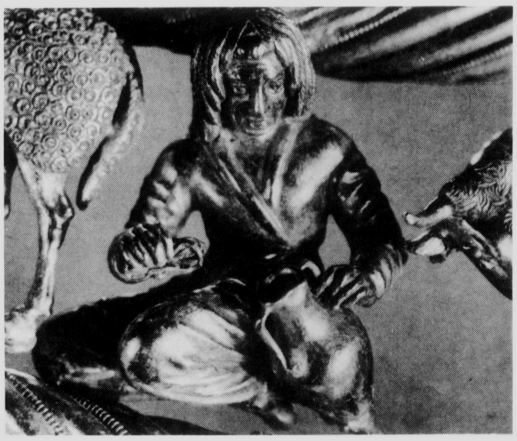


図11　トルスタヤ・モギーラ出土胸飾り
The Kiev Museum of Historic Treasures

これらは王候貴族のものであって，一般遊牧民は，フエルトや皮の下袴であったらしい。

スキタイの遺物である前4世紀のクリ・オバ（ケルチ近く）出土の儀式用容器には，如何にも皮製で刺繍や焼印による文様を施したズボンが表わされている(図10)。同じくスキタイ遺蹟である前4世紀のトルスタヤ・モギーラ出土の金製胸飾りに表わされた人物は，ゆったりとしたズボンを身につけている(図11)。前者は戦士の像であるが，後者は日常的な場面の描写である。すでにユーラシアステップ地帯における西と東の関係は，墓制や動物意匠などにより指摘されている。衣服上の類似性も，騎馬遊牧民の共通のものとして当然と考えられる。

中央アジアの東トルキスタンでは，近年の中国の発掘によって，民豊県ニヤ遺址及びトルファン，アスターナより下袴が出土している。ニヤの下袴は，長さ115cm，巾66cm，裆の長さ13.5cm，麻布でつくられ，緑色で動物文様が刺繍してある。刺繍の部分の長さ31.5cm，巾33cmである〔新彊維吾尔自治区博物館，1960：p.12，p.16〕。ノイン・ウラのものに比べると細身の下袴といえる。

中央アジアのウズベク共和国南部，ハルチャヤンの宮殿は，前1世紀のものであるが，彩色された塑像にズボンが見られる(図12)。アフガニスタンのスルフ・コタールより出たカニシカ王の像にもゆったりとしたズボンが見られる(図13)。これは後2世紀とされている。クシャン時代の貨幣に見られる王の像には，往々にしてズボン姿が表わされているので，ヘレニズム様式の衣服と共にズボンも着用されていたと思われる。

図12　ハルチャヤン　塑像
Пугаченкова "Искусство Бактрии Эпохи Кушан"

図13　スルフコタール　カニシカ王
Пугаченкова "Искусство Бактрии Эпохи Кушан"

図14　ハトラ　冥府を司る神ネルガルの像
「人類の美術」

西アジアでは，ペルセポリス宮殿の浮彫によって，当時の周辺地域の服飾についてしばしば言及されている。これらの服飾は，王候貴族と兵士のもので，像には，メソポタミアの伝統的

図15　パルミュラ　葬祭宴の彫刻
並河萬里「隊商都市」

な「カンディス」と，草原の遊牧民の機能的なズボンで，ギリシャ人によって「アナキサリデス」とよばれた下衣が見られる。すでにこの地にも遊牧民の衣服が浸透し機能性を必要とする兵士などの間に採用されていたものと思われる。紀元前後になると，パルティヤ芸術と見なされるものに，ズボンを見ることが出来る。後2世紀のハトラの「冥府を司る神ネルガルの像（図14）や，「ハトラ王ウタル」の像，パルミュラ葬祭宴の彫刻（図15），アテナタンの地下墓地「マッカイのエクセドラ」の像及び兵士の像，シャーミー出土パルティアの君主などである。この像はズボンの上に行縢をつけているように見える。

これらの像はズボンにあわせて，主としてチュニック形式のものを着，カフタンを身につけているものもある。ただパルミュラでは，これらのズボンスタイルよりはむしろギリシャ，ローマ風衣裳の像が優越している。

残念ながら，アフガニスタン，イラン，シリア地域の考古学資料の中に，ズボンの形で出土したものがない。年代が少し下るがハラビエに変った裁ち合せのズボンが出土しているのみである〔Pfister，1951：p.26〕。図像や彫像を通じて，当時の衣服を想定することが出来たが，これらの彫像が，王候貴族であったり，神像であることが多く，象徴的表現の像もあり得ることを考えると，当時の社会風俗を適確に摑み得るとはいい難い。

同時代のパレスチナにおける衣服は，宗教的性格をもつものに民族の伝統が保持された一方ギリシャ・ローマの影響を受けた衣服があった。一般の人は腰巻「サク」を肌着としギリシャ風キトンに似た下衣（シャルク）を身につけた。それは青いヒヤシンス色の定式のふさが裾にあり，縫目のない一つに織った羊毛のものもあった。上衣（タリト）は，スーツとオーバーコートの役割をなすもので敷物にも利用された。一枚の布あるいは二枚の布を縫い合わせたもので，帯で腰を締めた。ギリシャ・ローマの影響で，カナン風のシャツや女性はヒマティオンを着用した〔ロプス，1975：pp.94—101〕。

Cave of Lettersの出土品より考えるとチュニックとマント形式の組合せが見られる。チュニックにはクラビがあり，マントには各コーナーにH，Γ文，方形文がある。

同様のチュニックやマントはパルミュラやドゥラ，アッタール，ヌビアに見られ，これらの考古学資料により，当時これらの地域における衣服の概要を知ることが出来る。

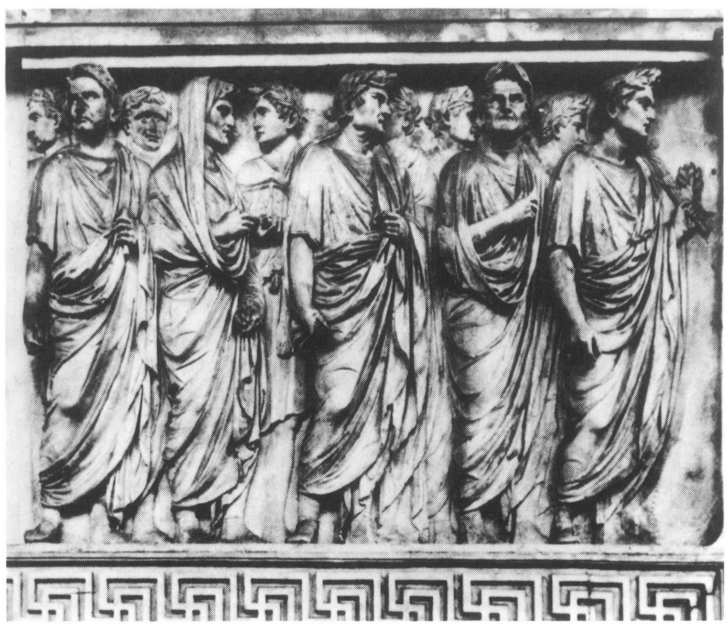


図16　アーラ・パーキス囲壁：行列
「人類の美術」

ギリシャ・ローマ時代の服装に関しては，東の秦，漢と同じく当時の記録が残されている。その上，パルミュラ，ドゥラ，エジプトに考古学資料が存在する為に，衣服に関してかなり全体像を摑むことが出来る。

ギリシャ時代の人々は，キトンを着用し，その上にヒマティオンを巻いた。ヒマティオンは方形ウール地で1～2m×3～5.5mと大きさにかなり巾がある。青年男子は，時には素肌の上にこのヒマティオンを着用した。若者，軍人，御者等は方形外着クラミュスをキトンの上や，それだけを単独に着たりした。女性は長く狭いクラミュスに当るクラミュドンを着用した。

ローマ時代には，トゥニカを下に着て上にトガを着用した（図16）。トゥニカは元来袖のない下着であったが，3世紀初め頃から，袖付のダルマティカとして上着として着られる様になった。トゥニカには，トゥニカ・アングスティクラビアといって，騎士や貴族が着用するものには，巾約0.9cmの緋，紫の細いクラビが入っている。トゥニカ，ラティクラビアは元老院議員のもので，巾約7～10cmの緋，紫のクラビが入っている。凱旋式用には，紫色の縁どりがあり，後には総紫色となる。トゥニカ・アルバは一般人がつけた白麻の丈長のトゥニカで，後にはキリスト教の典礼服となった。

トガは細長い半円形状で，ローマ市民しか着用を許されず，着用者の身分の差が縁飾りや色どり，襞巾などで表わされた。つまり，成人のトガであるトガ・プーラは自然色，未成年のトガ・プレテクスタは，直線部に添って，緋や紫の縁取りがしてあった。統領，執政官，検閲官，神官が官職者の公服として，同様のものを着用した。元老議員は，下へりに幅広の縁取り，騎士は幅の狭い縁取りがあった。凱旋将軍の着るトガ・ピクタは紫地に金糸の刺繍があり，後に皇帝や執政官の公服となった。トガ・カンディダは官職立候補者のもので白無地，トガ・プラは喪服で黒や暗色，下層民，罪人が着用した。トガ・トラベアはト占官が着用し，緋色の縞と緋紫の縁どりがある。

トガはローマ共和国時代から帝国前期，すなわち前2～後2世紀が盛期で，帝国末期には，皇帝や官吏の儀礼的な衣服に形式的に残るのみで，トゥニカが一般の人達の主要な上着となり，先に述べた様な身分を表わす種々のものが現れた。

女性用では，マトロナ（名門既婚婦人）のまとうストラがあり，トゥニカと同じ形で，色々なデザインがあった。喪の時以外は，2本の細帯で胴を締めていた。その上にショール風に長方形のパルラをかけた。

男性は冬期や旅行時，一枚布であるパエヌラをトゥニカの上からはおった。またレインコートとして，半円形のラケルナがあり，胸の上あるいは右肩にブローチで留められ，トガの上にはおった。これは中流層に広まったが，公式のローマの衣裳とは認められなかった。

問題のズボンに関しては，ブラッカエという名のズボンがある。トラヤヌス帝（99―117）時代以降，まず膝までのもの，その後にくるぶしまで達するものとなった。ガリア人，ゲルマン人，ダキア人の衣裳から，ローマ人の兵士のものとして採用されていくが，ローマ市民の普通の衣裳としては，地中海世界では古代末期までなかなか広まらなかった〔長谷川，1981：pp.66―78〕。

ローマ時代の染織品が多く発見されたドゥラ・エウロポスのNebucheluの家の壁に記録された商品名の中に，マント，チュニック，ローブ，クッション，バンドなどの文字と共にズボンに当る文字が見出された〔Pfister et al., 1945：p.6，p.12〕。このズボンはハトラやパルミュラの像に見られたズボンであったろうか。

考古学上の出土遺物や，各地の彫像によって認められたズボンには，細身のものと広巾のものが認められる。そして広巾のものには裾でしぼってあるものと，ズボンの折れに当るところに，前立風に文様帯や飾釦がついているものがある。細身のものはそれ自体表衣とされる場合もあれば，衣服の中に下衣として着用されている場合もある。前立風の飾りのあるものは，クシャン王やハトラ王，パルミュラの像に見られる。広巾で裾をしぼったタイプは，ノイン・ウラ出土のものやスルフコタールのクシャン王の像に見られる。

漢書西域伝に「大月氏国……民俗銭貨，與安息同……」「大月氏……與匈奴同俗。」「康居国……與大月氏同俗。……」「大宛国……土地風気物類民俗與大月氏，安息同。……」「烏孫国……隋畜逐水草，與匈奴同俗。」と見えるところから，匈奴，烏孫，大月氏，大宛，康居，安息は類似の風俗であったことがわかる。

これらのユーラシア草原地帯の遊牧民や，遊牧民であった民族をはさんで，東の漢と西のギリシャ・ローマの衣服上の共通点は，述べて来たように，身分階級による衣裳の形，色，文様の違いが厳然として存在していたことである。ここで指摘したいことは，漢における文様は，竜や日，月，山などの象形文であって，それぞれが何らかの観念象徴として意味を持っているのに対して，ローマでは，クラビや縁飾りの幾何文である。

次に衣服を構成する場合に，織り上げられた布をそのまま身に当てたり（キトン，トゥニカ）巻いたり（ヒマティオン，クラミュス）して使用する場合と，たとえ織り上ったものを裁断しても半円形など単純な形に過ぎないもの（トガ）をまとう一枚布タイプと，裁断された各部分を縫製して，一つのまとまった形に仕上げる複数布タイプがある。

前者はギリシャ，ローマ系の衣服であり，後者は，秦，漢系の衣服である。

これは，織物の巾と無関係ではない。漢代の織物の巾は50cm足らずであるのに対して，メソポタミア，シリア，エジプト等の当時の織物には，織巾２ｍに近いものが見られる。これらの織巾は，東西の織機の違いによって生じたものである。

上に述べて来た様な，東西の衣服の相違，つまり西における衣服のシンプルな構成，幾何文による文様配置(クラビやコーナー対称文様)，東における複雑裁断構成と象形文の総文様の大きな相違点は，ノイン・ウラの下袴を構成する織物の生産地を考察する上で重要な鍵と考えられる。

注

3)　日，月，星辰，山，竜，華虫，藻，火，粉米，宗彝，黼，黻を云う。

4)　錦鶏の一種でよく闘って敗けない鳥といわれる。

5)　米粒の文様。

6)　黼は２本の斧が相背している文様，黻は弓が相背している文様。

V　下袴に関する考察

ノイン・ウラの衣服，織物は，幸いにして前２年の年代を示す銘文のある漆塗耳杯によって，紀元前後であることがわかっている。その為，比較考察の目的をもって，東方あるいは西方の衣服，織物に目をむける場合，紀元前後の出土品や記録を中心に考察するのが最も妥当であると考え，実際その考えに基づいて論を進めて来た。

既に述べて来た様に，下袴を構成している毛織物には，織物技術上，若干の特徴が見出された。織物にほどこされた経糸始末は，古くは紀元前８世紀より紀元後６～７世紀に至るまで各地の古代織物に見られるのである。特に織端近くの線条は，シリア，メソポタミアの織物に見られる。

次に織物のコーナーに，綴技法を用いてはめこまれた長方形の繧繝文様がある。そこに見られる綴技法そのものや，繧繝による美的効果もエジプトから中央アジアまで，広い範囲の古代織物に見出される。これもおそらく古代オリエント地域より中央アジアへ波及したものと思われる。ただノイン・ウラの綴技法による文様は，地の部分が先に織られてから文様部分に手で糸を入れている。

繧繝を表わす糸を作り出すための技法，つまり，糸を紡ぐ前に原毛の状態で染色され，適当な色配分の糸を紡ぐ方法は，シリア，メソポタミアに見出すことが出来る。

この赤紫の糸を染めた染料は，ケルメスの可能性が最も高かった。ケルメスを含む貝殻虫や，その寄生する樹木に関する記述は，古代西方の文献資料に多く見出される。実際ケルメスで染めた糸の使用織物の例は，メソポ

タミア，シリア，パレスチナの当時の出土品についての報告書に見られる。このケルメスが，染料，あるいは染められた毛や糸として移動する可能性はあっても，ケルメス樫の繁殖地は地中海から中東まで[7]で，ノイン・ウラでのケルメスの生産は考えられない。

この様に，ノイン・ウラの下袴に見られる織物の若干の技術は，西方，特にシリア，メソポタミアを中心とした地域の技術に近いものであることが理解される。

もう一つ付加されねばならないのは，織物意匠の問題である。先に示された様に，毛織物の一定の場所に，長方形の文様がはめこまれる意匠に注目しなければならない。東方の織物は象形文の総文様であったのに対し，西方では幾何文の定位置文様（左右対称あるいは上下左右対称）で，総文様であってもボーダーと刺繍や縞のラインが見られる総文様帯である。

ノイン・ウラのものは，この定位置文様と云えるだろう。この様な定位置文様は，古代の記述からも，実際の出土品を見ても，チュニックやマントに見出される。紀元前後にこれらの衣服が用いられた地域は，主としてローマやヘレニズムの影響を受けた地域である。現在のところ，シリア，メソポタミアより東方では，定位置文様のあるチュニックやマントの出土は稀である。従って，ノイン・ウラの下袴の毛織物の生産地は，シリア，メソポタミア，ペルシャ及びヘレニズムの影響を受けた周辺地域の可能性が高い。

西方で生産され，中継されつつ，交易品として，あるいは周辺遊牧民の貢物として，匈奴のもとに到来したものであろう。この毛織物を，匈奴は自分達の衣服の形に適する様に裁断して縫い合わせたに違いない。その際，長方形の文様が下袴の足部で丁度左右対称となる様に考慮して裁断された。現在ならその厚みが障りとなって，当然断ち切られる縄状経糸始末は，どういうわけか一部分残されて今日に至っている。そのお陰でこの織物の当初の形を知ることが出来，考察の糸口ともなったのである。

下袴を着用する風俗は，当時，漢やローマにも浸透しつつあったけれど，本来遊牧民のものであった。

匈奴のもとで縫製された可能性については当地で縫われたと見られるカフタンや，動物闘争文のある敷物のアップリケの技術等から匈奴には充分縫製能力があったこと，むしろその点では秀れていたことを強調したい。

毛織物が，生産地や中継地点で縫製されるよりも，反物で到来し，匈奴の地で縫製されたという考えに傾いている。　この様に，ノイン・ウラの下袴には，西方の文化と北方草原の遊牧文化との結合が見出されるのである。

注

7)　神戸大学，田村教授による。

おわりに

ノイン・ウラの織物の調査をするにあたり色々と便宜をおはかり下さり，かつ御指導賜りましたエルミタージュ博物館のルポ・レスニチェンコ博士，及びお世話になった博物館の諸先生方に心より御礼申し上げます。

また，染料を検討いただき，御指導下さいました大阪教育大学，高木教授，植物分布について御指導下さいました神戸大学，田村教授に厚く御礼申し上げます。

なお，この稿を書く為の基礎知識は，アッタール染織品の調査に負うところが大きいことを申し添え，この機会を与えて下さり，研究面で御指導下さいました藤井教授に心より感謝致します。

引用・参考文献

Baur, P.V.C., Rostovtzeff, M.I. and Bellinger, A.R., 1933, *The Excavation at Dura-Europos, Preliminary Reports, Fourth Season, 1930—1931,* New-Haven.

Bergman, I., 1975, *Late Nubian Textiles,* SJE Vol. VIII, Scandinavian University Books.

Верховская, А.С., 1955, "Текстильные Изделия из Раскопок Кармир-Блура" *Кармир-Блур* III, Пиотровский, Б.Б., Академии Наука, СССР.

沈 従文編，1981，『中国古代服飾研究』，商務印書館香港分館.

藤井秀夫編，1980，「イラク，アル・タール出土染織・皮革遺物の研究」『ラーフィダーン』 I，国士館大学イラク古代文化研究所.

藤井秀夫，高木豊，坂本和子，岡田浩海，市橋幹蔵，1983，"Textiles from AL-Tar Caves, Iraq" 第31回 *CISHAAN* 国際会議発表 *Full text,* 国士館大学イラク古代文化研究所.

服装文化協会，1971，『服装大百科辞典』，文化出版.

後藤捷一，山川龍平，1972，『染料植物譜』，はくおう社.

Грязнов, М.П., 1980, *Аржан Царский Курган Раннескифского Времени,* Наука.

長谷川博隆，1981，「ローマ人とその服飾」『服装文化』169，文化出版.

湖南省博物館，中国科学院考古研究所編，関野雄訳，1976，『長沙馬王堆一号漢墓』，平凡社.

Levey, M., 1955, *Janal Chemical Education* 32.

Лубо-Лесниченко, Е., 1961, *Древние Китаиские Шолковые Ткани и Вышивки,* Гос. Эрмитаж.

Thurman, C.C.M. and Williams, B., 1979, *Ancient Textile from Nubia,* The art Institute of Chicago.

Perkin, G. and Ernest, E., 1919, *The Natural Organic Colouring Matters,* London.

Pfister, R., 1934, *Textiles de Palmyre : I,* Paris.

———, 1937, *Textiles de Palmyre : II,* Paris.

———, 1940, *Textiles de Palmyre : III,* paris.

———, 1951, *Textiles de Halabiyeh* (*Zenobia*) , paris.

Pfister, R. and Bellinger, L., 1945, *The Excavation at Dura-Europos : Final Report IV : part II*, New-Haven.

Пламеневская, О.Л., 1975, "Некоторые Данные о Тканяхиэ Кургана Аржан" *Ученые Записки* Вып. XVII, Кызыл.

ロプス，D. 著，波木居斉二，波木居純一訳，1975，『イエス時代の日常生活』II，山本書店.

Руденко, С.И., 1962, *Культура Хуннов и Ноинулинские Курганы*, Академии Наук, СССР.

———, 1968, *Древнейшие в Мире Художественные Ковры и Ткани*, Искусство.

シンガー, C., ホームヤード, E.J., ホール, A.R.著，平田寛訳，1978，『技術の歴史』 I，筑摩書房.

新疆維吾尔自治区博物館，1960，「新疆民豊県北大沙漠中古遺址墓葬区東漢合葬墓清理簡報」「新疆吐魯番阿斯塔那北区墓葬発掘簡報」，『文物』1960—6.

杉本正年，1979，『東洋服装史論攷』古代編，文化出版.

Sylwan, V., 1941, *Woollen Textiles of the Lou-Lan people*, Stockholm.

内田吟風，田村実造他訳注，1976，『騎馬民族史：正史北狄伝』 I，東洋文庫197，平凡社.

梅原末治，1960，『蒙古ノイン・ウラ発見の遺物』，東洋文庫.

Yadin, Y., 1963, *The Find from the Bar Kokhba Period*, Jerusalem.

(国士館大学イラク古代文化研究所・共同研究員)

アル・タール出土染織品研究その後

藤井秀夫[1)]・坂本和子[2)]・岡田浩海[3)]・市橋幹蔵[4)]

アル・タール出土の染織品については，1980年，ラーフィダーンⅠの出版以来，新たにプロジェクト・チームを編成し，全資料の材質，糸，組織，文様，染色等について調査研究を進めている。

これらの資料の中で，ラーフィダーンⅠ（特集記事―イラク，アル・タール出土染織・皮革遺物の研究）で報告した「復原模型」に関する資料（第4章―模型製作 pp.128―150）は，すでにイラク政府の要請により1977年に返還し，原資料はイラク博物館に保管されている。

再調査の結果，これらの資料と同一片と推定されるものから次のような事実が判明したのでここで報告したい。

Specimen 224，225について

図1と同一片と推定される資料，図2，図3（ラーフィダーンⅠのSpecimen 224，225）は，図4に示すような単純な技法でありながら，パイル用双糸を7～8本引揃えて表側にパイルを形成し，次の段では裏側にパイルを形成するという方法で両面パイルを作り上げている。

地は，黄（dull reddish yellow）の経糸1本に対し，同色の緯糸2本で経畝織にされ，パイルの段では，経糸3本をひとまとめにして1単位のパイルが形成されている。パイルが作られるとき強く締められたため，経糸は蛇行している。

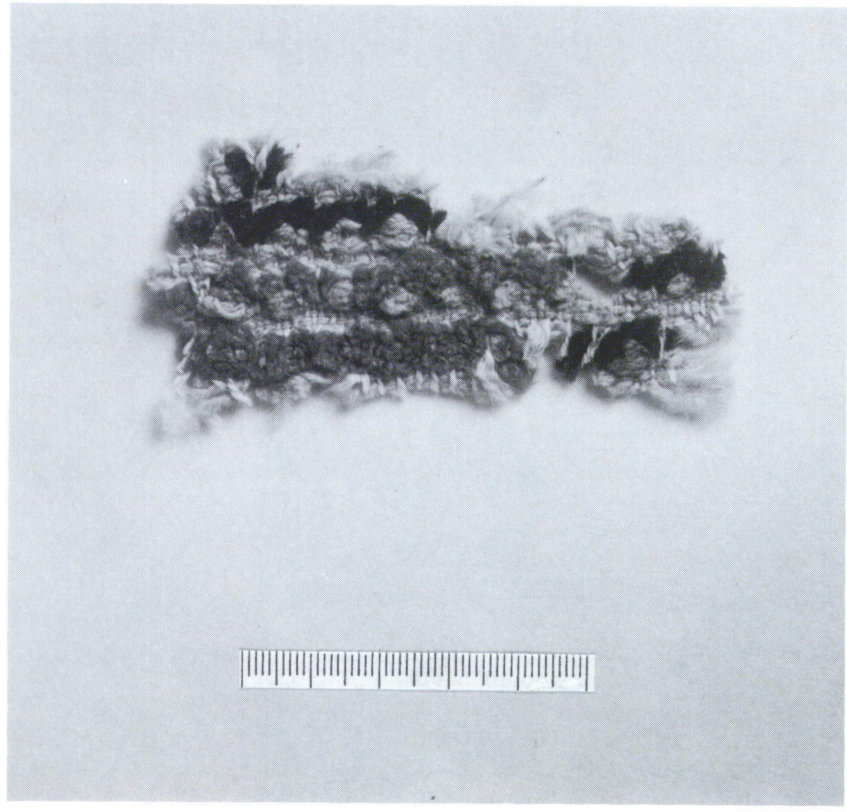


図1　Specimen 226（図版7-1参照）

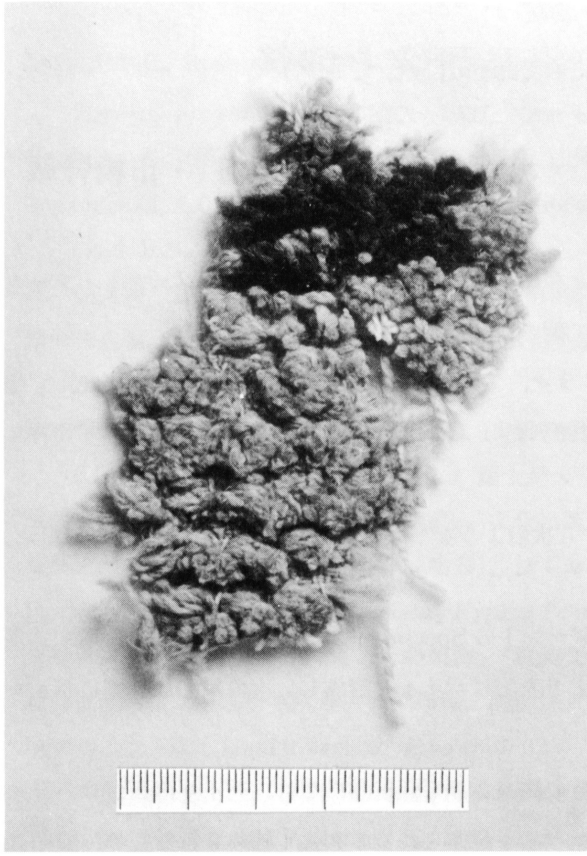


図 2　Specimen 224

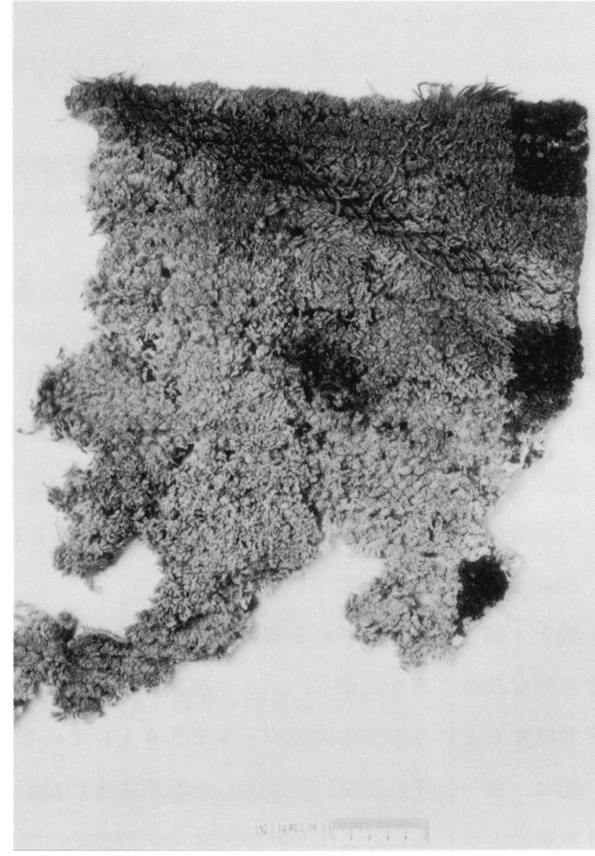


図 3　Specimen 225（図版7-2参照）

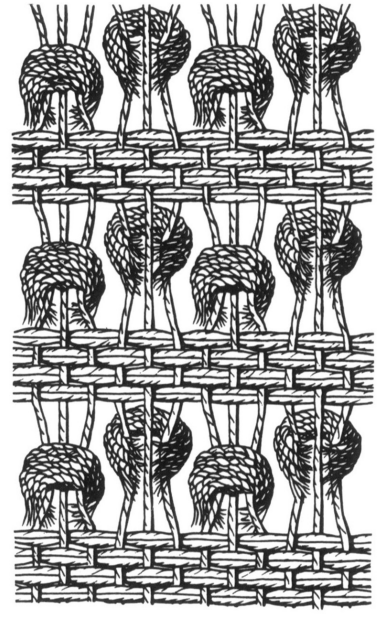


図 4　Specimen 224, 225の組織要領図

Specimen 178について

図5は，黄（dull reddish yellow）の地に，紫（grayish purple）のH字形文が織り出されている。図6に示すように地の部分は平組織（plain weave），文様部分は経糸2本に対し，緯糸1本のよこ畝組織（rib weave）で構成され，文様部分のみ文様を際立たせるため緯糸密度が高い。地と文様の織り始め，織り終りの境界線には経糸の交差が見られる。

経糸交差によって経糸2本を引揃え，組織交錯点を減らし，緯糸密度の高い文様部分が硬くなるのを防いで，地の部分との調和を計っていると考えられる。また経糸交差は文様上下のラインを安定させる効果をあげている。

経糸仕末はZ撚りのY状に仕上げられている。図7に示すように経糸は数センチの長さに切られ，S撚りに下撚りされ，その2束を合せ，さらにZ撚りに上撚りがかけられる。その過程で経糸は5～7本を1単位として交互に下撚りに組み込まれてゆき，仕上りは一定の太さのY状となる。

図5　Specimen 178

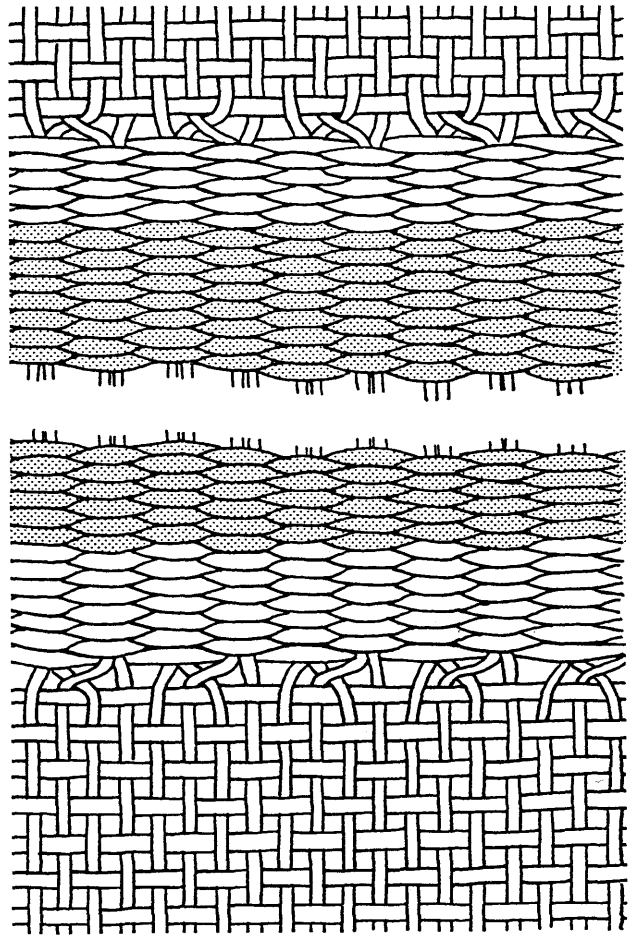


図6　経糸交錯の組織要領図

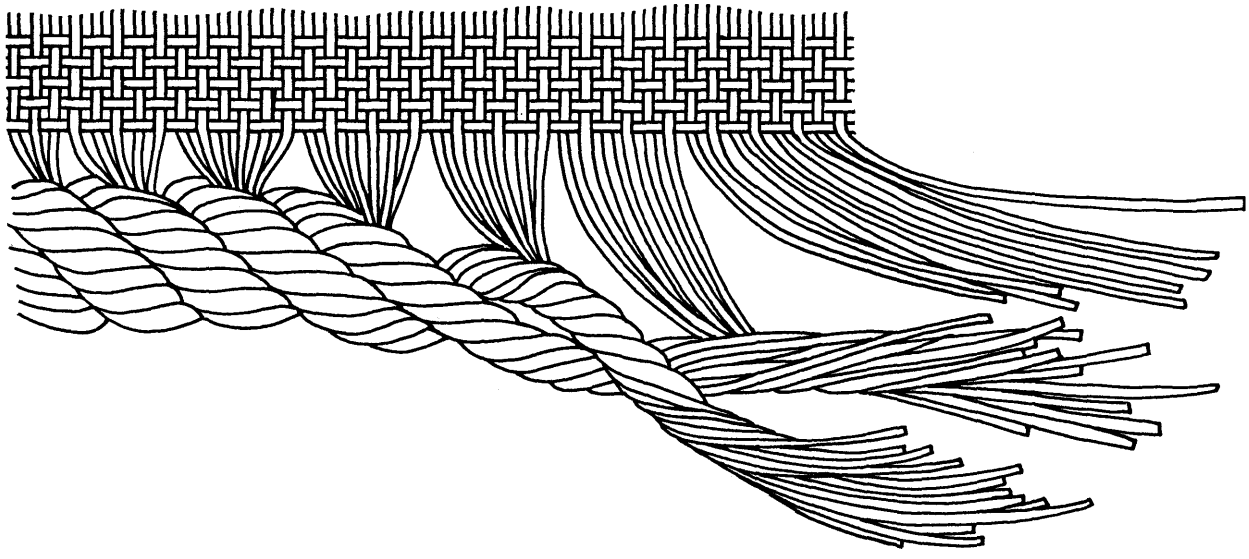


図7　経糸仕末の組織要領図

Specimen 67について

図8の耳は，一見コード状になっているのが観察されよう。耳は緯糸を耳糸（5本どり3列）に繰り返し組織させることによって作られている。

黄（gold）部分と紫（dark red）部分はいずれも平組織（plain weave）で織られているが，紫部分の緯糸は経糸がほとんど見えない程つまっており，黄部分の緯糸密度の約2倍もある。

耳の作り方は，原則として図9のようになる。緯糸はコード状の耳部分では，地の部分の2越に対して4～8越で組織され，耳に厚みを持たせている。これは布地の成形に役立っているように思われる。

また，同一種類の別断片に残るインター・ロック部分では経糸2本どりになっている。

この布はH字形文様のある大布の一縁に配された方形文の一部と考えられる。

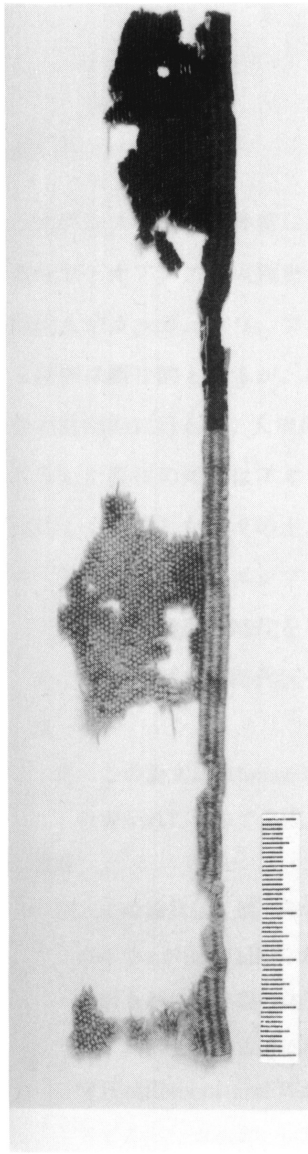


図8　Specimen 67
（図版7-3参照）

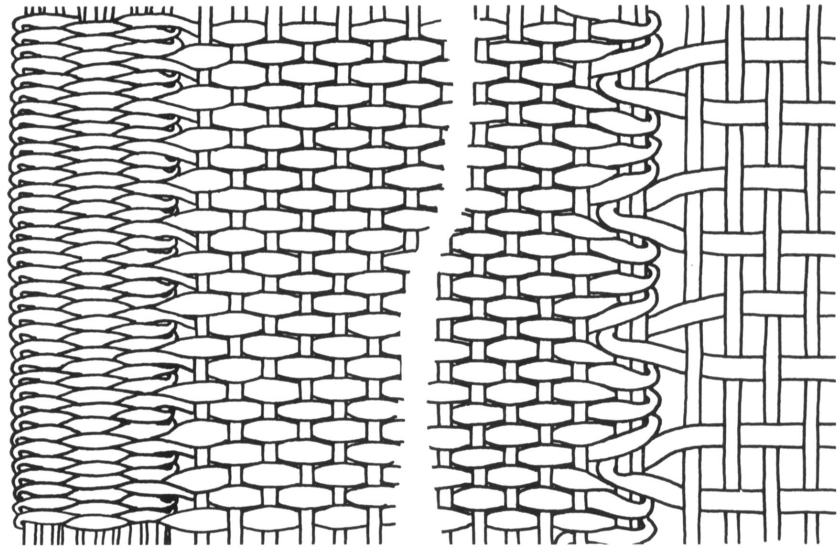


図9　耳の組織要領図

1）国士舘大学イラク古代文化研究所所長・教授
2）国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員
3）国士舘大学イラク古代文化研究所・助手
4）川島織物テキスタイル・スクール嘱託研究員・
国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員

M.ミトワリ著：エジプトのリビア砂漠のオアシスとナイル溪谷の歴史的交渉[1)，訳注1)]

訳者：葭本鶴江

目　次

緒言
I　先史時代
1　岩壁面
2　フリント石器
II　王朝時代
III　古典時代
IV　中世
V　近代
文献

緒言

オアシスの歴史は非常に古い時代からナイル溪谷の歴史と織りまぜられているようである。結論的にいえば，カルガ・オアシスの人類史は石器時代に遡るし，他のオアシスの歴史も石器時代に遡れると推論できる。旧石器時代人がカルガ，シワ，ファユームの諸オアシスに住み周辺の砂漠を徘徊していた証拠がある。王朝時代になると証拠は断片的となるが，第12王朝まで歴史を跡づけることができる。グレコ・ローマ時代には給水の開発と保全が計画的に行われ，大規模な土木工事が遂行された。イスラム期になるとどのオアシスも全般的に軽視された。こうした軽視の傾向はアオシスの住民の側によるものか，支配者の側の軽視によるものか分らないが，ローマ時代によく発達した種々の土木工事の補修や拡張工事がうまく行なわれなかったようである。この状態はモハメッド・アリ・パシャがエジプトの王位につきオアシスを領有する19世紀初頭まで続いた。

王は新しい発展の時代を築き今日まで続いている。

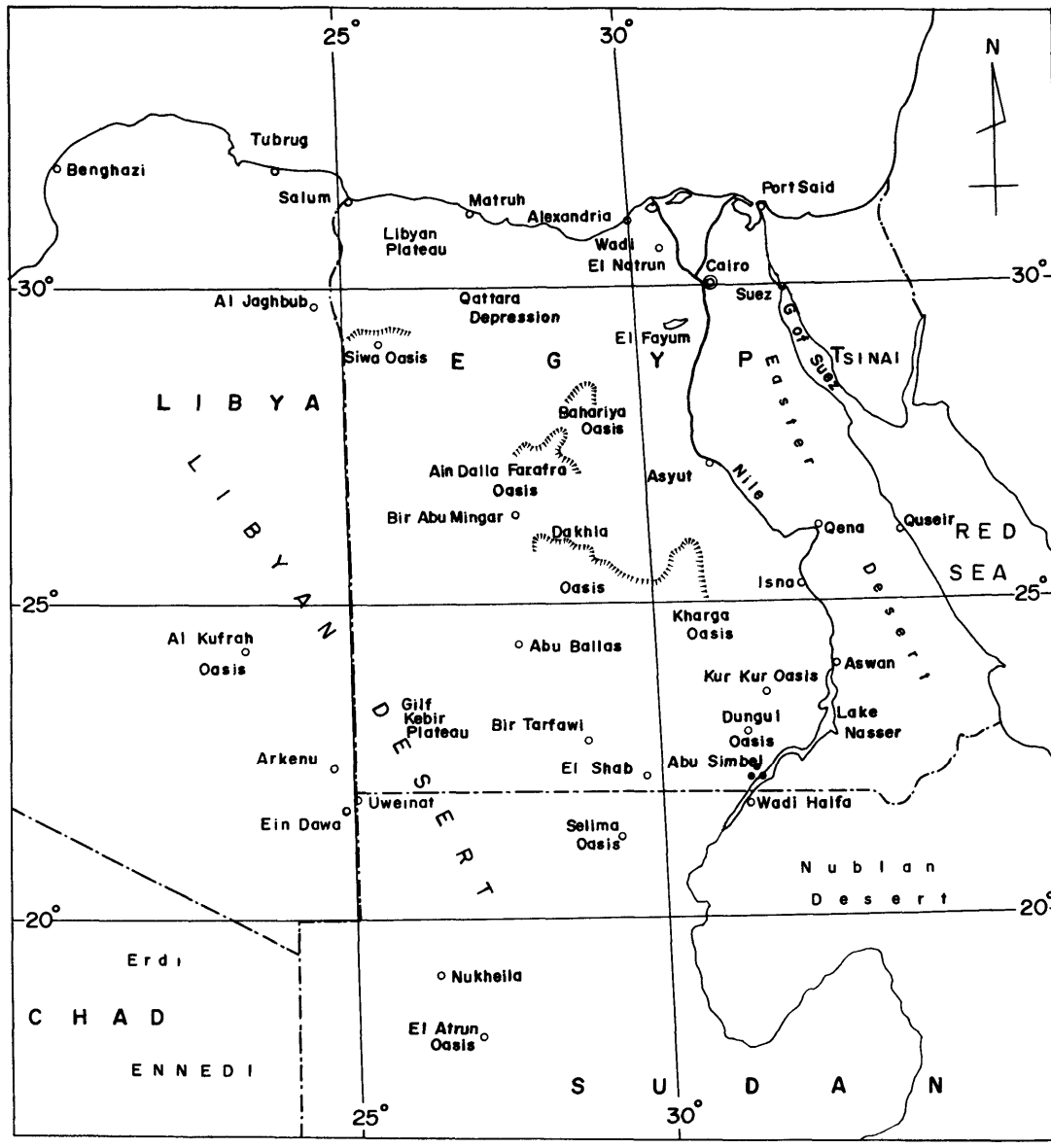
オアシスの歴史の時代区分をこの論文では以下の如く分けてみた。

注

1) この論文は Ahmad Fakhry 博士のバハリーヤ，シワ両オアシスの記念すべき一連の歴史研究が世に出る幾年か前に書かれたものである。この歴史研究は非常に詳細にわたり，オアシスの歴史的知識に多大の貢献をした。

訳注

1) この論文は，M.Mitwally, 1952, "History of the Relations between the Egyptian Oases of the Libyan Desert and the Nile Vally", *Bulletin de l'Inst. Fouad I du Désert d'Egypte*, Tome II－1，pp.114—131 の全訳である。出版されて30年程の歳月が流れ，当然部分的に古い個所があるが，エジプトの地理学界に於ける「歴史地理的研究」のピークをなす古典的論文として注目すべきと思う。この論文を最初に読んだのは，1966年であった。私の Ph.D.論文(Settlement and Water Supply in Kharga Oasis, Western Desert of U.A.R.-Egypt, Cairo, 1968）のフィールドであったカルガ・オアシス（当今は New Valley といった方が通りがよいかもしれないが。）を初めて訪れた後，短いリポートをカイロ大学の地理学の指導教官リズカーナ教授(学位は考古学で取られた。地理学と考古学とが密接な関係を保って発達したのはエジプトの地理学の一つの大きな特色である。)に提出した時，「ミトワリ博士の論文を知りませんね。」と注意して教えて下さったのであった。私はリポートの中でカルガ・オアシスのヒッビス神殿を，



エジプトとリビア砂漠　　1：12½M

エジプトから一般向きに出版されているパンフレットに従って「ダリウス大王の建てた神殿」と書いてしまったのであった。

ミトワリ教授のこの論文を読み終えた時，東京大学大学院の恩師故石田英一郎教授（文化人類学）の「人類史の再構成」という発想に非常に近いと思った。日本流に云えば地理学の論文というより文化人類学（特に歴史民族学）の論文といった方がよいと思われる。ここにエジプト地理学の一つの特徴があらわれている。ミトワリ教授は，リビア砂漠の地理学研究の開拓者に相応しく，地下水の問題，経済開発，人口問題と多方面にわたる研究論文を発表している。1953年には，"Physiographic Features of Libyan Desert", *Bull. de l'Inst. du Désert d'Egypte*, Tome III—1, pp.147—163があり，これは純地理学的論文である。しかしなんといっても，ミトワリ教授の本領は歴史地理学とい

えよう。

このような研究が現われた背景を説明するには，近代エジプト地理学の発展を略述しなければならない。わが国ではエジプトの地理学界の様子が知られていないので，日本とエジプトとの文化協定に基づく留学生として，また正規コースの学生として三年余学び，カイロ大学から地理学で博士号（Ph.D.）を取得した者として，私なりの紹介をしてみよう。

近代エジプト地理学の発展の中核である「エジプト地理学協会」とその紀要について，「協会百周記念」と「第一回アラブ地理学者会議」開催を前にして，トニ博士は次の評論を発表している。

Y.Toni, 1966, "The 'Bulletin de la Société de Géographie d'Egypte', A Review of Its Volumes, 1875—1965", *Bulletin de la Société de Géographie d'Egypte*, Tome XXXIX, pp.83—114.

これの要点を中心に私の考えも加えて書いてみよう。

エジプト地理学協会の発展はエジプトの近代史（現代史）の一側面を物語るものとして極めて興味深いものがある。協会が創立されたのは1875年であった。1870年代には世界を通じて最大数58（創立状況は1820—1870年に15，1870—1880年に58，1890年代に10，1900年代に11，1910年代に10，1920年代に31である。）もの地理学協会が設立されたのであって，エジプトもその例外ではなかった。わが国の「東京地学協会」（Tokyo Geographical Society）も例外ではなく，1879年に創立されたのであるが，古いことでは人後に落ちないエジプトでは既に4年前に地理学協会が出来ていたわけである。エジプト地理学協会（La Société de Géographie de d'Egypte－1953年以降の名称）の名称の変遷はエジプトの政治史と関係がある。次の通りである。

La Société Royale de Géographie d'Egypte（1922—1952）

La Société Sultanieh de Géographie du Caire（1917—1922）

La Société Khédivale de Géographie du Caire（1875—1917）

トニ博士は協会の百年間の歴史を次ぎのように区分し，その特徴を述べている。

A．最初の50年間（1875—1925）

1．19世紀の最後の4半期（1875—1900）

2．20世紀の最初の4半期（1900—1925）

B．最近の40年間（1925—1965）

3．戦前の時期（1925—1945）

4．戦後の時期（1945—1965）

この期間に協会の目的が何度か改訂されている。1875年の創設時の協会の目的は，

（i）　あらゆる分野の地理学的研究。

（ii）　未探検か殆んど知られていないアフリカ地域に光を投げかける。

第一目的が除外されたわけではないが，第二目的が強調された。協会は one 'of geography'であって not 'of geographers' であることが期待された。協会が誕生した時代は世界史的にみても，one of fervent 'geographical discoveries' の時代であり not of 'geographical research' であった。

1917年の定款の改訂で協会の目的は，「……特にアフリカ，エジプト及び隣接地域の地理に関係した諸科学の研究と奨励」と変わり，1956年の改訂では「……協会の目的は，特にアフリカ，エジプト及びアラブ世界の地理に関して地理学の諸研究と隣接諸科学を奨励，促進する。」となった。1956年に始めて「アラブ世界」に力点が置かれたことは注目に価する。

機関誌の紀要の最近の機能は専門的（職業的）地理学者と隣接科学者の出版の媒体となった。これは正会員の人数の変遷をみてもそれが反映されている。創立一年目の1876年の会員数は334人，1922年は434人，1926年は最高で567人の会員数を数えたのに反し，1965年には130人以下という少数にとどまっている。

A．最初の50年間

1．19世紀最後の4半期（1875—1900）

この時期は，アフリカ分割と民族意識の高揚した時期で，エジプトも職業軍人を主としたアフリカ探検の時期であった。

2．20世紀の最初の4半期（1900—1925）

エジプトそのものが植民地化されてしまい，19世紀のロマンと夢は消えた。この時期はアフリカ探検と次ぎの学問的研究の過渡期の時代といえよう。1890年から1915年の第一次大戦勃発の過渡期をへて，次第に歴史学，考古学，歴史地理学の芽が出始めている。またこの時期は王朝派時代というべく，特に Ahmed Hassanain Bey の有名な探検があげられる。紀要はフランス語が主流であったのに反し，次第に英語で書かれるようになった。第1期より，第2期は外国人の投稿が目立つようになった。

B．最近の40年間（1925—1965）

1925年は分水界とでも云える。これ以後は学問的研究が中心になる時期で，形成期の軍人を主とした探検的研究に加えて，生物学，考古学，エジプト学，民族学，物質学，古生物学の分野の活躍が目立つ。特に注目すべきは，1925年カイロ大学というエジプト人の総合大学が正式に発足したことである。専門的地理学者が現われはじめ，紀要も民族的，アカデミックな専門的（職業的）地理学が登場する。

3．戦前の時期（1925—1945）

1925年のカイロ大学設置と共に注目されるのは，第一回国際地理学会議（1925年4月4日～9日）の開催である。紀要の1926年 Vol. XIVは，あらゆる分野の地理学があらわれ，自然地理学，経済地理学が歴史地理学とほぼ同数となったことである。D.A.Demangeon の提案に基づいて農村地理学の研究が行われるようになり，調査項目はアラビア語，フランス語で作成された。1927年の紀要では農村地理学が主流となっている。

地理学はすでに1908年大学で教授されたが，歴史学との関係に於てなされたので，地理学として独立したのは1925年以降といえる。けれどもこの期間に紀要に発表された論文は40%以上が歴史地理学で，数にして90のうち37となっている。自然地理学はたった5.5%である。30%は地理学の論文ではなく，その内容は民族学，人類学，考古学，歴史学で他に，地質学，古生物学，化学さえ含まれている。1930年代は，アラブの地理学者が次第に育っていくことが注目に価する。開拓者として，M.Amer, S.Huzayyin, M.Mitwally, A.Ammar の名をあげることが出来る。彼等は英語とアラビア語で論文を書いている。皆歴史地理学的論文である。エジプト人によるエジプトの地理学が定着するには70年の歳月を要した。このあたりに，カイロは国際的であると同時に植民地化され，学問の発達もその経過をたよらざるを得なかった事情を見ることが出来る。

4．戦後の時期（1945—1965）

1947年の紀要では突然自然地理学が目立つようになり，この傾向は1959年の紀要まで続く。これは自然地理学者の H.Awad 教授が協会の事務総長をしている期間と一致している。1947年—1959年の間の論文をみると，たった15%が歴史地理学であり，38%が自然地理学となっている。歴史地理学は下火になってきたといえよう。1925—1945年間の論文の40%以上が歴史地理学で，たった6%が自然地理学であったのと比べあわせると，その特徴がよくわかる。戦前の特徴は，歴史地理学が民族学，考古学，人類学と密接な関係を保っていたのに反し，戦後は，自然地理学が，地質学，水文学，土壌学と深い関係をたもつようになることである。しかし，H.Awad 教授がマグレブに行ってしまった1960年以降は自然地理学のウエイトがへった。

協会の評議員も12人のうち1人だけが地理学者ではなく，運営そのものも地理学者の手で行われるようになった。投稿者もアラブ人（エジプト人）が多くなってきた。紀要は国際性を問うため，英語，フランス語で発表されるが，ますますエジプト人の手によって，社会地理学，経済地理学を含むアラブ地理学が指導的役割をはたすようになるだろう。特に注目されるのは，別にアラビア語の紀要が発足したことである。

I　先史時代

今日のリビア砂漠は世界でもっとも荒涼とした地域の一つであるが，最近の考古学的発見により，気候条件のもっとよかった先史時代には全域を人類が徘徊していた事実が示された。これらの発見は主として岩壁画とフリント石器に限られている〔Newbold, 1928〕[訳注2)]。土器がいくらか発見されているが，出土状況から岩壁画やフリント石器との関係が明確でない。

1　岩壁画[訳注3)]

リビア砂漠は岩壁画が最も多い宝庫の一つと考えられている〔Graziosi, 1934〕。いくつかの地域は，量質共にアルジェリアの中心地に匹敵するかそれを凌駕するほどである。絵は主として露出した巨礫や丘陵か断崖の面に刻まれている。絵の主題は主として動物や人間である。描かれた年代は4つのグループ〔Newbold, 1928：p.289〕に分類されているが，ここでは第1グループのみに関係がある。

ブッシュマンの一連の岩壁画（後期旧石器及び初期新石器）は動物によって代表されるが家畜化された徴候をなんら示さない。しかしエジプト王朝時代のものはラクダを欠如するが家畜化された動物を含み，ローマ時代，中世，近代のものは他の動物や人間と共にラクダの絵を含んでいる。

ウインロックは，カルガとダカラとの間のグバァリ路の北側の境となっている丘陵の斜面でたくさんの絵が刻まれているのを発見したと報告している〔Winlock, 1936：p.53〕。彼は近代のバダウィがつけた印の他に，キリン，幾種類かのカモシカ（ibex, oryx 又は gazelle），たまにダチョウや人間の絵が刻まれており，非常に古い時代のものであると述べている。彼によると，これらはすべて砂岩を削って描かれ，通常輪郭の中の絵はなめらかに磨いてあり，濃い茶色で着色してある。彼は人間が動物を狩猟した時代のものと信じている。当時はリビア砂漠には今日より雨量がずっと多く，カルガ・ダカラ窪地（アチ）およびオアシスとオアシスの間の広がりが砂漠化しているカルガとダカラの間にもカモシカに加え，キリン，大カモシカ，野生ヤギ，ダチョウのような大きな動物を養うだけの植物が生えていたと彼は信じている。

1923年ハサネインはウエイナットで今日では棲息していないキリンと他の猟獣の類似の岩壁画を発見している〔Hassanein, 1925：pp.204—205〕[訳注4)]。アベブリュイはこの絵についてとカマル・エディン・フセインが1925年と1926年にこの地を訪れ更に発見した他の絵について詳しい記述をしている〔Breuil, 1928〕。同じ地域でカポリアコとグラジィオシ〔Caporiacco & Graziosi, 出版年不明〕やアルマシイ〔Almasy, 1937〕が沢山の絵を発見している。アイン・ダワの水孔の周囲の11の地点では人間とウシの絵があり，はっきりしないが更にウマ，ヒツジ，カモシカが少数描かれている。ラクダ，キリン，ダチョウやゾウは刻まれていない。そのうちのいくつかはブッシュマン美術を想起させ，旧石器時代に属すると思われるが，家畜化された動物も刻まれており，王朝時代か更に後の時代に属すると思われる。

カマル・エディン・フセイン王子は，ダカラとウエイナットの間に位置するアブ・バラスで更に絵を発見している〔Hussein & Franchet, 1927〕。これらの絵はもっと後の時代に属すると示唆されている。

キリンの絵がウエイナットの北175キロの所で発見されているし，他にナイル渓谷のアブ・シンベルとコロスコ〔Sandford & Arkell, 1933：pp.63ff.〕でも知られている。ナイル渓谷のものはサンドフォードとアーケルが現在の河岸のレベルと遺跡の位置から後期旧石器と推定しており，ウエイナットのいくつかの絵と同時代である。事実当時は北緯26度と22度との間のナイル河の西の乾燥地域はキリンやその他の猟獣を養うだけの植物が生育して

いた。当時の気候は恐らく現在のコルドファンとダルフールの気候に近かったのであろう〔Winlock, 1936：p.54〕。

2 フリント石器

フリント石器については，ボールが彼の論文「リビア砂漠の諸問題」の中で広い範囲にわたり砂漠で石器に出くわしたと述べている〔Ball, 1927：p.220〕。シワ・オアシスやアブ・モンカールとシャブにある井戸の附近のみならず，バハリーヤとファラファラの間の台地やテルファウィとウエイナットの間の開かれた砂漠地やウエイナットの南西，つまりフランス・スーダンとアングロ・エジプト・スーダンの境の近くで，彼は石器を発見している。

広い範囲にわたり石器が見い出されることから，先史時代人はリビア砂漠のほとんど全域に住んでいたことがわかる。

石器は全部地表で発見されたので，詳細な層序関係を欠き，形態のみが年代決定の基礎となる。

カトン・トンプソン女史のファユーム〔Caton-Thompson & Gardner, 1934〕，カルガ・オアシス〔Caton-Thompson & Gardner, 1932：pp.269—406〕，リビア砂漠の台地での発見は，先史時代のナイルの西側の乾燥地域の居住性の問題について多くの光を投げかけた。

カルガ・オアシスとその周囲の断崖で発見された石器は，人類史を初期旧石器時代まで跡づけることが出来ることを証明している。アシュール文化からアテリア文化（B.C. 60000—20000）に至る長い間，現在は化石となってしまった自然泉が多量の水を活潑に供給し，この窪地（アチ）で先史時代人が生活していた〔Caton-Thompson & Gardner, 1932：p.383〕。アシューリア，アシュロ・ルヴァルワ，先シビリア，アテリアの各文化期に属するフリントがオアシスの低地と東側の断崖の両方で発見されている〔Caton-Thompson & Gardner, 1932：p.404〕。当時の気候条件の下では草が生育し，ウシや他の猟獣が棲息していた。先史時代の狩人は今日では完全に乾燥した砂漠の種々の場所の岩にその様子を描いた壁画を残している。気候はカルガ・オアシスの周囲でも樹木やシダ類が生育する程の好条件であった〔Caton-Thompson & Gardner, 1932：pp.389—395〕〔Ball, 1900：p.91〕。クルクルやドゥングルのオアシスが衰えた後は，トゥファの厚い堆積を形成したように，これらのオアシスの周囲の断崖は厚いトゥファで被われている。

砂漠的条件がゆっくりと新石器時代まで進行し，これと関連してアテリア文化期の直後自然泉が衰退したが〔Caton-Thompson & Gardner, 1932：pp.396—404〕，旧石器時代の生き残りの自然泉から水を得ようとした人類は最終的には掘り抜き井戸を掘ることに成功したようである。

カトン・トンプソン女史はこの見解には賛成せず[訳注5)]，カプシア人は断崖に追いやられカルガ窪地（アチ）を見下す台地へと馳られていったと信じている。彼女は新石器時代からペルシャのエジプト征服までの間（B.C. 5000—525），窪地（アチ）には事実上人類が居住していなかったと信じている〔Caton-Thompson & Gardner, 1932：p.403〕。彼女は次のように述べている。カプシア人とその後継者は，斜面や谷を放棄し，台地の縁へと移り，時々水が集積される浅い盤層の囲りに居住していた〔Caton-Thompson & Gardner, 1932：p.397〕。

先史時代の状況を要約すると，リビア砂漠の良好な旧石器時代の気候条件下で，人類は動物との生活に頼っていた。（岩壁画は狩猟した動物をよく記録している。）しかし旧石器後期に砂漠気候へと推移し，人類はもっと確かな給水を求めて移動していった。

人類は高い台地から水が無尽蔵にあるナイル渓谷へ下っていった。そして又，旧石器時代の泉が衰退する時に

窪地(アチ)にも下って行き，瀕死の泉の水を保存するために斗ったに違いない。

人類は又，退却する気候帯の運動に従って北へと移動して行き，地中海にまでたどり着いたに違いない。そして沿岸地帯の雨量に頼って定着した。

乾燥化に悩まされたこれらの人々は，リビア人の祖先であり，西部砂漠とそのオアシスの住民として，古代エジプト人のヒエログリフに記録され，王朝時代を通じて時々ナイル溪谷に流出した人々であると信じられている〔Bates, 1914：pp.210—228〕。

訳注

2) 原論文には，引用文献や参考文献の出版年や出版地が無いものが多い。これは既知のものとして省いたのかも知れないが，杜撰という外はない。調べのつくものは出来るだけ補足したが，不明のものはその都度注記した。またアラビア史家の文献(特にIV中世の章)には全く出版年が記していない。これは日本では調べがつかないのでご了承いただきたい。

3) 岩壁画については，最近では木村重信教授(大阪大学)等の研究がある。同教授は，ヨーロッパは勿論アフリカのサハラ砂漠やカラハリ砂漠，ひいてはニューギニヤ迄世界各地を調査していられる。アフリカだけでも前後4回もの調査をされ，足跡は，サハラ砂漠，ニイジェール，チャド，スーダン，エティオピア，南アフリカ等とアフリカにおける岩壁画，諸美術の主要地域をほぼカバーされている。しかし残念ながら，ミトワリ博士の本論文と関係のあるエジプトのリビア砂漠（西部砂漠）とリビア東部のリビア砂漠（西部のフェザン地方については言及されている）の調査は除外されているようである。これは，エジプトといえば王朝時代の美術で代表されるのと，近年エジプトのリビア砂漠(西部砂漠)は軍用指定地域として立入りが非常に困難なので，特にリビア，スーダン国境附近にあるウエイナットとその周辺の地域を調査することが出来ない為であろう。しかし，本論文と関係がある著作を二三挙げてみよう。

木村重信編，1964，『アフリカ美術』(世界美術大系，別巻4)，講談社

木村重信，1971，『美術の始源』，新潮社

木村重信，1979，『永遠回帰の美—アルカイック美術探検ノート』，講談社

4) A.M.Hassanein Bey のリビア砂漠の探検は2度行われた。第1回は1921年，イギリス人の同行者がいたが，途中，クフラまで行って引き返えし，いわば予備調査といったものである。第2回目の1923年の探検が主力といえよう。彼の著書 *The Lost Oases* が探検記として1925年ロンドンで出版された。探検の目的は，測量を主としたものであった。1923年地中海沿いのソリュームからスーダンのエル・オベイドまで約2,200マイルのラクダのキャラバン旅行であった。その間運よくも"Arkenu"と"Ouenat"の二つのオアシスを発見した。この Ouenat でハサネインは岩壁画を発見したわけである。リビア砂漠の奥地には1879年ドイツ人の Gerhardt Rohlfs が探検を試みただけであった。

5) 考古学者のカトン・トンプソンは，協力者の地質学者ガードナーと共に，1931，1932，1933年の3シーズンにカルガ・オアシスの先史時代の発掘調査を行なった。その成果は最終的には単行本 *Kharga Oasis in Prehistory*, London, 1952 として出版されたのであるが，経過報告として"Prehistoric Research Expedition to Kharga Oasis, Egypt" *Man* May 1931 及び June 1932 があり，ミトワリがしばしば言及している"The Prehistoric Geography of Kharga Oasis" という論文が *Geographical Journal* Vol.LXXX, 1932 に掲載された。この論文についての争点は，極度の乾燥化という自然地理的理由により，カトン・トンプソンが新石器時代から王朝時代にかけてカルガに人類が住めなくなったと推論したのに対し，ミトワリは，原住民自身が井戸掘りの技術を発明して人工的に地下水を利用することが出来，オアシスにずっと人類が住んでいたと推論する方が妥当であるという見解を出している。これについては次章「王朝時代」で詳しく述べられるので訳注も後述することにする。

II　王朝時代

カルガ・オアシスから先王朝時代や初期王朝時代の遺物が報告されていない事実を，カトン・トンプソン女史は新石器時代にはオアシスには事実上人類が住まなくなり，ペルシャ人の到来まで居住されていなかったという実証として使った〔Caton-Thompson, 1932：p.405〕。彼女はオアシスについて言及している王朝時代の記録を充分信用せず次のように述べている。「不充分なヒエログリフのほのめかしに基づいて王朝期にオアシスとナイル渓谷が緊密に結ばれていたと考えるのには，自然地理的理由で賛成出来ない」〔Caton-Thompson, 1932：p.373〕。

しかし王朝時代のオアシスとナイル渓谷との関係は，ナイル渓谷の古代エジプト人が墓や神殿の壁に刻んだヒエログリフによって証明されるだけでなく，オアシスそのもので考古学的遺物が発見されている事実によって証明されることを忘れてはならない。ボールとビードネルは〔Ball & Beadnell, 1903：pp.73—75〕，バハリーヤ・オアシスの遺物についての説明でトトメスII世の時代の石碑が1876年アシャーソンによって発見されたことに言及している。これはこんな古い時代に(ブレステッドによると，B.C. 1501—1447)，バハリーヤではエジプトの神々の信仰が確立される程エジプトの影響が強かったことを示している。

彼等は又1900年のシュタインドルフの発見に言及している。彼はカスルとバウィティの東の大きな墓地を調べ，第19王朝（B.C. 1300）の初期の新王朝のものを発見している。墓は岩に切り込まれた数個の部屋からなりその中の二つは浮彫で装飾されている。これは北のオアシスとオアシス・ヒューエの王「アメンホテップ」とかのものである〔Ball & Beadnell, 1903：p.74〕。一つの壁には，側に妃が座っており，アメンホテップが，臣下からあらゆる種類の飲物と食物を受けとっている絵が描かれている。反対の壁には王がブドウ酒の製造を監督している様子が描かれている。

シュタインドルフは，第26王朝の他の神殿の遺跡も発見している。このうちの第一のものは，カスル村（バハリーヤの村の一つ）の中央の家屋の下に位置している。屋根の刻名から建造物はアプリエス王の治世（B.C. 588—570）に建てられ，アモン・ラーに捧げられており，ここではオアシスの王者として刻まれている。第二の神殿も第一と同じように「オアシスの王であると同時に支配者」—Ded-Khens-ef-Onkel—アマシスの治世（B.C. 569—526）—によって建てられた〔Ball & Beadnell, 1903：p.74〕。

ダカラ・オアシスのムートでは，1894年リオンズが第18王朝（B.C. 2000—1788）の石碑を発見しており[2)]，ダカラがエジプトの支配下にあったことを示している。

諸オアシスとナイル渓谷との古い関係はオアシスそのものから出る考古学的遺物から証明でき，王朝時代の古代エジプト人が墓や神殿の壁や石碑にオアシスについて言及したヒエログリフを根拠のないものとして跳ね返す理由はないと思われる。事実考古学的証明はこれらの関係についての確信を強めるのである。

ペルシャ人が侵入する前の王朝時代の遺物がカルガで欠如するのは一見奇妙であるが，そうだからといってこの時代にカルガに人類が居住していなかったという決定的証明にはならない。すべてのオアシス，特にカルガでは，風に運ばれた砂がすべてを被い隠すのと住民が古代の建物を保存する気がないのとあいまって，カルガの南部のバリースのような今日の村の下や，カルガの北部にあるキリスト教の墓地のような放棄された村々の下に王朝期の遺跡が存在する可能性がある。(バハリーヤの王朝期の遺物は現在のカスル村の下に見い出されたし，ダカラで発見された石碑はムートの古い村の廃墟から拾い上げられたのである。)

カルガ・オアシスで組織的な発掘をすると，王朝時代の考古学的証拠が出てくる可能性は充分にある。

カトン・トンプソン女史が王朝時代にオアシスに人類が住んでいたという一般的見解に反対した自然地理的理由は，カルガ・オアシスの給水の研究に基づいている。彼女は旧石器時代人の水の供給源は自然泉であり，これは新石器時代までに化石化するか，消えてしまうかしてしまったことを見い出した〔Caton-Thompson, 1932：p. 387〕。オアシスで水を得るためには何メートルもの岩を深く掘り抜く方法があるのみであり，もしこの方法が見い出せなければオアシスには住めなくなるのである。「エジプトを征服した最初の文明人であるペルシャ人は水利土木にすぐれ，水を保存する精巧な技術をもっており，彼等が最初に深い孔を掘ってオアシスの地下水を利用した可能性はあり得ることである。」と彼女はいう〔Caton-Thompson, 1932：p.405〕。彼女によると彼等の異国情緒的文明はカルガに確立され，古典時代の急激な勃興の序曲であった。水の無尽蔵なナイルの子であるエジプト人が，あのような痩せた遠い場所で非常に深く井戸を掘ることなど考えつくはずがないと彼女は思い，オアシスでの掘抜き井戸がエジプト起源だということに賛成していない〔Caton-Thompson, 1932：p.405〕。古代エジプト人が深いさく井を遂行したことは歴史的に知られており，エジプト人技師の指導のもとに，オアシスの住民がペルシャ人の到来以前に地下水を利用していた可能性は充分にある。リオンズによってダカラで発見された石碑の一つは，井戸に関係した訴訟の記録〔Breasted, 1906d：725 seqq.〕であることは最も興味がある。つまり第22王朝のシェシュオンクⅠ世（B.C. 945—924）によって任命された新知事「ダカラとカルガの主君であり灌漑の統轄者」であるウエイチェストにネスバストとかいう人物が訴えているのである。この石碑はペルシャの征服より400年前に井戸がダカラに存在したことを示すのみならず，オアシスの灌漑に政府が関与していたことを示している。オアシスに掘抜き井戸をほって利用する可能性はカトン・トンプソン女史が考える程縁遠いものではない。事実ペルシャ人の技術を必要とするものではなく，旧石器時代人の泉が新石器時代になり衰えると人々はごく自然に衰えた泉を掘り抜き，ますます深いところから地下水を獲得していったのである。感知出来ない程ゆっくりと後退する水を求めてより深く井戸は掘られて行き，ある場所で帯水層を被う不透水層の頁岩を掘り抜いて水が流れ出ているところを貫通し，今日オアシスが頼っている掘抜き井戸の水に遭遇したのであろう。

カトン・トンプソン女史は疑いなく，カルガに於てグレコ・ローマの遺跡が豊富なのに反して王朝時代のものを欠いているのに印象づけられて，「ヒッビス」はペルシャの神殿であり，ペルシャの侵入後まもなくカルガで建てられた異国情緒的文明を代表すると敢えて結論したのである〔Caton-Thompson, 1932：p.405〕。アメリカのエジプト学者ウインロックは神殿（ヒッビス）の発掘を行い，建造物はなんら異国情緒的形跡を示していないと信じている[3]。彼はヒッビス神殿は「ペルシャの王達の名を連ねているが，純粋にエジプトの民族的記念物であり，土着のエジプト人によって彼等独特の様式で建てられ，少なくともアプリエス（B.C. 588—569）の時代まで遡ることができる。」と述べている〔Winlock, 1936：p.54〕。彼はペルシャ人は事実上オアシスには全く居住しなかった可能性さえあると述べている。

ヒッビス神殿はダリオスⅠ世によりアモン・ラーのためにB.C. 521—486年の間に建設（或は再建）された〔Beadnell, 1909：p.92〕。これはエジプトを征服したペルシャの王ガンビセスが神殿を破壊し，民族の神々を侮辱して国民感情を大いに害したのに対する懐柔策であったに違いない。

ダリオスⅠ世はペルシャ人の征服後わずか4年で神殿の建設を始めたことに注意すべきである。征服後にカルガに人が住み始めたと仮定すれば，4年間にこのような大きな神殿を建設出来る程大勢の人が住んだということを正当化出来るだろうか？　ダリオスが住民を懐柔しようと考えたとすれば，カルガには神殿を使用するだけの

かなりの人口があり，この人々を懐柔するために神殿を建てたと考えるのは妥当と思われる。

カルガにエジプトのペルシャ征服以前に人々が住み繁栄していた重要な歴史的出来事を要約すれば次の通りである。

ガンビセスがプレジュウムでプサマティクIII世を破りエジプトを属国とし，さらにエチオピア遠征のため軍隊はナイル河に沿い南下した。テーベに到着した時，主要部隊から5万の軍隊を分遣し，シワのアモン神殿〔Macavlay, 出版年不明：p.222〕に進撃し，ジュピター・アモンの神託のある神殿を焼こうとした〔Belgrave, 1923：p.80〕。軍隊はオアシス（カルガ）を通過したと伝えられている〔Beadnell, 1909：p.88〕。砂漠を横断してシワに行く遠征には失敗したが，軍隊は糧食や水をカルガで補給したに違いない。このような巨大な軍隊の兵站部として糧食を補給出来る程，先ペルシャ時代にオアシスは農業社会として繁栄していたことを示していると云えよう。

カトン・トンプソン女史のように単に考古学的資料に基づいてのみ，ペルシャの征服に先行する王朝時代にカルガには人が住んでいなかったと推論するのは危険である。目下検討中の地域については組織的発掘が行なわれていないために生じる空白を，歴史的手がかりで補充する方法が模索されるべきである。[訳注6)]

ペルシャ時代からアラブ時代に至る遺物が豊富なのに比べ王朝時代のものが欠如しているのは，砂漠の交通の発展を反映している。ラクダの導入とその利用が普及したのはペルシャ時代と考えられているが〔Winlock, 1936：p.60〕，これは砂漠の交通革命であることを疑う余地がない。孤立的要素が減少すると，以前は極めて少数の交易商人や政府の官吏しか行かなかったオアシスにもナイル溪谷の人々が近づき易くなり，誰もが行けるようになった。新しい交通手段が発達するようになると，ナイル溪谷の人々がオアシスに流入し，エジプトの神々が信仰されている神殿の建造も必要となるであろう。この議論を受け入れるならば，オアシスの住民の間でアモン崇拝が普及していて，もっと初期の段階のエジプトの信仰が一般的でない理由が説明できる。オアシスの記念物がB.C. 6世紀からA.D. 641年のアラブ征服まで完全な歴史を与えていることも説明がつく。換言すればラクダ交通の開始とともに，ナイル溪谷との文化的結合が連続するようになった。

エジプト人の記録を是認した理由について簡単に指摘したので，これからどのような知識が導き出せるか見てみよう。

私達が今日知っている主要なオアシス群のすべては王朝時代のエジプト人に知られていた。[4)]

シワは"Sekhet Amit" すなわちナツメ椰子の園として知られていた〔Budge, 1901：pp.175—180〕〔Bates, 1914：p.48, Footnote 5〕。

バハリーヤは"Ouhat Mehet"すなわち北のオアシスとして知られていた。

ファラファラは"Ta-ahet"すなわち家畜の土地として知られていた。

ダカラは"Desdes"（Aset Ahet の都）すなわち月の神の玉座として知られていた。

カルガは"Kenmet"或いは"Uahat Rist"すなわち南のオアシスとして知られていた。

ワディ・ナトゥルーンは"Sckhet Heman"すなわち塩の園として知られていた。

明らかにエジプトの王たちは，非常に古い時代からオアシスの住民を支配しようとした。彼等が接触した日付は分からないが，オアシスがエジプト政府の支配下にあったことは第12王朝のセオストリスI世の時代まで確かに遡ることが出来る。イクディディがテーベから遠征隊長としてオアシスの地に派遣されている〔Breasted, 1906a：par. 524〕。

アビドスで発見された彼の石碑に，「王の信任を得てテーベから来た者である。王の喜ぶことをすべて実行するのである。オアシスの人々の住む地へ行く若い新兵を指揮する隊長であり，主君の計画を実行する官吏達の中から高位に昇った優能な官吏である。」と述べている。

オアシスは行政上，北と南のグループに分けられており，それぞれがいくつかのオアシスを包含していた。エジプト人知事がナイル渓谷から派遣され，貢物を集め灌漑を監督し係争を調停した。ブレステッドの記録によると，イン・ヨテフは彼の石碑に自分自身について「トトメスIII世の式部官であり，オアシスの国の支配者」〔Breasted, 1906b：par. 763〕と記述している。ハットシェプスト女王の建築家であり，後，トトメスIII世（B.C. 1501—1447）の下で働いたプュメーレが，南方と北方との両方のオアシスから貢物を受け取っており，書記がその数量を記録している様子が描かれているという記録もある〔Breasted, 1906b：pars. 385—386〕。

オアシスはナイル河から孤立しているのでエジプトの王に対する忠誠は時々単に名目的なものと化した。分っている記録によるとオアシスでの反乱があい続いたという事実から人々はエジプトの支配者に対し決して忠誠心が厚かったとはいえないのである。これ等の反乱は概して鎮圧された。強力なエジプト王の治世には，東方はアジアまで領土を延ばし南はヌビアやエチオピアまでを領有し，西方はオアシスの地（リビア）を領土とし，オアシスは従属させられたのであった。このような強力の王の死や一つの王朝から他の王朝に移行する時に反乱が起きた。ラムセスII世（B.C. 1225—1215）の後継者のメレネプタハは，オアシスのリビア軍と海岸民との侵入に直面したのであった〔Breasted, 1906c：par. 580〕。そして第22王朝創始の時のオアシスの反乱がダカラの石碑の記録に報ぜられている〔Gardiner, 出版年不明：pp.21—22〕。

オアシスは犯罪者や政治犯の追放地であったという空間的関係も明白である〔Breasted, 1906d : pars. 650 seqq.〕。

経済的な観点からはオアシスは農業的に富んでいたようである。彼等の価値の高い生産物がナイル渓谷へ大量に送られていたようである。自給レベルよりはるかに高い農業生産物が生産されていたに違いないことを示している。オアシスの民がエジプトの王に貢物を全部物納していたことは注目に価する。記録からカルガ，ダカラ，バハリーヤはブドウ酒で有名であり，シワはナツメ椰子で有名なことが知られている。

この国事はオアシスの交易にも反映している。Sekhet Heman（ワディ・ナトゥルーン）の塩，Sekhet Amit（シワ）のナツメ椰子，Kenmet（カルガ）のブドウ酒は王朝時代のエジプト人に知られていた。更にオリーブ，薬草，染料は他の商品と共にナイル渓谷へと送られた。

これらの生産物がリビア砂漠をどのようにして運ばれて行ったかはっきりと分っていない。ラクダの導入以前にはロバが砂漠の横断に使われた可能性が充分にある。ロバはエジプトでは，B.C. 4000年に遡れるし，リビアではB.C. 13—12世紀に知られており〔Seligman, 1934：p.69〕，今日に至るまでオアシスの原住民にとって唯一の駄獣として知られている—(彼等はラクダを使用しない)。アーケルはフェザンの原住民からシワの住民が規則的にロバのキャラバンを編成し，ズワィラやムルズクまで旅行するという情報を得ている〔Seligman, 1934：p. 74〕。[訳注7)]

オアシスとナイル渓谷との間のキャラバン路は王朝時代に確立されたに相違ない。[5)] そしてオアシスはリビア王朝（第22王朝）の時代に完全にエジプト化され，ロバとウマの大きなキャラバンが砂漠をしばしば横断したのであった。[6)]

注

2) 現在 The Ashmolean Museum (Oxford) にある。Spiegelberg の論文 *Recueil de Treveau* XXI, 1899, p.12 & XXV, 1903, p.194 を参照のこと。Breasted, 1906d, pars. 725—728を参照のこと。Gardiner の p.19を参照（原文

には書名がない)。

3) ウインロックは神殿を発掘してアブリエス治世下の石製の容器の破片を見つけている。

4) 古代エジプト人に知られていた7つのオアシスのプトレマイオスの一覧表がエドゥフ神殿にみられる——Gardiner, p.24 参照(書名不明)。

5) シェシュオンクIII世の時,リビア人のウェシェヘトが隊商長として仕えていた。Bates, 1914, *The Eastern Libyans*, p.229 参照。

6) セリグマンの地図 No. 1 は,ラクダの導入以前の主な隊商路を復原している。Seligman, 1934, *Egypt and Negro Africa* の72ページに面する地図参照。

訳注

6) カトン・トンプソンの推論に対する批判は次の二点から検討されなければならない。

(1) 自然環境と水利技術史。

(2) 歴史記録。

ミトワリは(1)については,新石器時代に至り乾燥化が進行するにつれ,人類は次第に人工井(掘抜き井戸)を掘ることに成功し,自然条件を克服してカルガ窪地に居住し続けた可能性は充分あり得ると考えているが,決定的「決め手」はない。この推論が支持できるのは,王朝時代の記録やオアシスの考古学的資料に基づいている。

(2)の歴史記録の観点からの批判は資料も豊富で説得力がある。事実,カトン・トンプソンは1952年の *Kharga Oasis in Prehistory* の中で(ミトワリのこの論文は以前に発表されていた。),多くの専門家からの批判で1932年の見解を訂正せざるを得なくなった。

しかし,(1)の自然環境と水利技術史の観点からの批判は充分されていない。これについては,更に次の点からの研究が必要である。(a)先史時代に遡ったさく井技術史の研究。(b)エクメーネとしての自然環境の研究。

考古学者のカトン・トンプソンと地質学者,古生物学者の協力者ガードナーはカルガ窪地の旧石器時代人は給水を自然泉(Pleistocene springs)と断定し,現在の自然科学の成果で湖成層と認められている堆積物(層)を風成層と考え,次のように分類した。(i)初期洪積世と部分的にはそれ以前のレス状堆積物。(ii)旧石器時代の洪積世泉から生じた堆積物。(iii)古代の掘抜き井戸から生じた堆積物。

長い間論争となっていた堆積物(層)(地形的にはハンモックとして認められる。)は,湖成層ということで決着がついたが,自然科学の結論は考古学的に新たな問題を提起した。つまり,先史時代人は泉や掘抜き井戸の他に「湖」の水に頼って生活しその近辺を生活圏とした可能性が充分ある。しかし,消えた湖は淡水湖であったのか,鹹水湖であったのかもわかっていない。既に発見された mound spring や,ダカラ・オアシスで発見された碑文の井戸の係争の記録を考え合わせると,湖と井戸(或は泉)が共存した可能性もあり,湖といっても旧石器時代,新石器時代,歴史時代にわたる水位の変動も考慮する必要がある。「湖」の復原と人類史との関係については,考古学者と地質学者等のチーム・ワークによる組織的発掘調査が待たれる所以である。

水利技術史の面からは,掘抜き井戸はエジプトでの独立発生としても,カナートの技術はペルシャから伝播した可能性も否定出来ないので,この方面も今後の研究課題といえるであろう。

なお,日本で入手し易い「掘抜き井戸」の論文は,Drower, M.S., 平田寛訳,1962,「第19章,給水,潅漑,農耕」,チャールズ・シンガー編『技術の歴史2』,筑摩書房で,pp.437—438にはカルガとダカラ両オアシスの記述がみえる。

最近の水利文明の研究としては,Butzer の *Early hydraulic civilization in Egypt—a study in cultural ecology*, The University of Chicago Press がある。

7) 私のフィールド・ワークは1966年と1967年であったが,ダカラ・オアシスではラクダの放牧を目撃したし,さらにファラファラ・オアシスでもカスル・ファラファラの高台からたった2～3頭のラクダではあるが,キャラバンをやはり目撃している。近年国境が閉じられて困難となってきたが,ウエイナット方面との交易と思われる。

III 古典時代

この時代はオアシスの歴史が事実上連続している12世紀間をカバーする。B.C. 525年のペルシャのエジプト侵入からA.D. 640年のアラブ征服の期間であり，一般的に南ヨーロッパの古典時代とされる期間よりずっと長い。記念物はオアシスの評判が絶頂に達したことを充分に証明するが，歴史的記録は全時期を通じてオアシスがエジプトに従属していたことを強調している。

カトン・トンプソン女史が示唆したように〔Caton-Thompson, 1932：p.405〕，ペルシャ人が掘抜き井戸を掘ってオアシスの水を人工的に利用した最初の人々であるかどうかはさておき，ペルシャとグレコ・ローマ時代に多くの井戸と導水渠[訳注8)]がカルガ〔Beadnell, 1909：p.168〕，ダカラ，ファラファラ，バハリーヤ，シワで掘られ広大な土地が耕作された。これらの古い井戸の多くは依然として大量の水を供給している。

シワに向ったペルシャの軍隊というヘロドトスの説明から〔Macaulay, 出版年不明：p.222〕，砂漠で命運つきる以前，軍隊は安全にマグナ・オアシスを通過しているのであるが，ガンビセスの偉大な目的はシワのアモンの信仰者達を征服し，彼等が崇拝するジュピター・アモンの神殿を破壊することであったとヘロドトスは述べている〔Hoskins, 1837：p.261〕。当時マグナ・オアシスはシワ程重要ではなかったのである。マグナ・オアシス（カルガとダカラの総称）は恐らくペルシャの王の憤りを挑発する程重要ではなく，破壊するに値する程の神殿はほとんどなかったのであろう。又，マグナ・オアシスにこのような神殿が存在したとしても，祝福された神託で知られるジュピター・アモンを祭っている神殿に並ぶ程重要ではなかったのであろう。この神殿には2世紀後アレキサンダー大王ですら魅せられたのであり，ガンビセスの遠征の目的は価値のないものとはいえないのである[7)]。

シワは3世紀間も神託で有名であり，世界中からこの神託を受けようとして人々が遣わされた。アテネ人は海を横断してリビアまで問題を運ぶために特別仕立てのガリー船を持っていた〔Belgrave, 1923：p.79〕。時としてアモニアと呼ばれたメルサ・マトルーフはシワの外港であり，ここに各国の大使や訪問者が上陸しオアシスへの砂漠の途についた。このような訪問者によりオアシスへ財宝や贈物がもたらされ，当時シワが繁栄していたことは非常に容易に想像がつく。

B.C. 3世紀の終りに近づくと神託の評判は衰えたが〔Belgrave, 1923：p.87〕，デルフォイの神託が停止したずっと後までもアモン神の答えは困難な問題の解決になるとみなされていた。

B.C. 2世紀にシワの神託は事実上消え，ローマ帝国の支配の下で絶頂に達したマグナ・オアシスに比べて重要性を失うようになった〔Beadnell, 1909：p.94〕。B.C. 30年から7世紀の始めまでの間マグナ・オアシスには巨大都市が存在し，オアシスは要塞によって警備され保護された。神殿や大きな建築物が建てられ，巨大な給水工事が開始された[8)]。

カルガ・オアシスの神殿の壁には6人のローマ皇帝の名が刻まれている〔Hoskins, 1837：p.284〕。ハドリアヌスとアントニウスの名がヒエログリフでナドゥーラ神殿の壁に見られる。ヒッビス神殿の入口にはギリシャ文字でガルバの名が書かれている。ドミシアンの名はドゥーシュ神殿にヒエログリフで書かれている。アイン・アムール神殿にはティタスと共にネロの名が書かれている。

このように1世紀間に7つの神殿がローマ人によって建てられており，他にも今では砂の下に埋もれてしまった神殿が存在した可能性は充分にある。これらの神殿は古いヒッビス市[9)]を飾るために〔Hoskins, 1837：p.286〕建てられたのではなく，オアシスの他の場所に建てられ，住民の要求と趣味を満したことは明白である。

ローマ帝国の下でオアシスが実際に繁栄したことは，テオドシウスII世（A.D. 408—450）の治世にオアシスに住んでいたオリンピオドロスによって示されている[10]。特にテーベの出身であるので彼のマグナ・オアシスの説明は高く評価されている。

彼は先づオアシスの気候が健康的であり，到る処に砂があることに注意をうながす。次いで井戸に触れ，200，300，ある時は500キュビット[11]も深く掘られ，淡水が流れ出ることを述べている。

耕作については樹木は常に果実で重く，ここのトウモロコシは他の処の産よりもすぐれ雪よりも白いと述べている。オオムギは時として年2回播かれ，キビは年3回播かれるといっている。

マグナ・オアシスの灌漑に関してオリンピオドラスは注意を喚起し，空には雲が全くないので土地が肥えているのは百姓が夏には3日に1度，冬には6日に1度耕地に水をやるからだといっている。(ビードネルはホスキンズの本よりこれを引用している。)

この時代もオアシスは比較的孤立しているので，ファラオの初期の時代と同じように流刑の地として使われていた[12]。

ウルピアンによると，ローマ皇帝は皇帝の不快を買った者や法に違反した者をオアシスに追放した[13]。詩人のユーヴィナルはしばらくマグナ・オアシスに追放されたし〔Hoskins, 1837：p.292〕，ティマシウスという将軍も又，396年アルカディウスとホノリウス帝によりこの地に流刑の身となった〔Beadnell, 1909：p.106〕。コンスティアヌスの賄賂に反対した西方教会の多くの司教たちは，マグナ・オアシスやジュピター・アモンのオアシスに流罪となった。これらの場所をアタナシウスは「人跡まれで身の毛もよだつ恐怖」と述べている〔Hoskins, 1837：p.292〕。一例としてコンスタンチノープルの司教のネストリウスの名を挙げれば，彼は，434年マグナ・オアシスへ破門されて追放された〔Beadnell, 1909：p.106，(Hoskinsから引用している)〕。彼は正統派の教義からはずれているとみなされたのである[14]。

空間的関係は人々がオアシスに避難することにも現われている。三位一体説の提唱者アタナシウスはアレキサンドリアから幾度も追い出されて，やむなく砂漠に身を隠したのは，マグナ・オアシスの僧院は彼にとって安全な隠れ場であったからだろうし，アリウス派の皇帝コンスタンチヌスの憤りから彼を保護してくれたであろうし，背教者ジュリアンの異教的うらみから守ってくれたからであろう〔Hoskins, 1837：p.292〕。

アタナシウスやネストリウスのような傑出したキリスト者がオアシスに避難したり追放されたりしたことは，オアシスの住民の間に大きな宗教的影響を与えたのであった。この時にキリスト教はマグナ・オアシスやバハリーヤ，シワ，ワディ・ナトゥルーンに浸透した。カルガの北の大墓地にあるキリスト教の美しい墓所やダカラやバハリーヤの種々の村に散在する教会や修道院の廃墟は，キリスト教がオアシスで長い間繁栄し，熱心にはぐくまれていたことを証明する。

近づきがたいオアシスにキリスト教が導入されると，入信者の風俗習慣に大いに影響したのであるが，ナイル溪谷のように完全に古い信仰に置きかえられたのではなく，風俗習慣についてより保守的なオアシスの住民は多くの伝統的要素を残した。

かくして死体をミイラにする習慣はずっと後まで残り，古代エジプト人の「タウ」〔Beadnell, 1909：p.104〕〔Ball,1900：p.97〕，つまり永遠の生活の印はカルガのキリスト教の大墓地の壁に示されている。

ナイル溪谷の人々のように旧い文化要素を完全に新しい要素で置きかえてしまう代りに，新旧を融合させる傾向があるのは後のイスラムの浸透の場合も同じである。キリスト教はイスラム教で置きかえられたが，今日に至

るまでオアシスの住民は多くのキリスト教の慣行を残している。

経済的観点からは，オアシスはペルシャ期，グレコ・ローマ期に非常に繁栄したとサイスが述べている〔Sayce, April 6, 1905〕。土地は完全に耕作され，ブドウ酒や他のオアシスの商品の交易が活潑に行われた。

この時代の始めに砂漠の交通にラクダの利用が初めてエジプトに導入された。この導入がオアシスの条件を完全に変えたことは容易に想像できる。古代エジプト人にとって唯一の利用出来る交通手段であったロバはラクダによって置き替えられた。ラクダはより丈夫でより忍耐強く砂漠の交通により適合している。

ナイル渓谷とオアシスをつなぐキャラバン路は当時沢山あった。それらは多かれ少なかれ今日の路とほぼ同じである。これらの路に加えて，西はカルタゴとファザニアを結ぶ路，および南と南西とはアフリカ奥地とを結ぶ路があった。これらのほとんどはローマ時代以後も使用された。

多くの旅行者がリビア砂漠のいたる処でこわれた壺の捨て場が目立つと報告している。これはローマ帝国のキャラバン路をはっきりさせるであろう。カトン・トンプソン女史によって調べられ，ローマ時代後期の広口びんと証明されたファユームの北の捨て場は，下エジプト—ワディ・レイヤン—バハリーヤ・キャラバン路を示しているといえよう〔Caton-Thompson, 1932：p.372 脚注 1〕。他の壺の捨て場は，カマル・エディン王子によってダカラの西南西250キロにあるアブ・バラスで発見され[15]，ダカラ—ウエイナット—ダルフール・キャラバン路沿いの宿泊地をしるすと考えられている。

ウインロックは，カルガ—ダカラ間のグバリ路沿いの今日では「マハッタ」と呼ばれるこれらの駅の一つについて述べている〔Winlock, 1936：pp.51—52〕。

彼はかなり広範囲の土地がローマ時代のびんと同定される陶器の破片でおおわれていると述べている。彼は古代には水は壺で運ばれたのであり，今日のように皮袋は使用されていなかったという。ローマ時代にはこれらの休憩地であい続くキャラバンが空になったびんやこわれたびんを捨て，キャラバンはその土を踏みつけてこなごなになってしまい，砂漠の広い地面が赤っぽくなってしまったのである。

他のびんはカルガとナイル渓谷とを結ぶ鉄道沿いに見い出され〔Caton-Thompson, 1932：p.372, 464ページに面する地図 1 も参照〕，これはカルガとベニ・アディを結ぶ古いキャラバン路を示すと信じられている。他のものがエジプトの南部砂漠の前知事ワスフィ・ベイによって見い出され，これはバリース（カルガの村）とエスナを結ぶキャラバン路を示すと考えられている。

注

7) アレキサンダーのシワ訪問の説明については，Hoskins の *Visit to the Great Oasis*, 1837, pp.262—274 を参照。

8) このような大規模な土木工事は他のオアシスでも行われ，同じく繁栄した。

9) カルガ・オアシスの首都。

10) Hoskins によって引用されている〔1837：pp.286—289〕。Beadnell も引用している〔1909：p.107〕。

11) 1キュビット＝20.6インチ。

12) 約500名のエジプト犯罪者 (undesirables)（政治犯と思われる…訳者）のコロニーがカルガに追放され1905年から1914年迄居住した。

13) Hoskins によって引用されている〔*Visit to the Great Oasis*, 1837：p.291〕。

14) カルガ村の北のキリスト教の大墓地には沢山のネストリウス派の墓があると信じられている。

15) *The Illustrated London News*, Aug. 17, 1935 を参照。

訳注

8) "aqueduct"を導水渠と訳した。いわゆる"カナート"ばかりでなく，ローマ時代，要塞へ引かれた水導をも含む広い概念として使った。

カルガ・オアシスといえば，北部のエスカープメントにあるオンム・エル・ダバーディブのカナートが必ずと云ってよい程，引合いに出されるが，これは Beadnell (An Egyptian Oasis, 1909) の調査報告に基づくものが殆んど全部といってよい。このカナートについては次の論文がある。

Cressey, G.B., 1958, "Qanats, Karez, and Foggaras" *Geogr. Rev.* Vol. 48.

Goblot, H., 1963, "Dans l'ancien Iran, les techniques de l'eau et la grande histoire" *Annales-Economies, Sociétés, Civilisations,* Mai-Juin.

Troll, C., 1963, "Qanat-Bewässerung in der Alten und Neuen Welt" *Mitteilungen der Österreichischen Geographischen Gesellshaft,* Band 105, Heft III.

拙著, *Settlement and Water Supply in Kharga Oasis*, 1968 でも II Historical Outlook, 2 Dynastic to Mediaeval Periods の章で引用させてもらった。

しかし，Beadnell 自身はカナートという用語は使用せず，"subterranean aqueducts"と記している。

他に小堀厳教授もカルガのカナートに触れている(1959, 西アジアにおける地下水潅漑の人文地理学的研究——カナットを中心に——，東洋文化研究所紀要第19冊)。けれども Beadnell の原典には当っていない。

IV 中世

この時代も一般的にヨーロッパの中世とされている期間より長く，19世紀初頭までを含んでいる。各時代ともオアシスはエジプトと運命を共にしてきたことは明らかである。エジプトを支配したペルシャ人，ギリシャ人，ローマ人共，オアシスの住民の支配者であった。極端に孤立しているシワだけ例外で時としてはある程度自治を享受した。アムル指揮下のモハメッド軍が640年にエジプトに侵入した時も同じ物語が繰返えされた。アムルはヘラクリウスの後継者の力が弱まった国を占領した。ローマ時代にパルヴァ・オアシス（バハリーヤ）やマグナ・オアシス（カルガとダカラ）とナイル渓谷との商業的関係が存在したという事実は，取りも直さずオアシスがナイル渓谷に接近したということである。従って生まれつき砂漠の旅行者であるアラブ人は砂漠にたやすく接近出来るので，エジプトに侵入した極く初期からオアシスを支配したと思われる。オアシスの住民はアラブの支配を受け入れ，流血なしにイスラム教に改宗したと思われる。この事実はオアシスのモスレムの金曜日のお祈りの集りによく示されている。剣によって強制的に改宗させられた国々では，イマームは会衆に説教するような時に右手に剣を握る習わしがある。バハリーヤ，ファラファラ，カルガ，ダカラでは杖を握るのである。これらの地域の人々が戦争をすることなくイスラムを受け入れた印である。シワだけが例外でアラブ人がイスラムを確立したのはやっと12世紀になってからである。

アラブの歴史家イブン・アルワルディ〔Ibn Alwardy, 出版年不明：pp.24—25〕は，サンタリア（シワ）について述べ如何にムーサ・イブン・ノセイルが城門から撃退されたかを記述している。708年シワ遠征のためムーサは軍隊と共に7日間（地中海沿岸から）砂漠を横断する旅をしてシワに到着すると，シワ人は高い壁で囲まれた要塞都市に身をかくしていた。シワ人の抵抗でひどい目にあったムーサは長い戦いの後，意図を断念しエジプトへ帰った。

710年スペインへ侵入したアラブの将軍のタリフ・イブン・ジヤドも撃退されている〔Ibn Eyas, 出版年不明：pp.22—29〕〔Gohn, 1849：p.148〕。

1048年，アラビア半島から懲罰として連れてこられたバニ・ヒラルとバニ・セリムの部族民はナイル渓谷と紅海の間の地方に住んでいたが，ナイル河を横断しトリポリへ行く許可を与えられた〔Belgrave, 1923：p.94〕〔Bovil, 1933：p.30〕。彼等は妻子共々約20万人がエジプトから西へと移動した。彼等はトリポリを侵入して大西洋岸に突入した。モハマッドの支配を最終的にシワ人に押しつけたのは，これらの植民者のうちの者たちであり〔Belgrave, 1923：p.95〕，1100年までにコーランがアモン神殿の境内やハミサ教会の中で聞えるようになった。アラブの支配時代にオアシスで得られた事情についてのアラブの地理学者や歴史家の説明は相矛盾しており，事実がしばしば虚構と入り混じっている。

ある者はオアシスは要塞で固められ耕地や井戸があり今日存在が知られている以上の植物（インディゴやブドウの樹）や鉱物（エメラルドや鉄）があると述べたりしているのに対し，[訳注9)]他の者は全く人跡未踏の地と記している。10世紀に著作を著したイブン・ハウカルはオアシスには以前は水の流れもあり，廃墟と化した都市もあったと言及している〔Ibn Hawkal, 960：p.102〕。彼はヒツジやヤギが野生化し，他の野生動物のように狩人によって捕えられている〔Beadnell, 1909：p.108〕とつけ加えている。

イブン・ハウカルが960年に記述したのを考慮するとカルガやダカラのオアシスに全く人が住まなくなったとは考えられないであろう。ビードネルはクルクルやドンゴルのような小さなオアシスになっただけだろうと示唆している。

しかしローマの守備隊が退きアラブ人がやって来ると衰退が始まり，導水渠は閉塞し始め一時は健康な保養地とみなされた所にマラリアが侵入しはじめた。[16)]この状態はオアシスからローマの守備隊が退却すると，オアシス民はしばしば孤立した所に侵入する砂漠の部族の略奪にさらされた事実によって説明出来る。オアシスの住民の生活手段を剝奪し，家や農地から追い出すので，襲撃にさらされるとオアシスはみじめな状態におかれたであろう。カルガ，ダカラ，ファラファラとシワはバハリーヤより侵入されやすかったであろうから当然より多くの損害を蒙った。オアシスの住民のいく人かはビザンチン時代の後期になると徴兵され，ナイル渓谷のアラブ侵入者に備えられた。[17)]労働力の減少は多くの耕地を放棄することとなり導水渠も無視された。この回避出来ない結果は当然オアシスの物理的条件の急激な悪化を招いた。オアシスでは生活を維持するために常に押し寄せてくる砂と斗い井戸を守らなければならないのである。

歴史的記録からオアシスは7世紀以降マグレブからメッカに至る北部の巡礼路の宿場として使われていたことがわかる。地中海沿いの海岸路の他に，(冬期には)海岸の強い風から守ってくれるエジプトのオアシスの砂漠路があった。この路はマグレブからトリポリを通ってアウジラ，ガクブブ（ジャラブブ）を通りシワに達する。ここから路は東方へエジプト・デルタ，スエズと行くか，南東にバハリーヤを経由してナイル河に出るか，直接ファラファラ，ダカラ，カルガへ行ってそれからナイル河沿のケナ，紅海に面したコセイル[18)]に達する。

ダカラ・オアシスの村の一つであるラシュダには巡礼団にまで遡れるオムダ（村長）の家族がある。彼等の祖先はメッカ巡礼の途にあったが，ダカラで指導者が死にカラムーンの近くに植民して住みついたのである。

他の歴史的記録によるとオアシスは砂漠の交易路に沿う商業の中心であった。ダルブ・アル・アルバイン沿いのカルガは，当時スーダンの商品を交換する一大中心地であった。アラブの著述家はスーダンからの商人がカルガのベリースやブラクに宿泊し，アシュートから商品を検閲に来るエジプト官吏を待つ様子を記述している。彼等は又，この道沿いに奴隷が大勢連れてこられ，ベリースの住民は商人達やその奴隷が村に泊っている間に大いに利益を得たことも述べている。

シワもまた奴隷貿易で繁盛したのであった〔Ali Pasha, 出版年不明： pp.111—114〕。この時期にはチャド地域とダカラ経由のエジプト直通路は閉されており，この地域からエジプトへくるすべての交易はマルズーク路をとり先ずシワに到着した（シワの耕作が全部奴隷によって行われた時期があった)。

この時代もオアシスは先きの時代と同じくエジプトの支配下にあったと歴史記録は伝えている。初代のカリフの時代，知事がオアシスに任命され，貢物を集めたり宗教上民事上の事柄を処理した[19]。ウマイヤッド・カリフの時代には別の知事がオアシス地域にいたことを聞き知っている。アハマッド・イブン・トゥールン〔Ibn Hawkal, 960：p.102〕，モハマッド・イブン・トグ・アル・イクシィド〔Al Masoudy, 出版年不明：pp.50—55〕，アユーブ朝〔Al Makrizi, 出版年不明：pp.234—236〕，ファーティマ朝もすべてオアシスを支配した。

トルコ支配の初期には益々ひんぱんになる侵入から守るためオアシスに常備軍を配置した。しかしマメルークのエミールが権力を握り，お互に反目した後期には権力を簒奪され，砂漠へと遁走したエミールのためのオアシスは避難地となった。

カラムーンとカスルはダカラの二つの村であるが，そこにはトルコ系の大家族シュルバギ，トフキアン，カイマカムが今日まで住んでいる。これらはトルコの守備軍かエミールの子孫で，オアシスに避難したのであろう。エミールの子孫である可能性の方が大きい。

中世の終りに近づくとオアシスの歴史には間隙ができる。エジプトの歴史が不明になったのと呼応している。充分な研究が行われるまで，この時期のオアシスの歴史は完全に暗闇である。

注

16), 17) *History of Abu Salih Al Armani*：pp.118—119。（この個所は原文の引用文献であるが，著者ないしは編者の名を印しておらず，出版年もないので，注にした……訳者。）

18) Oric Bates の *The Eastern Libyans*, 1914 の附図参照。

19) カルガ村のオムダ（村長）の家系は，Obada Ibn Es Samit 家の出身であった初代のアラブ人知事の子孫である。——Shaffic Pasha の覚書き p.10参照。

訳注

9) この個所の原文は，While some of them describe the oases as a country full of forts, fields and wells and mention the existence of more plants (indigo and vine) and mines (emerald and iron) than those which are known to exist at present, others.....であるが，植物のうち vine はおかしい。少なくとも古典時代まではオアシスはブドウ酒で有名であったのであるから矛盾することとなる。ミス・プリントかと思う。鉱物のうち iron は，バハリーヤ・オアシスに鉄鉱床が存在することがミトワリの論文出版の後になって知られている。

V 近代

19世紀初頭モハメッド・アリ・パシャはエジプトの王位についた。彼はあらゆる分野に改革の時代を創始した。

彼は南方はスーダンに領土的拡張を考えた時，西の境界のリビア砂漠を先ず安全にしようとした。カルガ，ダカラ，ファラファラとバハリーヤは完全に支配下に置いたが，最も遠いシワは彼等のシェイフ（族長）の下で自治を享受していた。1820年シワに1300人の兵力を送った。指揮官はハセイン・ベイ・シャマシェグリであり，シワの征服に成功した[20]。この時からシワはエジプト政府の支配下にある。

モハメッド・アリの時代以来エジプト改革の波はオアシスまで押し寄せた。以下は顕著な実例である。

1．エジプトのあらゆる可能性のある資源を利用しようとしたモハメッド・アリは，フランス人技師のアイミ・

ベイにダカラの鉱物採掘の利権を与えた〔Buckley, 出版年不明：p. 7〕。しかし経済的に見合う鉱物資源がないので野心を満たすことが出来ず，フランス人技師はオアシスの土Ｌの利用を始めた。４つの開さく機でアイミ・ベイは沢山の井戸を掘った。これはローマ時代以来の開さくである。同じ時代，モハメッド・アリの依頼でラ・フェーヴルがカルガで同じ仕事をしたことをきいている〔Buckley, 出版年不明：p.11〕。最初アイミ・ベイの下で，次いでラ・フェーヴルの下で助手をしていたハッサン・エフェンディはダカラで無差別的に開さくをやったため，いくつかの村では地下水位が低くなり大きな損害を与えた。

２．20世紀の初頭「西部エジプト開発会社」の名の下に英国の会社が，カルガの鉱物資源を開発し土地を利用しようとした[21]。約15年間先駆的仕事が遂行され，可能性のあるあらゆる資源が調べられた[22]。しかし利益を得る段階になって資金はほとんど使いはたされていて会社は解体した。カルガ・オアシスは疑いなく会社の出現で利益を受けた。隔離に終止符を打ったカルガとナイル渓谷をつなぐ鉄道は会社の仕事である。[訳注 10]

３．同時にエジプトの総督アッバスII世はエジプトの西部砂漠とシワ・オアシスを開発する計画を立てていた〔Falls, 1913：pp.268—269〕。彼はマリュートとアムリアに所有地を持ち地中海沿いに鉄道を建設し，彼が耕作する予定の土地を調べるためにシワを訪れた。総督のこの計画は他の計画と共に無視されたが，彼が建設した鉄道はリビア砂漠の北部地域に大きな利益をもたらした。

４．世界各地を大破Ｌした第一次大戦はエジプトのオアシスには恩恵を与えた。トリポリとフェザンのオアシスの住民であるセヌシイ族は，ドイツ人とトルコ人に扇動されてリビアのイタリア人とエジプトのイギリス人に敵対し，エジプトの西部国境を攻撃しサリュームとマトルーフの西部エジプトの海岸地帯とカルガを除くエジプトの全オアシスを占領した。しかしイギリス軍は装甲車で装備され，空軍に支援されてセヌシイ族をエジプトのオアシスから追い出し，国境外に退却させることに成功した[23]。

この戦争から得たオアシス地域の恩恵は結果的に得たものであるから間接的である。始めて自動車が砂漠の交通に使用されるのに成功したのはこの戦争である。それ以来実験が行なわれ，この種の交通に適したように車が改良された。短期間のうちに砂漠で自動車を利用することが実用化された。ラクダのキャラバンは今やより快適でより速い自動車に道をゆずった。旅行者が一週間か二週間かかった長い距離は今日数時間で行きつくことができる。この新しい交通手段で過去のようにオアシスは孤立したものではなく，外界と結ばれているのである。ナイル渓谷の住民は今やオアシスを渓谷の一部と見做し，彼等の祖先のように遠い地域と見做していない。

第二のもっと重要な恩恵は，大戦以来オアシスが軍事的に重要であることが認識されたことである。今や当局はオアシスを無防備で放って置くとエジプトが脅かされる危険を認識した。警備軍の要求が生まれた。サリュームとマトルーフは既に地中海沿いの二つの軍事基地となっている。現在シワには小さな部隊があり，いづれ大きな部隊の中核となるであろう。

第二次大戦の直前イタリア軍はリビアに軍隊を集結させたので，オアシスに軍隊を常駐させることが急務となった。準備段階として水と食糧を守備隊に補給する能力をオアシスに確立する方策がとられなければならない。第二にナイル渓谷のエジプト軍本部とオアシスを結ぶ簡単で迅速な交通手段が必要である。

これまでの議論より，エジプトのオアシスの歴史的背景となる要素を要約してみると以下の通りである。

孤立的という結果として —

A．オアシスは追放（流罪）の地であった。それらは隠遁地であり，失敗に帰した前進基地として利用された。

宗教信仰の栄えた修道院のようであった。(王朝時代の異教，古典時代のキリスト教，19世紀と20世紀初頭のセヌシイ派のイスラム教。)

B．交易路と関係したオアシスの位置は，キャラバン路を決定し，エジプトとスーダンとの位置関係から二国の生産物が交換される交易中心地となった。

C．何の生活手段もない砂漠では比較的肥えた「島」であるオアシスが略奪者の目的となった。この事実はオアシスの集落の計画や家屋の建て方に反映している。村は防壁を作るか防禦しやすいように高い土地に作られており，敵が迷うように路には屋根が作られていて暗くなっている。

謝辞

この翻訳論文が出版できるのは，いちいちお名前を挙げることが出来ないくらい，多数の諸先生，諸先輩方の激励と御努力とによるものであり，ここに感謝を捧げます。私事にわたり恐縮ですが，私の研究が日の目をみる以前に，この世を去った両親の冥福を祈ることをお許しいただきたいと思います。

注

20) Ali Pasha Mobarak が *Al Khotat Al Jawfikia* Vol. XII の pp.111—114の中で Al Gabarty を引用している。

21) Hamdy Effendi が保存している The agreement between the Company and the Egyptian Government Files 参照。

22) Hamdy Effendi が保存している Report on the water-supply, minerals, agriculture and surveying. The Company's Files 参照。

23) Butt & Cury, 1936, *Mersa Matruh*. How to see it, including Siwa and the Western Desert with a vivid account of war operations 1915—1917, Cairo を参照。

訳注

10) この鉄道は近年砂に埋もれてしまって廃線となっている。ナイル渓谷のアシュートとカルガ・オアシスのカルガ市を結ぶ古いダルブ・エル・アルバイン路は舗装され定期バスがある。所要時間は3時間半程である。

文 献

Ali Pasha Mobarak, 出版年不明, *Al Khotat Al Jawfikia* Vol. XII.

Al Makrizi, 出版年不明, *Al Khotat*.

Al Masoudy, 出版年不明, *Morooq Athahab* Vol.III.

Almasy, L.E. de, 1937, *Le Désert Libique*, Cairo.

Ball, J., 1900, *Kharga Oasis*, Cairo.

———, 1927, "Problems of the Libyan Desert" *Geographical Journal* Vol.LXX.

Ball, J. & Beadnell, H.J.L., 1903, *Baharia Oasis*, Cairo.

Bates, Oric, 1914, *The Eastern Libyans*, London.

Beadnell, H.J.L., 1909, *An Egyptian Oasis*, London.

Belgrave, C.D., 1923, *Siwa, the Oasis of Gupiter Ammon*, London.

Breasted, J.H., 1906a, *Ancient Records of Egypt* Vol. I , Chicago, The University of Chicago Press.

———, 1906b, *Ancient Records of Egypt* Vol.II, Chicago.

———, 1906c, *Ancient Records of Egypt* Vol.III, Chicago.

———, 1906d, *Ancient Records of Egypt* Vol.IV, Chicago.

Bovil, E.W., 1933, *Caravans of the Old Sahara,* London.

Breuil, Abbé, Feb. 25・1928, "Les Gravures Rupestre du Djebel Owenat" *Revue Scientifique,* Paris (?).

Buckley, 出版年不明, Report on the Oasis of Dakhla. (Survey of Egypt の内部レポートと思われる。)

Budge, Sir E.A.W., 1901, *The Nile—Note for Travellers in Egypt and the Egyptian Sudan*, London, Cairo.

Butt & Cury, 1936, *Mersa Matruh.* How to see it, including Siwa and the Western Desert with a vivid account of war operations 1915—1917, Cairo.

Butzer, K.W., 1976, *Early hydraulic civilization in Egypt. a study in cultural ecology*, Chicago, The University of Chicago Press.

Caporiacco & Graziosi, 出版年不明, "Le Petture Ruperstri di Ain Doua" *Flor* 34. (出版地不明).

Caton-Thompson, G., 1931, "Prehistoric Research Expedition to Kharga Oasis, Egypt. Preliminary outline of the Season's Work" *Man* Vol.XXXI, London.

———, 1932, "Prehistoric Research Expedition to Kharga Oasis, Egypt. The Second Season's Discoveries" *Man* Vol.XXXII, London.

———, 1952, *Kharga Oasis in Prehistory*, London.

Caton-Thompson, G. & Gardner, E.W., 1932, "The Prehistoric Geography of Kharga Oasis" *Geographical Journal* Vol.LXXX-5, London.

———, 1934, *The Desert Fayum*, Publ. of the Royal Anthro. Inst.

Cressey, G.B., 1958, "Qanats, Karez, and Foggaras" *Geographical Review* Vol.XLVIII, New York.

Drower, M.S.著, 平田寛訳, 1962,「第19章　給水, 潅漑, 農耕」, シンガー, C.編『技術の歴史２』, 筑摩書房.

Falls, J.C.E., 1913, *Three years in the Libyan Desert*, London.

Goblot, H., Mai-Juin, 1963, "Dans l'ancien Iran, les techniques de l'eau et la grande histoire" *Annales—Économies, Société, Civilisations*, Paris.

Graziosi, P., 1934, *Préhistoire, Le Sahara Italien.* (出版地不明).

Hassanein Bey, 1925, *The Last Oases*, London.

Hoskins, G.A., 1837, *Visit to the Great Oasis*, London.

Hussein, Prince Kemal EL Din & Franchet, M., 1927, "Les Dépots de Jarres du Désert de Libique" *Revue Scientifique*, Paris (?).

Ibn Alwardy, 出版年不明, *Kharidat Al Agayib*. (出版地不明).

Ibn Eyas, 出版年不明, *Nashk Al Azhaar*. (出版地不明).

Ibn Hawkal, 960, *Almasaalik Wal Mammaalik*. (出版地不明).

John, B. St., 1849, *Adventures in the Libyan Desert*. (出版地不明).

木村重信編, 1964,『アフリカ美術』(世界美術大系・別巻４), 講談社.

木村重信, 1971,『美術の始源』, 新潮社.

————, 1979,『永遠回帰の美—アルカイック美術探検ノート』, 講談社.

小堀巌, 1959,「西アジアにおける地下水潅漑の人文地理学的研究—カナットを中心に—」『東洋文化研究所紀要』Vol.XIX, 東京大学.

Macaulay, 出版年不明, *The History of Herodotus* Vol. I.

Mitwally, M., 1952, "History of the Relations between the Egyptian Oases of the Libyan Desert and the

Nile Valley" *Bulletin de l'Inst. Fouad I du Désert d'Egypte* Tome II—1, Cairo.

———, 1953, "Physiographic Features of the Libyan Desert" *Bull. de l'Inst. du Désert d'Egypte* Tome III—1, Cairo.

Newbold, 1928, "Rock Pictures and Archaeolgy in the Libyan Desert" *Antiquity* Vol.II, Cambridge.

Sandford, K.S. & Arkell, W.J., 1933, *Palaeolithic Man and the Nile Valley in Nubia and Upper Egypt*, Chicago.

Sayce, April 6・1905, "History of Egyptian Oases" *The Egyptian Gazette*, Cairo.

Seligman, C.G., 1934, *Egypt and Negro Africa*, London.

Shaffic Pasha, 1929, *Notes on the Egyptian Oases & the Western Desert* (in Arabic), Cairo.

Spiegelberg, 1899, *Recueil de Traveau* Tome XXI. (論文名，出版地不明).

———, 1903, *Recueil de Traveau* Tome XXV. (論文名，出版地不明).

Toni, Y., 1966, "The 'Bulletin de la Société de Géographie d'Egypte', A Review of Its Volumes, 1875—1965" *Bulletin de la Société de Géographie d'Egypte* Tome XXXIX, Cairo.

Troll, C., 1963, "Qanat-Bewässerung in der Alten und Neuen Welt" *Mitteilungen der Österreichischen Geographischen Gesellschaft* Band 105 Heft III, Wien.

Winlock, H.E., 1936, *ED Dakhleh Oasis—Journal of a camel trip made in 1908*, New York.

Yoshimoto, T., 1968, *Settlement and Water Supply in Kharga Oasis, Western Desert of U.A.R.- Egypt*, Cairo, (30部限定 タイプ印刷).

The agreement between the Company (The Corporation of Western Egypt—西部エジプト開発会社) *and the Egyptian Government Files*. (Hamdy Effendi が保存している20世紀初頭から1915年頃迄の内部リポート).

Report on the water-supply, minerals, agriculture and surreying, The Company's Files. (Hamdy Effendi が保存している20世紀初頭から1915年頃迄の西部エジプト開発会社の内部リポート).

History of Abu Salih Al Armani. (著者ないし編者，出版年，出版地不明).

Aug. 17, 1935, *The Illustrated London News*.

(日本地理学会会員)

THE ARCHAEOLOGY OF THE ARABIAN GULF DURING THE FIRST MILLENNIUM B.C.*

Dr. Munir Yousif TAHA
Director of Archaeological Explorations,
State Organization of Antiquities and Heritage,
Baghdad, Iraq

The Oman Peninsula which comprises Sultant Oman and the United Arab Emirate is bounded by the sea on one side (i.e. Arabian Gulf and the Gulf of Oman), and the desert on the other.

Therefore, geographically and politically it has always been the region most isolated from the Arabian hinterlands(Fig. 1).

Since the Peninsula is situated in the sub-tropical arid zone and exposed to oceanic influences from the Arabian Gulf and the Indian Ocean, but lying outside the monsoon belt, great heat combined with very high humidity usually occurs during the summer months. The highest temperature in summer is 119°F, whereas the lowest winter temperature is 39°F. June, July, August, and September are generally the hottest months.

Weather variations exist too between the coastal belt, the desert plain and the mountain region.

The rainfall in the Peninsula is infrequent and unreliable except in the northern region which has the highest rainfall.

Underground and oasis water is adequate at present in the Peninsula for agriculture and domestic purposes.

Records concerned with the modern and ancient flora and fauna of the area are still scanty.

Between 1974 and 1979 two seasons of excavations took place at Al Qusais site which is considered the biggest pre-Islamic site yet to be found in Dubai Emirate. It is located nearly thirteen kilometers north-east of the modern towm of Deira.

It is fortunately accessible by all forms of transport. Since the whole site lies in the sabkha, its present topographic features are generally characterized by aridity and barrenness. Small thorny bushes and other low vegetation are to be seen, however, scattered around the outcrops of gypsum which form part of the sabkha and around the low-lying area.

In the lower part of the area Dubai municipality planned a modern cemetery measuring 360000 m². Water resources at present in the area are totally missing.

Conditions at the site during the first season which took place in summer of 1974 were very difficult. The average temperature was between 40-45℃. with an average humidity of 90-95 per cent.

During the first season work was concentrated on three different areas, designated areas A, B, and C. These all proved to be cemetery areas. In the second season which took place in spring of 1979 work continued on the burial areas but the main effort was switched to the excavations of a settlement and small mound called then the Mound of Serpents(Fig.2).

The Excavation of Area A

Area A comprises a large communal grave, two small individual graves, and three rooms which were located on the south-eastern side of the communal grave. Their overall shape forms a semi-circle within a square area measuring 6.50 m. x 6.50 m. extending rather eastwards and

---

* This article is basicly a lecture delivered at the 31st CISHAAN which was held in Tokyo and Kyoto between August 31st and Sept. 7th(1983) under the patronage of H.I.H. Prince MIKASA.

southwards of the communal grave. The outside walls, which measure between 85cm. and 50cm. slope inwards at the end to give the shape of semi-circle.

The entrance of the sloped walls a doorway 50cm. across gave access to the inner rooms. At a distance of 1.10m. on the left side of the entrance a bench measuring 2.10m. long, 50cm. wide and 40cm. high was found attached to the outer curved wall (Fig.3).

The building material is predominantly farouche (man-made shell stone). Rough whitish-grey coloured mud served as mortar to join the slabs.

The Communal Grave

After the removal of the flat slabs of stone which covered the entire grave area, it became obvious that the grave proper was first cut into the soft sabkha, measuring 7.50m. x 1.50m. and 70 cm. deep at the lower part where bones and tomb furniture were placed.

Access to the grave was from the middle of the north-western wall precisely opposite the doorway of the rooms (Fig.3 : top).

In the western corner of the communal grave where the outside wall ended, a relatively small rectangular shaped grave had been cut and then built to height of 60cm. The three sides of the grave were built by erecting upright flat farouche, while the fourth side was built adjoining the wall of the communal grave. One skeleton appeared lying on the right side in contracted manner facing the south-west was found (Fig.3 : below).

Outside the south corner of the communal grave, parallel to the wall running from south to west, another individual grave was located.

It cut part of the wall and corner of the cmmunal grave. No traces of building material were found in or around it. Fragments of human bones consisting of Pelvic and thigh bones were recovered (Fig.3 : right side).

Area B

It lies 10m. north of Area A and partly intrudes on the modern Al Qusais Cemetery. The shape of the communal grave was rectangular as in Area A. The grave proper had been cut into the soft sabkha at a depth of 60cm. Just above this level, on four sides of the grave, more horizontal cutting was made in order to construct the walls and the roof (Fig.4).

This area has also yielded a variety of tomb furniture including bronzes and jewellery.[1]

The Excavation of Area C

This area is located 40m. north-east of Area B. The excavated part of Area C, which was levelled when the new Al Qusais cemetery was built, measure 40m. x 13m. Within this area 24 individual graves were discovered, below ground level oriented in different directions. They varied in size, depth, shape and antiquities they contained (Figs. 5 to 12).

Unfortunately many graves were found disturbed sometime in past. The undisturbed graves yielded the remains of only one skeleton per grave except for grave V which contained the remains of two. The body was placed in grave proper lying on one side in a contracted position with no specific orientation. The hands were placed together under the cheek (Fig. 7). After the body and the gifts were placed, the grave was then filled with clean sand and sealed with capstones.

In 1979 twenty six more graves were excavated. Their shapes and the antiquities they contained were similar to those discovered during the first season.

The Excavations of Settlement I

Feature or construction materials were absent at the surface of the tell. A rectangular trench measuring 12m. x 3.50m. was excavated here. At different depth six occupation floors were found.

Aside from a single sherd which was found near the surface of Floor II and dated to the third millennium B.C., all the other sherds are topographically and technically homogenous and similar to those located in the previously excavated areas.

The Excavations of the Mound of Serpents

This mound is located in the centre of a large settlement located nearly one kilometre south of settlement I. The mound was rectangular in shape, measuring 24m. by 14m., and rising 80cm. above the settlement level (Fig. 13). The nature of the mound consisted of very loose blown sand. As a result of excavation foundation of an incomplete room was discovered.

A great majority of the sherds which were found here bore serpent motifs. These motifs were either raised like barbotine or incised. The serpent bodies when raised were often inlaid with grits to indicate the scales, while the mouth and eyes were incised.

The Found Objects

The three cemetery areas and the two settlements yielded different sorts of antiquities: such as pottery ware, stone vessels, bronzes, and jewellery and ornaments. The all discovered pottery ware is wheel made and grit-tempered. High percentage of it is orange in colour or biscuit colour. Two prominent types were observed. The first type is variation of bowls (Fig. 14), and the second type is spouted jars. The shape of the spout, however, is canaled-shaped (Fig. 14 : I).

Only the Mound of Serpents yielded pottery with raised or incised motifs of serpents (Fig. 15 : A). They include big storage jars (Fig. 15 : C), small spouted jars, and lids.

The excavated areas also yielded a great number of stone vessels identified as chloride. Different forms were observed, but the most dominated form was the cone-shaped vessels. Most of the found vessels were found with their lids.

Alabaster and marble vessels were also reported. The great majority of the afore- and later-mentioned vessels were found at Area C. They were all decorated with geometric designs consisting of triangles, parallel lines, wavy lines, arches, and circle with dot in the middle.

Except for the four bronze daggers which three of them were found at Area A and one was found at Area B, the majority of the discovered bronzes were located either at Area C or at the Mound of Serpents. These bronzes include also bronze arrowheads, rings, bracelets, anglelets, bowls, and spouted bowls.

Some of the bowls were rimless while others have a flat rim. Some of the spouted bowls, however, have exaggerated long spout.

The Mound of Serpents on the other hand yielded different size and shape of bronze serpents, all of which were in crowling manner (Fig.16).

Beads made of stone, silver, gold, and pearls were also discovered.

The Arabian Gulf and Mesopotamia

The geographical position of the Arabian Gulf has always ensured that it played an important role in the trade and communications of the area. The position of the Tigris and the Euphrates rivers, flowing down to the head of the Gulf, has provided an ideal route by water along which raw materials needed in Mesopotamia could be carried. The demand for these raw materials, such as wood, metal, and stone, and for commodities such as incense, kohl, spices, and myrrh was met by establishing trade links within the Arabian Gulf area and beyond to where such goods were to be found. Thus, the economic well-being of the Arabian Gulf relied mostly on Mesopotamia trade; the coastal settlements in the area flourished and declined accordingly, together with Mesopotamia proper.

Prior to the Hellenic conquest, written sources for the area are confined to texts found mainly in Mesopotamia. The earliest reference to trade between the Arabian Gulf and Mesopotamia are in an administrative document dated to the first Dynasty of Lagash. During the reign of Ur-Nanse wood was imported through the Arabian Gulf to Mesopotamia.

Archaeological evidence for the area goes back much earlier. There is strong evidence to suggest contact as early as the Al Ubaid period. Recent study, in fact, has shown that Al Ubaid ware found in the Arabian Gulf settlements originated from Mesopotamia. Trade contacts between the Arabian Gulf and Mesopotamia seem to have continued down to late historic periods.

In other words, the Arabian Gulf, the only maritime outlet for developed land of Mesopotamia, was fully utilized by it in her drive to aquire certain articles of commerce, food, and raw materials.

Similar patterns appear to have existed in Early Muslim era when Baghdad became the focus of different cultures.

Since no absolute dating was made either for Al Qusais or the affiliated sites found in the area, it seems that these sites can be dated from the beginning to the middle of the first millennium B. C. This date was firstly based upon comparison studies and secondly on historical evidences, for this date coincides with the rise and fall of the Neo-Assyrian empire which established direct trade links with the Arabian Gulf. Consequently, when trade via the waters of the Arabian Gulf were shifted to the Red Sea and overland in the succeeding Neo-Babylonian Dynasty, the usefulness of these settlements faded.

Note

1) The excavator believes now that both areas (A and B) can be attributed to the second millennium B.C. and were re-used during the first millennium B.C. A full detailed report will soon be published clarrifying the chronology of the Al-Qusais site and its affiliations.

DISCUSSION

H. I. H. Prince Takahito MIKASA:

1. What is the meaning of the serpent motif ?

2. Is there any connection between the serpent worship in Elamite people and those who made those objects which you showed in the slides ?

Dr. M. Y. TAHA:

Your Highness,

The meaning of the serpent motif illustrated in the lecture is to indicate that serpent(s) must have a special significance in the life of the ancient inhabitants of the site. Therefore, we believe that the mound we excavated (the Mound of Serpents) was either a temple or a sanctuary.

Your Highness, as Your Highness know, serpents have always played a major role in the life of the ancient Near-Eastern inhabitants.

For example, we often see serpent motifs on the top of the Kuddru (the boundary stones) during the Kassaite period in Mesopotamia. Serpents were also depicted on cylinder seals dated to the fourth and third millennium B. C. In addition, serpents have always an important significance in ancient Egypt and in ancient and modern India. Some of the discovered objects at Al Qusais have shown similarities to those found in Iran (i.e. Sialk B, Godin Tepe II, Hasanlu III and Luristan) and dated to the first millennium B. C. as well. We therefore believe that through trade channels culture connections existed between the Elamite and those who made those obiects.

Thank you, Your Highness.

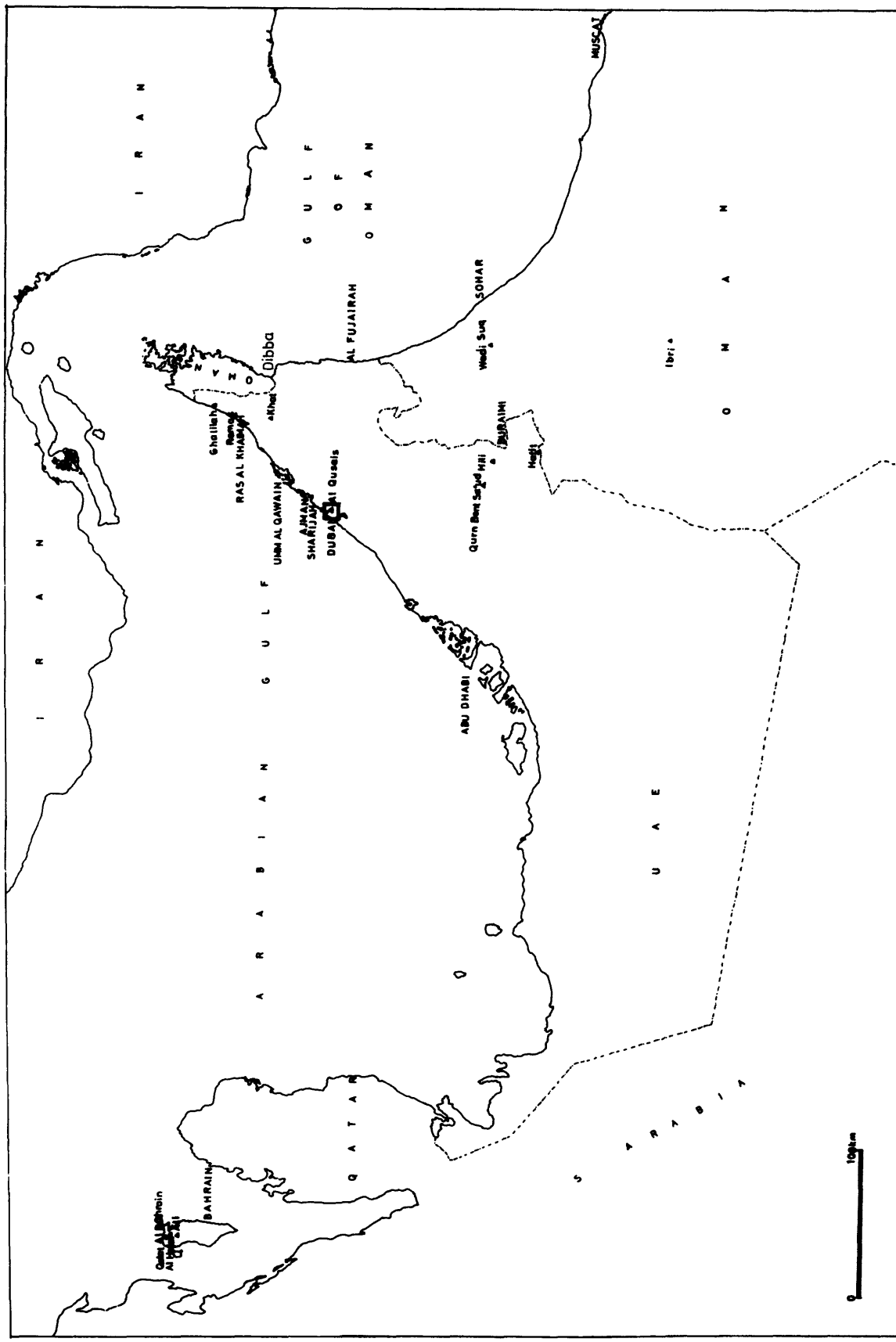


Fig.1 Map showing Iron Age sites in UAE and Arabian Gulf

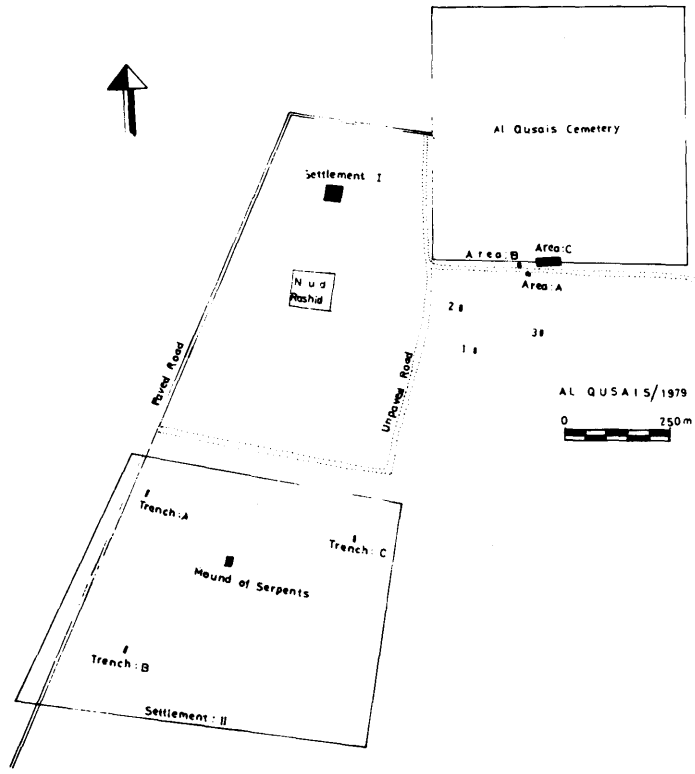


Fig.2 Map of Al Qusais showing Settlement:I and Mound of Serpents excavated in 1979

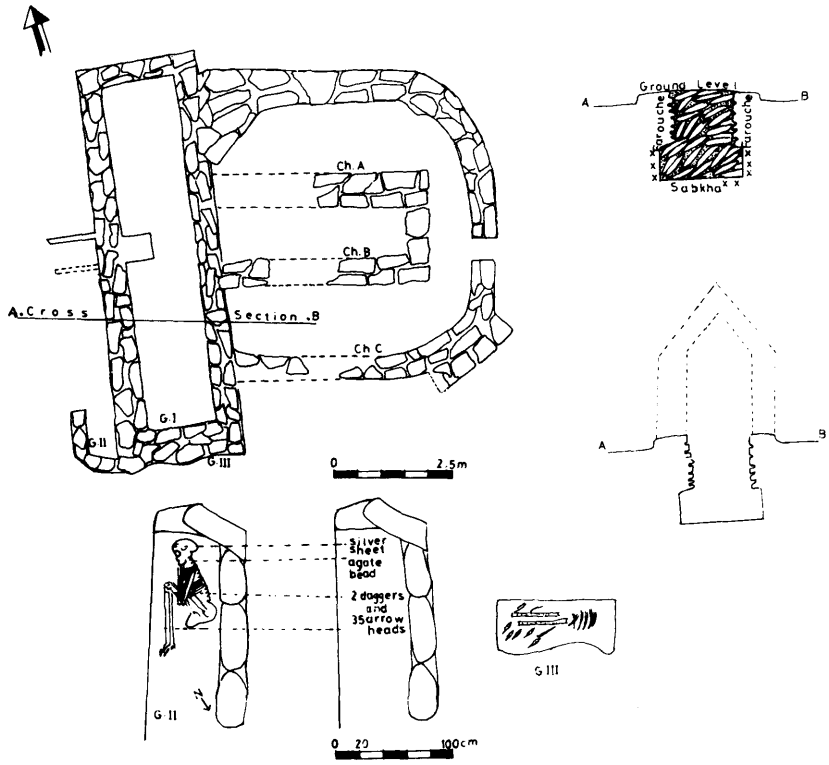


Fig.3 Plans and Sections of Area:A (1974 season of excavation)

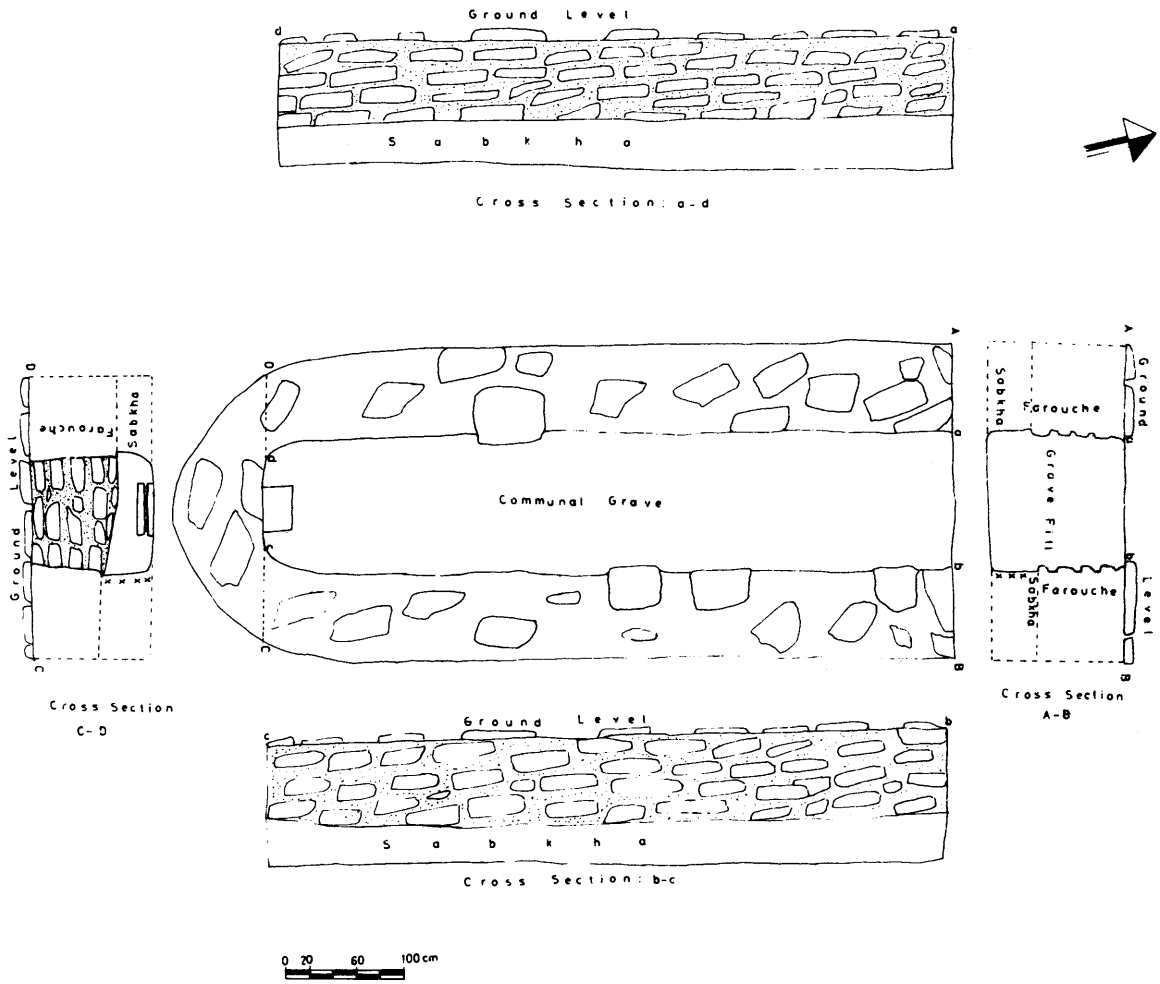


Fig.4 Plan and Sections of Area: B (1974 season of excavation)

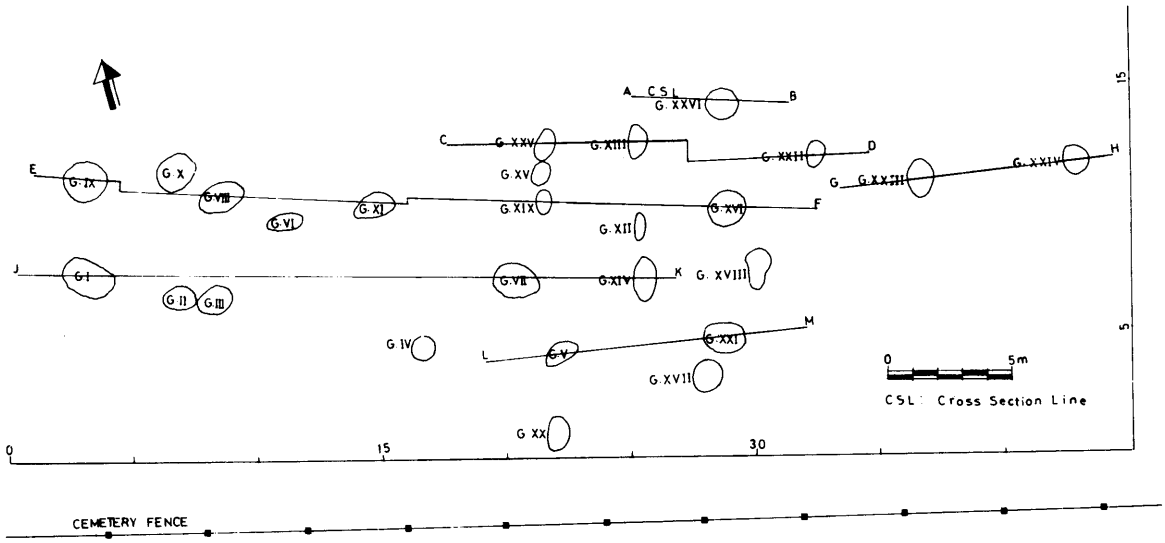


Fig.5 Individual graves unearthed at Area:C
(1979 season of excavation)

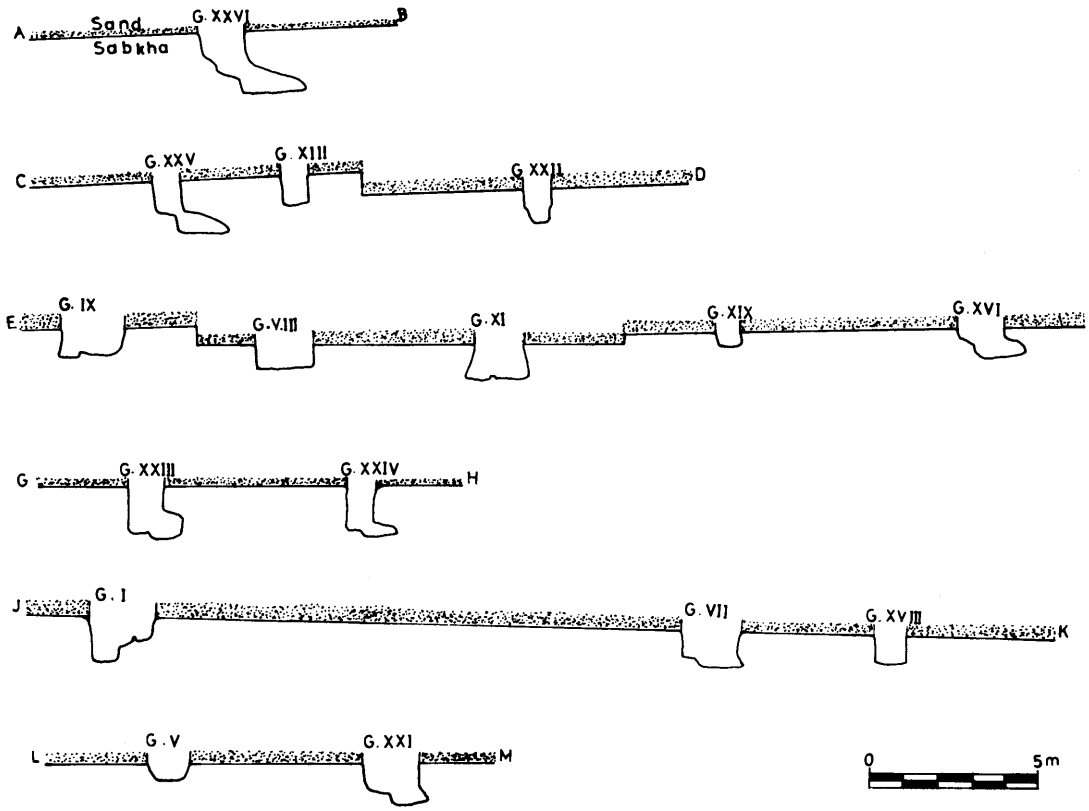


Fig.6 Sections of individual graves, Area:C (1979)

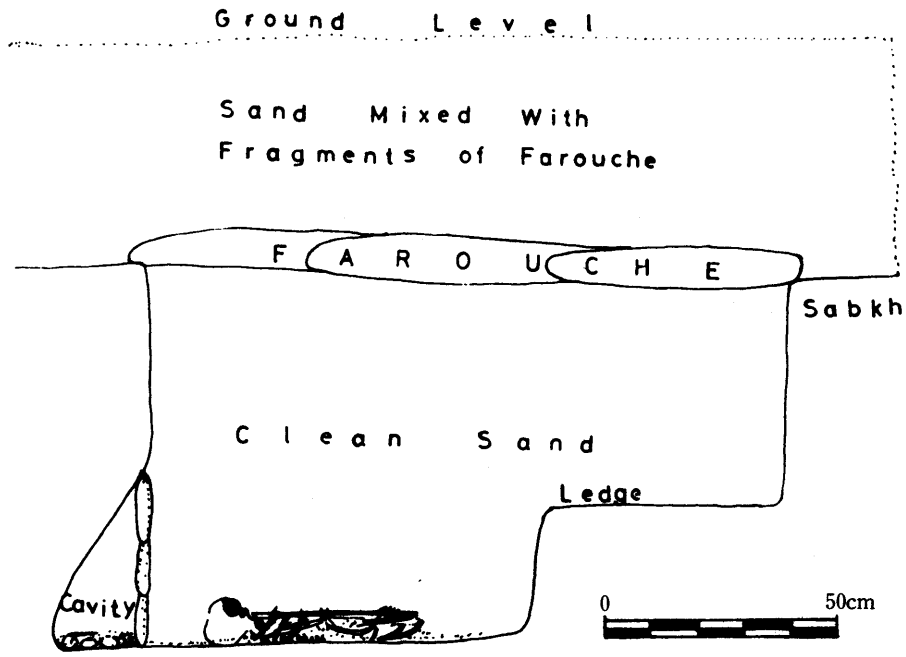


Fig.7 Section of Grave:I, Area:C (1974)

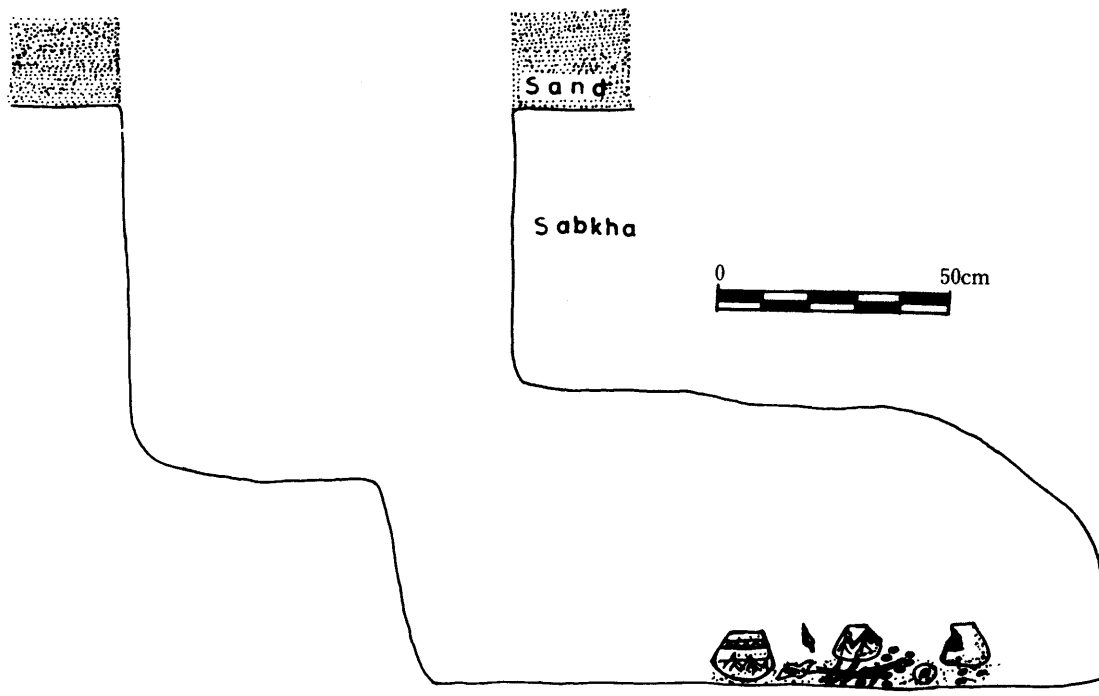


Fig.8 Section of Grave:XX, Area:C (1974)

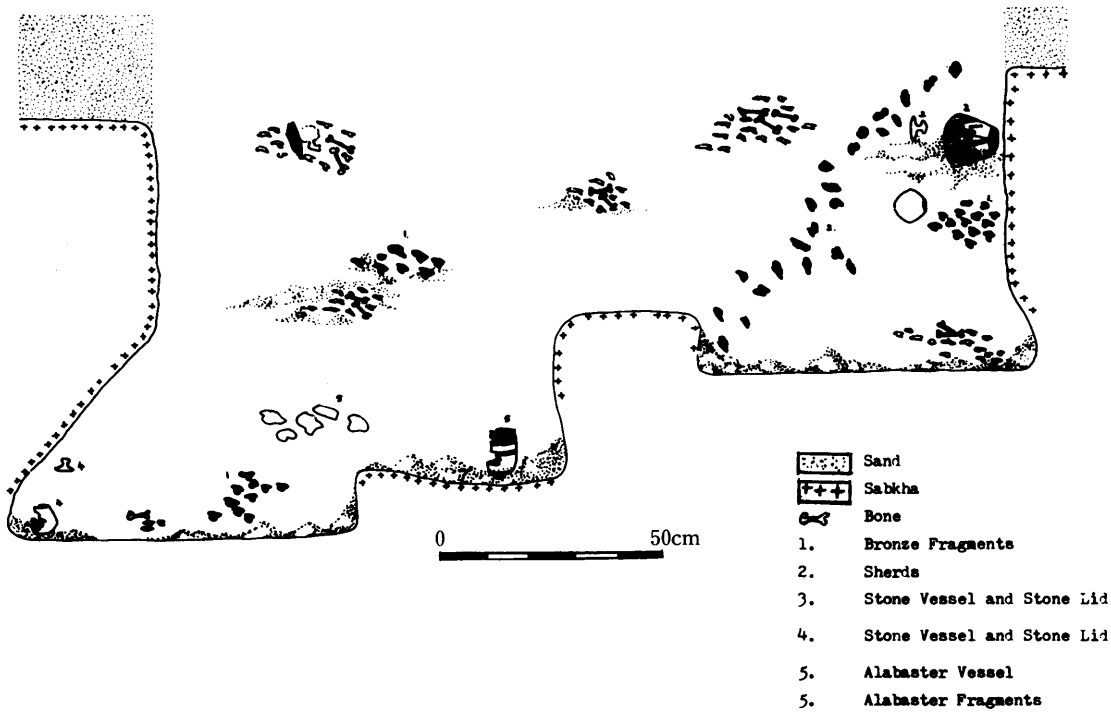


Fig.9 Section of Grave:I, Area:C (1979)

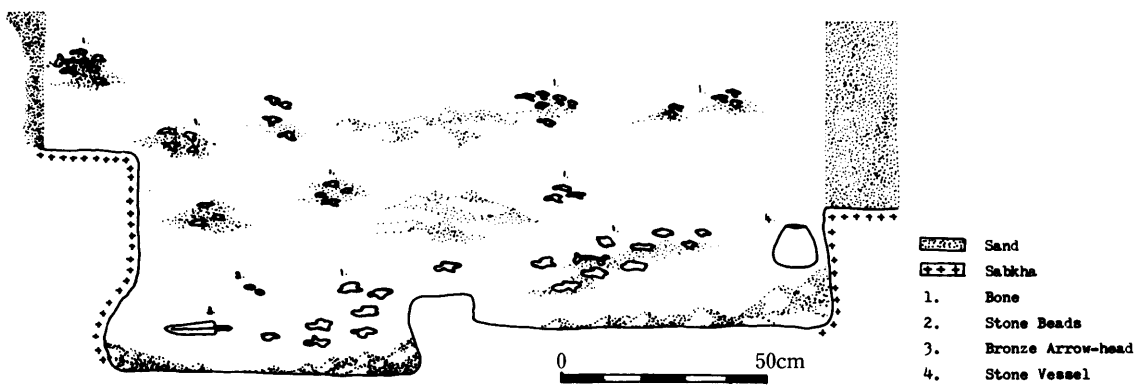


Fig.10 Section of Grave:IX, Area:C (1979)

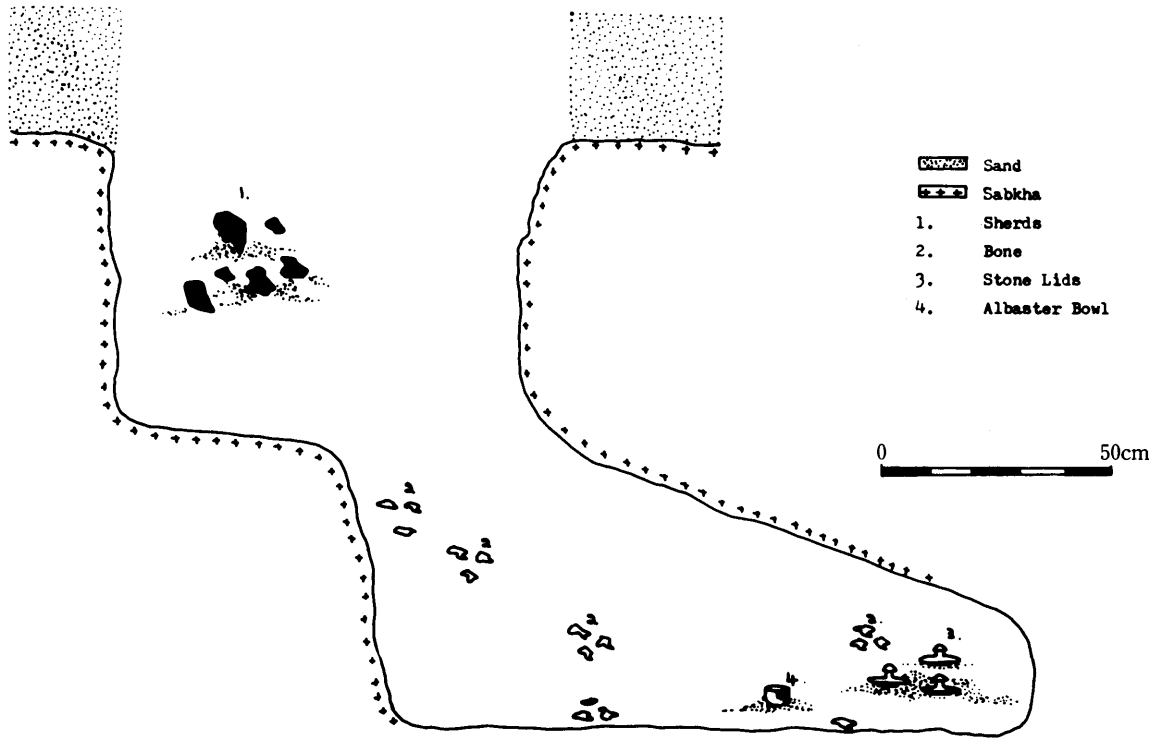


Fig.11 Section of Grave:XXV, Area:C (1979)

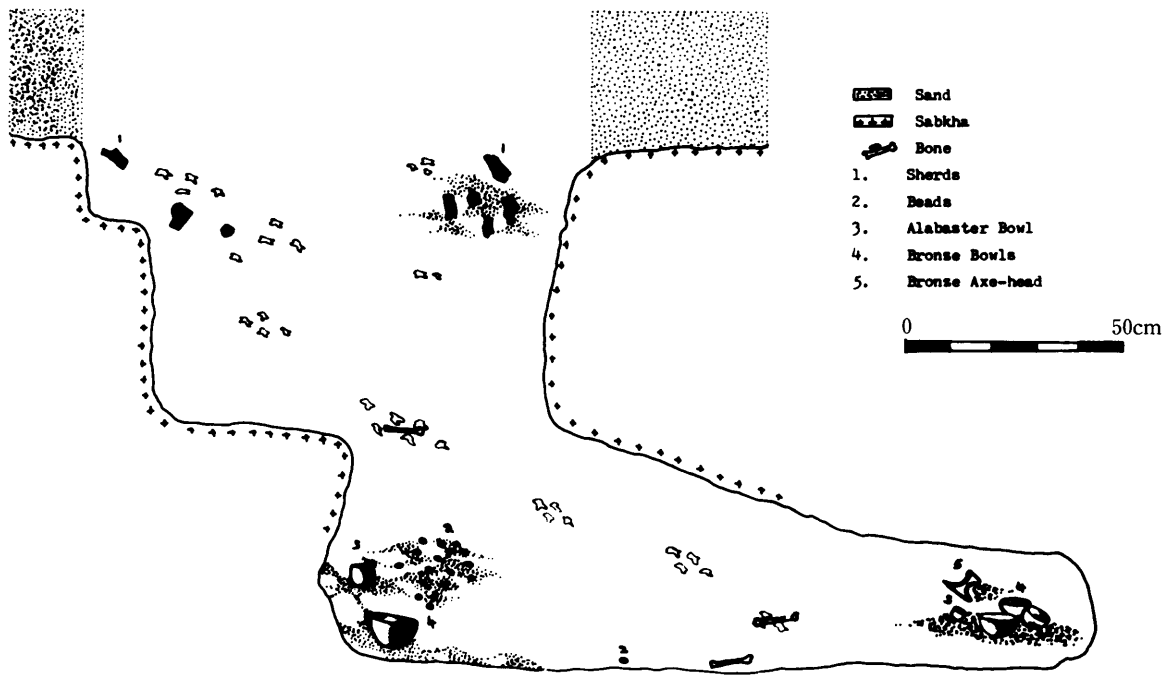


Fig.12 Section of Grave:XXVI, Area:C (1979)

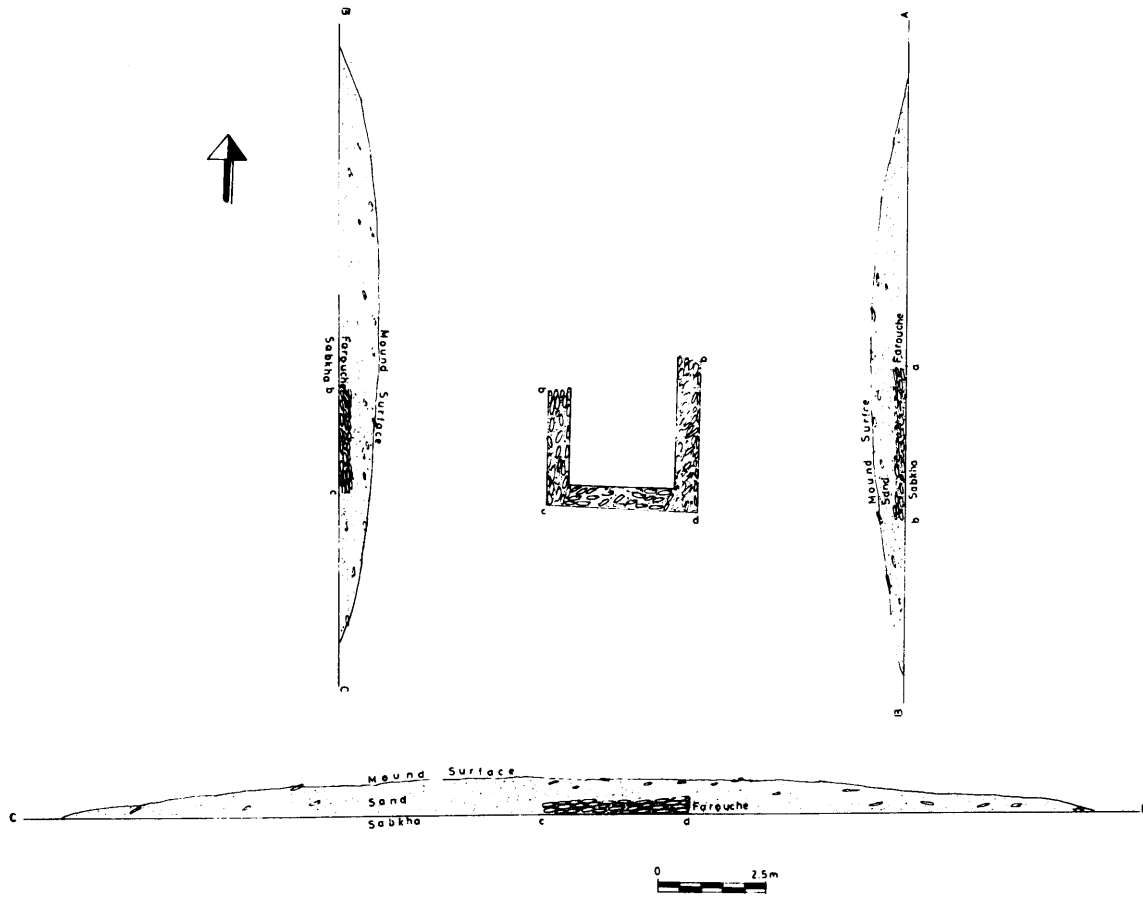


Fig.13 Plan and Sections of Mound of Serpents

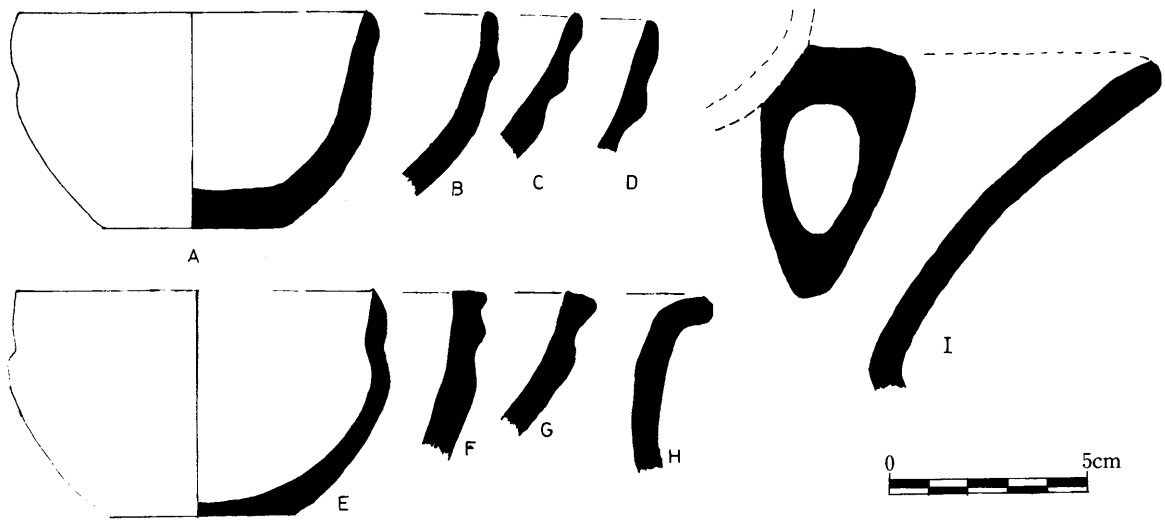


Fig.14 Main pottery types of Al Qusais

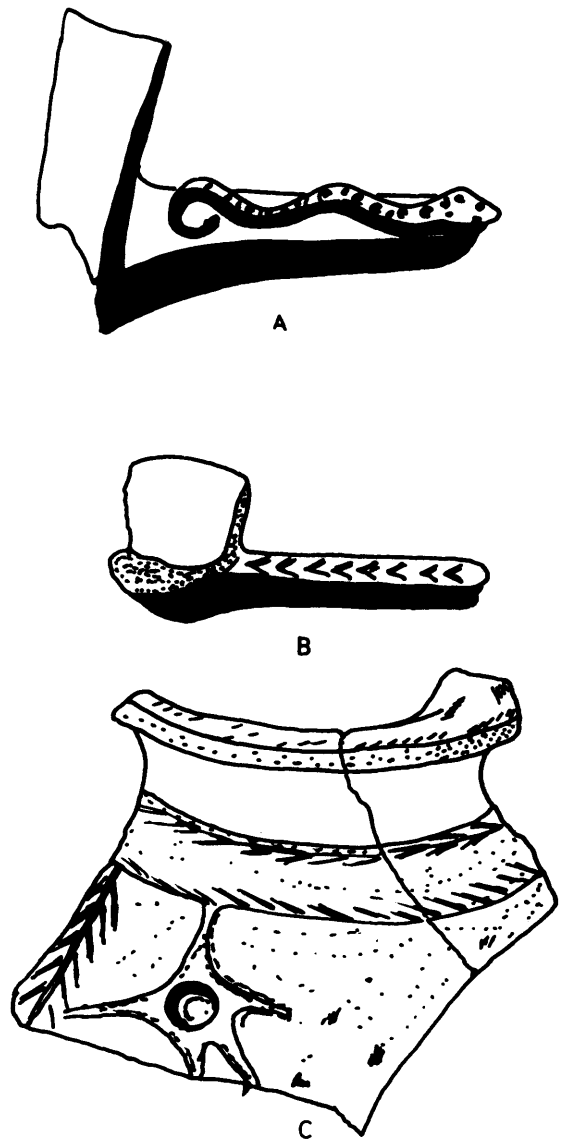


Fig.15 Pottery with serpent motifs from Mound of Serpents

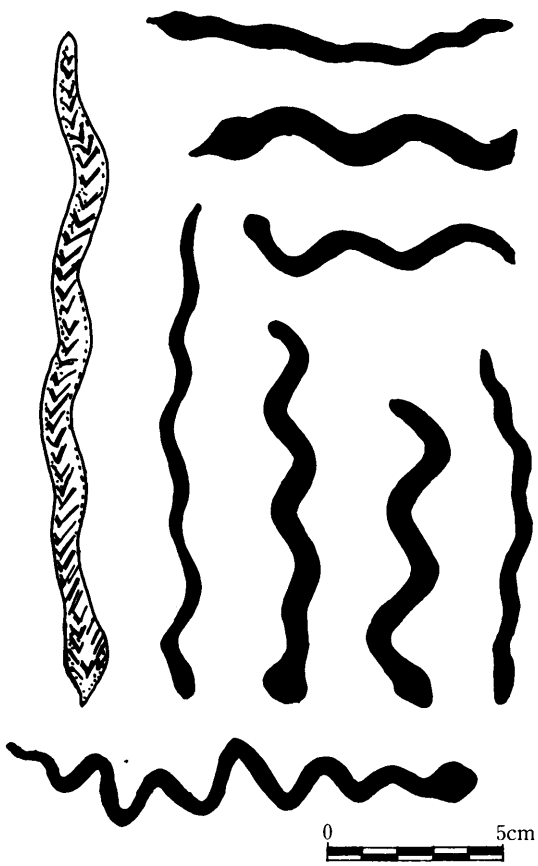


Fig.16 Bronze serpents from Mound of Serpents

TEXTILE FROM AT-TAR CAVES, IRAQ*

Hideo FUJII[1], Yutaka TAKAGI[2], Kazuko SAKAMOTO[3],
Hiromi OKADA[4] and Mikizo ICHIHASHI[5]

The archaeological site of At-Tar Caves is situated 110km south-west of Baghdad, Iraq. This site complex consists of some 400 caves which were carved on the flanks of a series of marly escarpments developed along the salty lake called by the name of Bahr al-Milh (Razaza lake).

At-Tar is located about 80km west of the ancient capital of Babylon and occupies the easternmost border of Iraqi South-western Desert (Syrian Desert), and therefore it has been

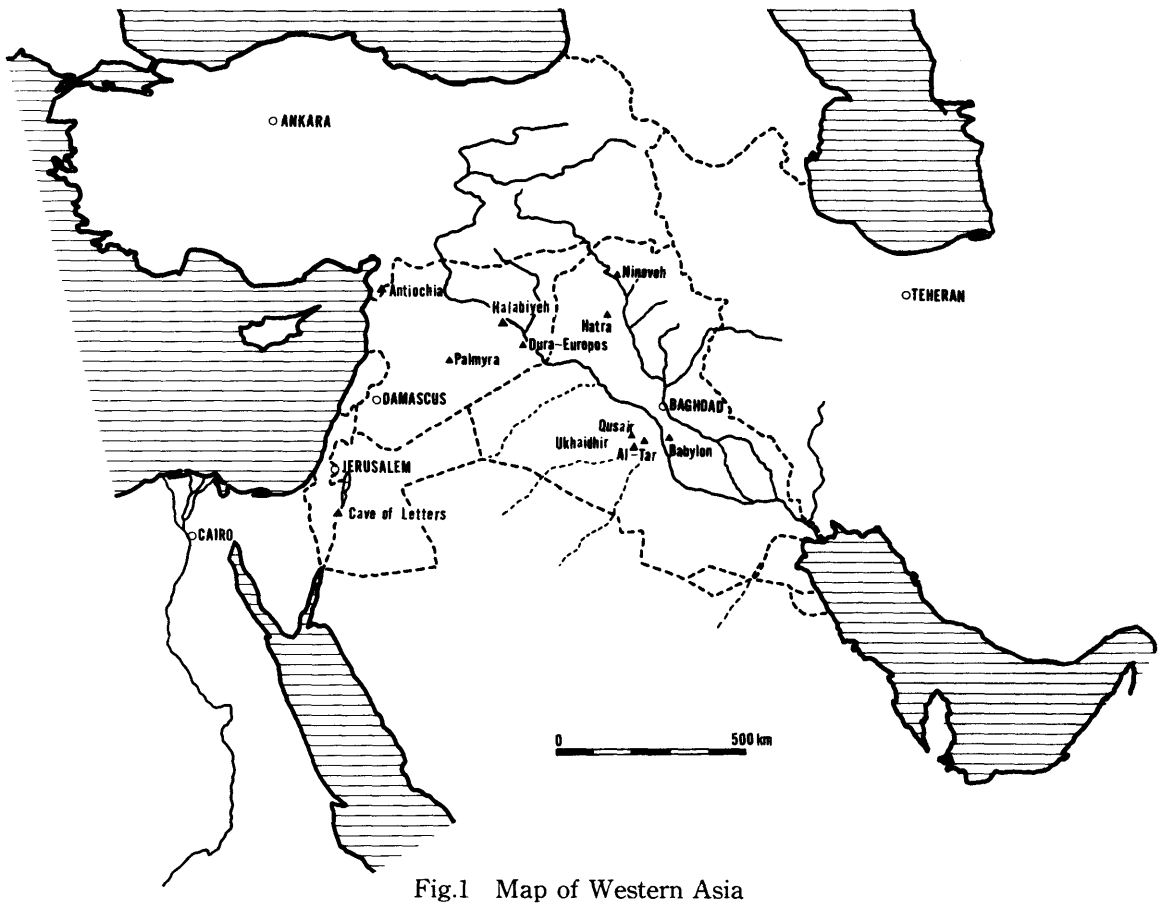


Fig.1 Map of Western Asia

---

* Full text of the lecture given at the 31st International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa (Seminar-A2) held in Tokyo and Kyoto from 31 August to 7 September 1983

1) Professor of Oriental History, Director General of the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

2) Ph. D. specialized in dyestuff analyses and professor at Osaka Kyoiku University

3) Co-researcher of textile at the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

4) Research fellow of textile at the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

5) Research staff of textile at Kawashima Textile School and the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan Universtiy

standing on an important portion of the desert road, with many wadis and oases nearby, in that it has been situated between Arabian Desert in the south and Babylon in the east. Standing magnificently 15km W-S-W of At-Tar is the Ukhaidhir Palace which is said to have been built in the 8th century A. D., and 17km west of At-Tar lies a site called by the name of Qusair which is being excavated now by Iraqi archaeologists and has unveiled several Christian churches and Syriac inscriptions (Fig. 1). From March 1971 to December 1977, At-Tar was excavated by the Japanese Archaeological Expedition in Iraq, headed by Prof. Hideo Fujii of Kokushikan University, Tokyo.

The At-Tar caves consist of four groups of hills: A, B, C, and D(PL. 8-1). The caves at Hill A have the following characteristics.

1. The structure of caves is characterized by the horizontal ceiling and the extremely uneven digging of the floor. Some caves even have sudden descents as deep as 4m.
2. The caves were carved in such a way that they are conducted each other just like a maze.
3. Some of the caves had been filled up absolutely from the floor up to the ceiling with crushed stones, but others had no such filling, for example in the caves dug at the central portion of this hill.
4. Sand is accumulated on these crushed stones especially near the cave entrances, which has been blown in from the desert by wind.
5. According to carbon 14 datings, it appears most probable that the primary carving of these caves is dated to the middle of the 2nd millennium B. C.
6. Although we have very few archaeological findings datable to the primary carving, a number of burials were unearthed in the crushed stones, which are dated by the carbon 14 datings to the time ranging from the 3rd century B. C. to the 3rd century A. D.
7. These burials were unearthed associated with human skeletons and some 4000 fragments of textile, some leather goods and rush mats.
8. These burials were found in three different ways explained as follows: 1) bones wrapped with textile were placed on rush mat which was laid on crushed rocks, 2) bones wrapped with textile were placed on pile textile which was laid on crushed rocks, and 3) bones wrapped with textile were placed on pile textile on rush mat which was laid on crushed rocks. It appears probable that leather was sometimes used for the purpose of covering the bones, textiles, rush mat, and pile textile.

I. Outline of the textiles

1. General description

1) Material

Woolen textiles predominate in number. Textiles of cotton and flax or hemp were also found, though much fewer than the woolen textile. No silk textile (including embroidery) was found. Generally speaking, each of the above material is used individually, but in some cases, combined weaving is recognized which used warp and parts of weft yarns of different materials like cotton and wool, flax or hemp and wool, and rush and wool.

2) Yarn

Woolen fiber of which yarns are made is sometimes as fine as 13 to 20μm and rather long. The yarns sometimes have an apparent diameter of less than 0.2mm(graded from the 60th to the 70th in the International (metric) yarn Numbering). The spinning technique is too consistent, spun regularly hard and soft, for us to imagine these yarns to have been spun with hands. There are yarns made by being twisted many times and those made by few times of twisting, but generally speaking warp yarns are made by more twisting than in the case of weft yarns.

The yarns can be classified into single yarns, 2-ply yarns, 3-ply yarns and 4-ply yarns. There is a single example of slub yarns. Dyeing unspun wool is confirmed, because where there is color gradation there are yarns spun with different colors. There are other examples of yarns which were spun with an appropriate combination of different colors of undyed wool and the wool which was dyed before it was made into yarns. In the case of cotton yarns, dyeing in yarn was executed, judging from the fact that the yarn core is not dyed on some parts of cotton textiles. Mixed spinning using hair and wool is also confirmed.

3) Weaving technique

a) Textile weave (Fig. 2)

There are such types of weaving as plain weave (A), its variants like rib weave (B) and basket weave (C), and twill weave. Types of twill weave are of 2/1 (D) and 2/2 (E) in which four harnesses are used. Warp crossing was sometimes used to alter the textile weave in the case of textiles with designs. This kind of textile includes one which produces rib weave through using two weft yarns. Such techniques were intended for making most effective the expression of designs and probably for making the cloth soft.

b) Types of weave (Fig. 3)

In observing the surface of the textiles, there are several types of weave like so-called tapestry

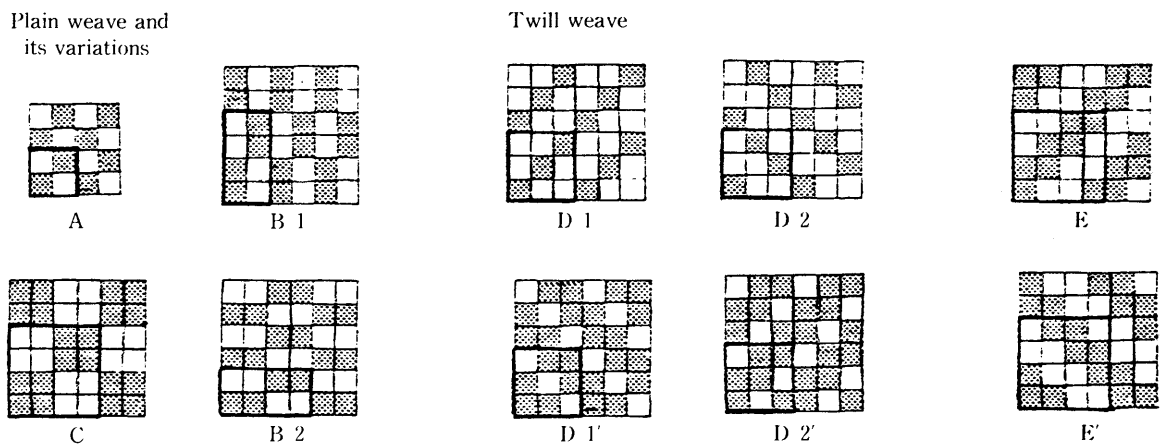
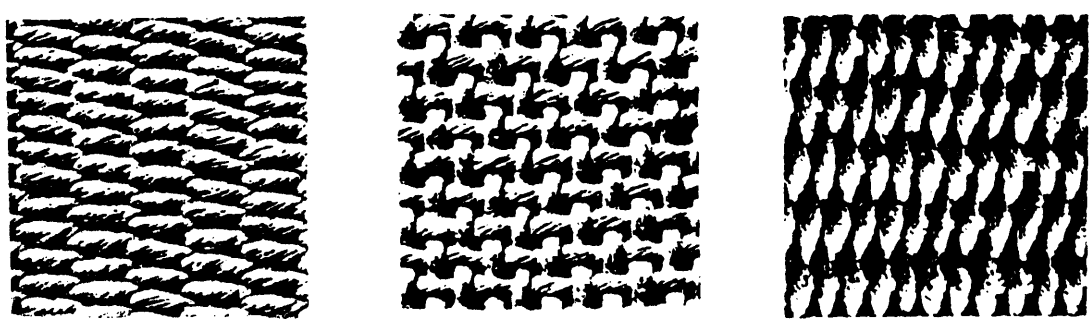


Fig.2 Textile weave



(After Irene Emery 1966)
"Tapestry" "Tabby" "Rep"

Fig.3 Types of weave

(A: weft-faced), tabby (B: balanced) and rep (C: warp-faced).

c) Selvedge (Fig. 4)

Selvedge includes one using simple turning of weft yarn (A) and one using additional turning (B) as well as that which uses additional yarns (C) probably intended for protecting the weft yarns at selvedge and preventing the cloth from alteration.

d) Finishing of warp (Fig. 5)

There is a bordering way like fringe (A). There is also the way in which one of warp ends of about 3 cm in length is left and two to six warp yarns are worked into twisted cord, 2 to 5 mm in diameter, along one edge (B).

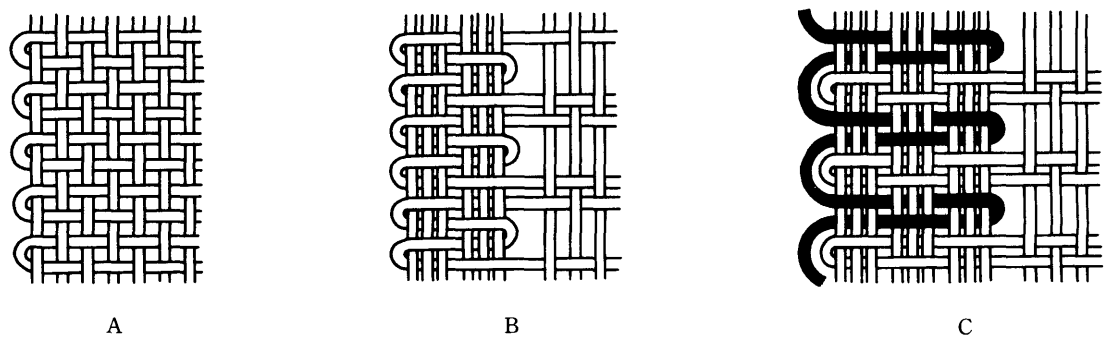


Fig.4 Selvedge

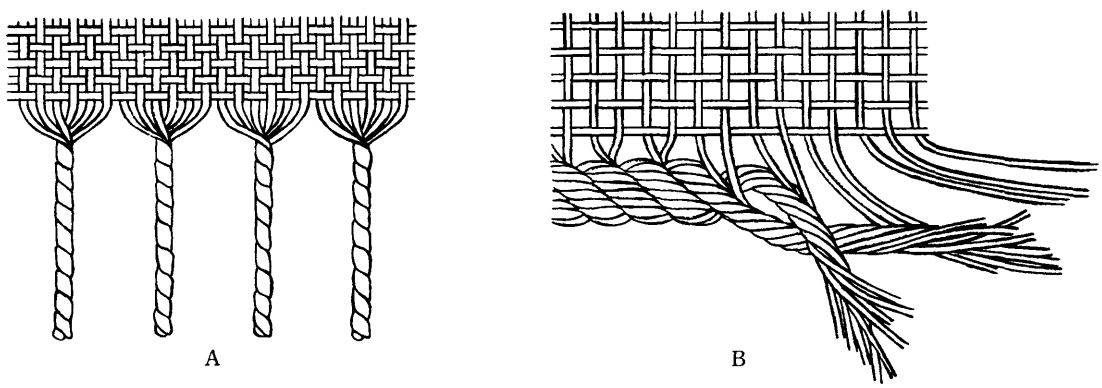


Fig.5 Finishing of warp

4) Design

a) Types of design

There are such types of designs as human figure like portrait, floral designs like arabesque, foliage, flower and fruit, and geometric designs such as stripe, color-graded stripe, 卍, H, Γ, square, chequer, staircase, indentation, running dog, and 卍 meander.

b) Technique of design making

(1) Designs in colors differing from those of the ground are mostly expressed in tapestry. There are some tapestries in which designs are realistically expressed by the usage of weft yarns obliquely interlaced with warp yarns. Also, there are designs of weft stripes including color-graded stripes which were produced with an appropriate combination of two bundles of unspun wool of different colors.

(2) Design making by dyeing

Resist dyeing on cotton textile was found.

(3) Design making by embroidery

Meander design is embroidered with the chain stitch.

(4) Several marks seen at the cloth edges seem to represent either the weaver or the place of weaving.

5) Dyestuff

The yarns dyed with Tyrian purple were used for the designed part of several large cloths. But it is proved that weft yarns of those parts which look the same color as this purple were dyed with "Indigo" and "Madder". The designed part of one of the large cloths was dyed with Lac or Kermes. It is also proved that the red yarns of cord were dyed with "Madder", most likely originated from *Rubia tinctorum,* but the problem still remains with whether or not all of the "Madder" is from *Rubia tinctorum.* It seems that the blue textile was dyed with one of Indigo plants, but it is not clear if its origin was *Indigofera spp.* or *Istatis spp.*(woad). The yellow color of textile is too faded to tell what dyestuff was used. The green one was double-dyed with yellow and blue dyestuffs. The black yarns are thought to be naturally-black materials, but some of them were apparently dyed with a certain kind of dyestuff which has not been identified yet.

These dyes were identified by the methods as follows: (a) original color, (b) fluorescence under U. V. light, (c) coloring test by $SnCl_2$, (d) solubilitus in solvents and (e) extraction, if extractable, and identification by thin layer chromatography.

6) Sewing

Sewing is rather awkward despite the fact that most of the textiles are finely produced.

2. Pile textile

Most of the warp yarns are of 2-ply, one being wool and the other brown hair in cases of thick pile textiles, and are spun with hard twisting. Most of the weft yarns are single and made with soft twisting. All of the pile yarns are of 2-ply. Basically, there are five types of knotting shown in Fig. 6: Types A-1, A-2, B-1, B-2 and C. There are some pile textiles which are knotted on both surfaces (Fig. 7), which are divided into two types: one in which the same knotting is executed on both surfaces, and the other in which the reverse surface has the knots which are distributed at intervals and probably aimed for the prevention of slipperiness. Some of the pile textiles have such designs as squares, wave pattern and staircases. Colored borders of plain weave are recognized on some of the pile textiles.

3. Rush mat

Judging from the fragments of mats, it seems that the mats were woven with 2-ply warp

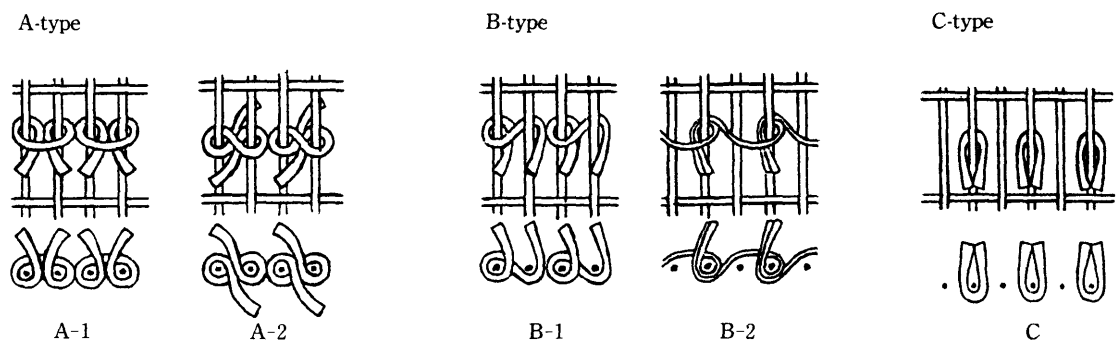


Fig.6 Types of pile knots

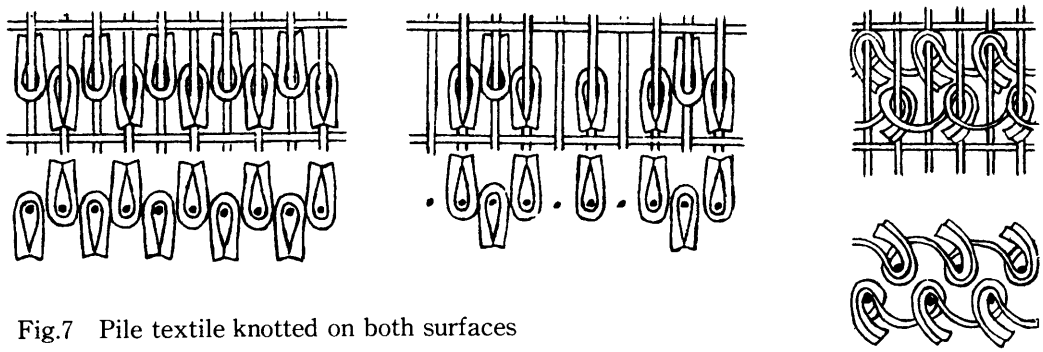


Fig.7 Pile textile knotted on both surfaces

yarns of wool and hair and weft yarns made of rush and that the woolen weft yarns of several different colors were used at their border.

4. Embroidery and cord

Several examples of embroidery and cord are recognized.

II. Typical examples of textiles unearthed

1. Large cloth with H design (PL. 8-2)

The designs depicting H and squares are woven in tapestrv on a yellow ground. Weave alteration is recognized in which the ground itself is made in plain weave and in which the designed part, the only part woven in tapestry, is made in rib weave, The warp crossing is executed at the part where this weave alteration is seen. This cloth is regarded to have been a manteau. The varns of designed parts are dyed with Tyrian purple.

2. Portraits sewn on cloth (PL. 9)

Portraits are expressed in tapestry using many colors. These portraits are expressed with the technique in which weft yarns are interlaced obliquely with warp yarns to produce shade by using two kdnds of woolen yarns of different colors and to produce the most emotional effect. In the cane of the portraits with frames of indentation, the orientation of the portrait agrees with warp direction (PL. 9-1). On the contrary, the portraits having frames with wave pattern have an agreement in the orientations of the portraits and weft yarns (PL. 9-2 to 4). The former show the Greco-Roman artistic style, whereas the latter seem to show a local style. On one of the portraits of the former type, there are seen green leaves and two red bunches of grapes on both sides, probably meaning hair ornament (PL. 9-1). A similar example is recognized on a mosaic pavement at Antioch, and this person could be the representation of Bacchus, One portrait of the latter type seems to show a golden crown and large earlings looking like egg (PL. 9-3), and another (PL. 9-4) has a facial appearance which resembles the woman portrait depictied on a mosaic pavement at Bīshāpūr, Iran.

3. Textile with chequer design (PL. 10-1)

This very thin textile has chequer design in reddish orange and dull reddish yellow, with small design in tapestry. There are recognized fringes at its ends. This textile seems to have been large and colorful.

4. Textile with arabesque designs (PL. 10-2)

Although this is too decayed to tell the whole appearance, it is rich in decoration and was woven with a complicated technique in which designs of arabesque and wave pattern were expressed in tapestry, and weft stripes in graded color were added to them. There are leaves and bunches of grapes in the middle, wave pattern to the outer side, and color gradation

further outside. This kind of decoration which is produced with bands of floral designs resembles those recognized on the textiles from Palmyra and Dura-Europos, and the decoration with wave pattern and color-graded stripes is recognized among the textiles unearthed at Dura-Europos.

5. Double-faced pile textile (PL. 11-1)
   Seven or eight pile yarns are used together to make pile tufts on both surfaces by the method illustrated in Fig. 8. Squares of different colors are expressed along the selvedge. This pile textile is very thick and is thought to have been used as a saddle seat on horse or camel.
6. Thin pile textile (PL. 11-2)
   Both of the warp (0.73mm) and weft (0.87mm) are very fine, differing in this respect from other pile textiles. Pile yarns are knotted with the method of B-2. The usage as clothing is thinkable.
7. Pile textile with wave pattern (PL. 11-3)
   The wave pattern is expressed with pile yarns. Density of pile knots is very high (40×48 dm^2). The type of knotting is C, and thick yarns are pulled out at intervals on the reverse surface, probably for the purpose of preventing slipperiness.

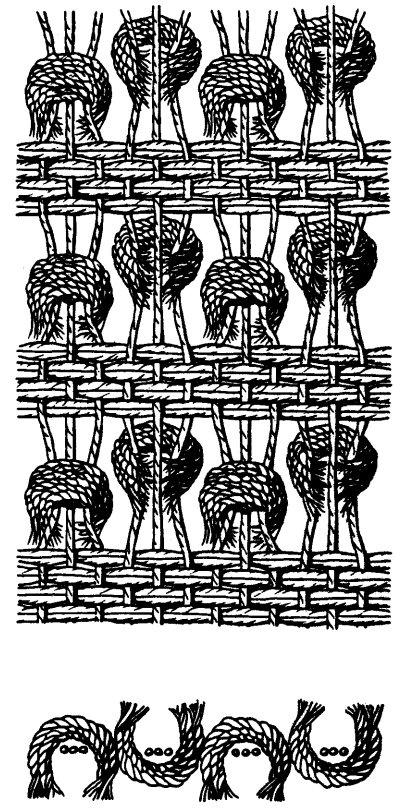


Fig.8 Double-faced pile textile

The textiles from At-Tar present considerable resemblances in their material and decoration pattern to those found at Palmyra and Dura-Europos, which suggests at least a certain cultural connection between these sites and At-Tar. Cotton textiles, resist dyeing, and varieties of knotting ways of pile yarns are other characteristics, and so further research is expected to clarify relations of At-Tar to other sites. We adopted the research method mentioned briefly in this report to clarify the culture exchange history related to At-Tar, with the focus on the techniques of weaving and dyeing. Textile is not like pottery which has been analyzed on established scientific bases, though it is not less important than pottery in that it is more mobile. In this view, we think that the textiles from At-Tar present considerable importance in the studies of their material, decoration pattern, and techniques of weaving and dyeing.

We propose for a unification of research method on archaeological textiles as well as that of terminology for better understanding among textile researchers and better research results.

DISCUSSION

Professor D. J. WISEMAN (University of London, England):

Were the textiles of At-Tar Caves locally made or imported from abroad (outside Mesopotamia)?

Professor Hideo FUJII:

Thank you very much.

The field of textile is still new for archaeologists. Textile is unlike pottery which has been analyzed and studied on scientific bases, although it is not less important than pottery in that it is more mobile. According to our limited knowledge, we believe that the motives and weaving

technique of the discovered textiles were influenced by their makers. So, we are analyzing these materials in order to give our definite answer. There is, however, definite relationship between the textiles which we discovered and those found in the Arabian Gulf, the coast of the East Mediterranean, the Red Sea area including Egypt and Nubia, and the southern part of Anatolia including Antioch. The pile textiles are related especially to the Central Asia. At-Tar is geographically located at an area closely connected with these areas. We have proposed this study in a hope that we can begin comparative studies of textiles in the area. We appeal for a terminological unification in the study of the archaeological textiles for better communication among textile researchers. Finally, we like to emphasize that textiles can be an important key to a clarification of ancient culture exchanges.

BIBLIOGRAPHY

Emery, I., 1966, *The Primary Structures of Fabrics,* The Textile Museum, Washington, D. C.

Fujii, H., ED., 1976, *Al-Tar I: Excavations in Iraq, 1971-1974,* The Institute of Ancient Iraq Culture, Kokushikan University, Tokyo.

———, ED., 1980,"A Special Edition on the Studies on Textiles and Leather Objects from Al-Tar Caves, Iraq" *Al-Rafidan* Vol. I., The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, kokushikan University, Tokyo.

Pfister, R., 1934, *Textiles de Palmyre,* Les Éditions d'Art et d'Histoire, Paris.

———, 1937, *Nouveaux Textiles de Palmyre,* Les Éditions d'Art et d'Histoire, Paris.

———, 1940, *Textiles de Palmyre: III,* Les Éditions d'Art et d'Histoire, Paris.

———, 1951, *Textiles de Halabiyeh (Zenobia),* Librairie Orientaliste Paul Geuthner, Paris.

Pfister, R. and Bellinger, L., 1945, "The Textiles" *(Part II) The Excavations at Dura-Europos: Final Report IV,* edited by M. I. Rostovtzeff, A. R. Belliger, F. E. Brown, N. P. Toll and C. B. Welles, Yale University Press, New Haven.

Schweppe, H., 1979, "Identifications of dyes on old Texiles" *A lecture note (April, 1979)* at the American Institute for Conservation, Toronto, Canada.

Takagi, Y., 1969, "A Chemical Study of dyes "Jodai" Textiles (4)" *Bulletin (Study on the Japanese Culture in Relation to Imperial Family and Court) No. 21,* Archives and Mausolea Division, Imperial Household.

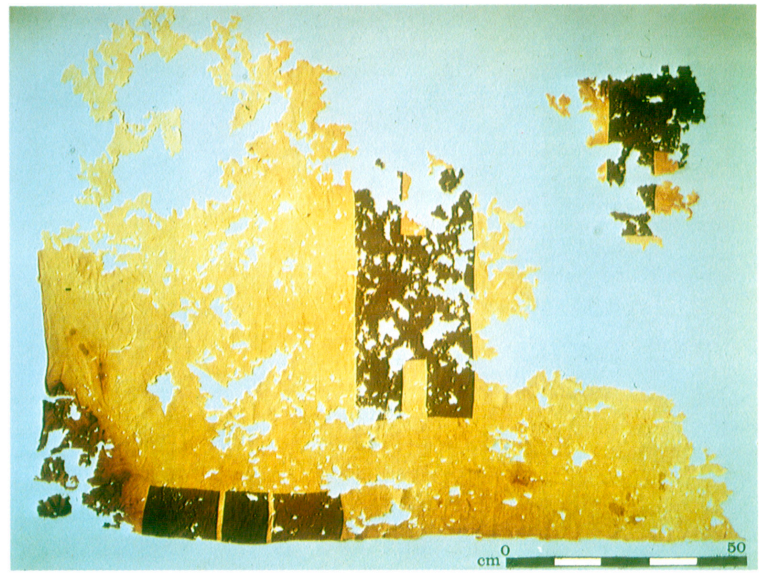
Uemura, R. and Takagi. Y., 1959, "A Chemial Study of dyes "Jodai" Textiles (1)" *Bulletin (Study on the Japanese Culture in Relation to Imperial Family and Court) No. 11,* Archives and Mausolea Division, Imperial Household.

———, 1962, "A Chemical Study of dyes "Jodai" Textiles (2)" *Bulletin (Study on the Japanese Culture in Relation to Imperial Family and Court) No. 14,* Archives and Mausolea Division, Imperial Household.

———, 1967, "A Chemical Study of dyes "Jodai" Textiles (3)" *Bulletin (Study on the Japanese Culture in Relation to Imperial Family and Court) No. 19, Archives and Mausolea Division, Imperial Household.*

Yadin, Y., 1963, *The Finds from the Bar Kokhba Period in the Cave of Letters,* The Israel Exploration Society, Jerusalem.

1 General view of Hills A (left) and C (right) of At-Tar Caves



2 Cloth with H design

1 Portrait with frame of indentation

2 Portrait with frame of wave pattern

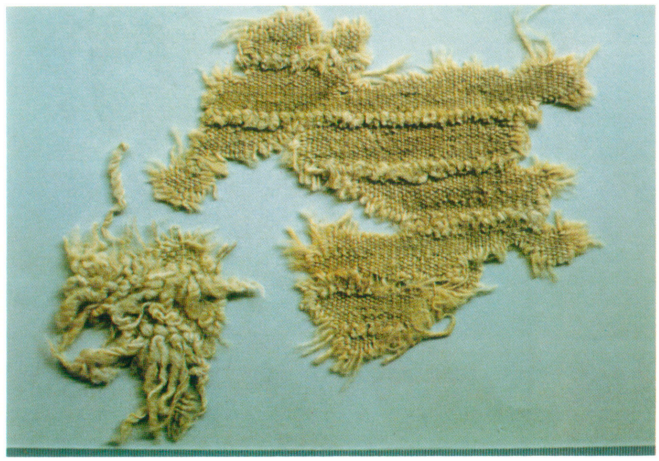
3 Portrait with frame of wave pattern

4 Portrait with frame of wave pattern

1 Textile with chequer design

2 Textile with arabesque designs

1 Double-faced pile textile



2 Thin pile textile

3 Pile textile with
wave pattern

彙　報

1　国士舘大学イラク古代文化研究所の研究活動：1982（昭和57）年３月以降

1982（昭和57）年３月　『ラーフィダーン・第II巻：イラク，ハムリン発掘調査概報』刊行。

1982（昭和57）年４月１日　小口裕通を国士舘大学助手（イラク古代文化研究所勤務）に発令。　大沼克彦を国士舘大学専任講師（イラク古代文化研究所勤務）に発令。　石田英実（大阪大学人間科学部助教授）を国士舘大学非常勤講師（イラク古代文化研究所）に発令。　池田次郎（京都大学理学部教授），小谷仲男（富山大学人文学部教授），坂本和子（染織遺物研究家）の３名をイラク古代文化研究所の共同研究員に発令。

1982（昭和57）年４月　松本健助手は，昭和56年4月より１年間，本学在学研究員として，ミュンヘン大学考古学研究所に留学のため派遣されていたが，引きつづき，国際交流基金により１年間，長期在外研究員として同大学へ派遣留学される。『イラク，テル・グッバ第VII層発掘の建築遺構復原に関する研究』刊行（特定研究(1)研究成果報告書：昭和56年度文部省科学研究費補助金）。

1982（昭和57）年５月　藤井秀夫教授，テル・グッバの模型（中近東文化センターによる複製）を，三笠宮崇仁殿下の御名代として，イラク共和国文化情報省考古庁へ運送し，５月20日同庁へ同模型の寄贈伝達。

1982（昭和57）年５月～７月　イラク，ハディーサ盆地のテル・アブ・ソール遺跡の全体測量を実施（国士舘大学経費，日本私学振興財団補助金）。

1982（昭和57）年10月～1983（昭和58）年12月現在　イラク，ハディーサ盆地，テル・オウシィア遺跡の発掘調査　（国士舘大学経費，日本私学振興財団補助金）。

1982（昭和57）年11月　川又正智講師，日本オリエント学会第24回大会に於いて，テル・グッバVII層建物の復原研究及び1981年ハディーサ（テル・アブ・ソール）調査に関して代表報告。

1983（昭和58）年４月１日　八木和美を国士舘大学副手（イラク古代文化研究所勤務）に発令。　沼本俊宏を国士舘大学副手（イラク古代文化研究所勤務）に発令。　石田英実（大阪大学人間科学部助教授）を国士舘大学非常勤講師（イラク古代文化研究所）に発令。　池田次郎（京都大学理学部教授），　小谷仲男（富山大学人文学部教授），坂本和子（染織遺物研究家），市橋幹蔵（川島織物テキスタイル・スクール嘱託研究員），高木豊（大阪教育大学教育学部教授）の５名をイラク古代文化研究所の共同研究員に委嘱。

1983（昭和58）年８月～９月　イラク共和国考古庁調査局長ムニエル博士を招聘（第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議（東京・京都）出席のため）。

1983（昭和58）年９月　藤井秀夫教授，第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議（東京・京都）に於いて，アル・タール洞窟遺跡出土の染織品の研究を代表報告。26日，石井恵美子職員イラク古代文化研究所に配属。

1983（昭和58）年10月　第１次イラク，エスキ・モスール発掘調査開始（国士舘大学経費）。

1983（昭和58）年11月～12月　イラク共和国考古庁長官ダメルジ博士を招聘（同博士の博士論文の日本語版出版のため）。

2　所員名簿（1983年12月現在）

所　　長　藤井秀夫

所長代行　山田昭二

教　　授　藤井秀夫（古代メソポタミア史学，文学部併任）

教　　授　清水平吉（法制史学）

講　　師　川又正智（考古学・東洋史学）

講　　師　岡田保良（建築史学・考古学）

講　　師　大沼克彦（先史学）

助　　手　松本　健（考古学）

助　　手　井　博幸（考古学）

助　　手　岡田浩海（服飾史学）

助　　手　小口裕通（考古学）

助　　手　沼本俊宏（考古学）

助　　手　八木和美（考古学）

教授(兼任)　山田昭二（政経学部専任，国際関係学）

講師(兼任)　柴田徳文（政経学部専任，国際関係学）

講師(兼任)　戸田有二（文学部専任，考古学）

非常勤講師　石田英実（大阪大学人間科学部助教授，形質人類学）

共同研究員　池田次郎（京都大学理学部教授，形質人類学）

共同研究員　小谷仲男（富山大学人文学部教授、東洋史学・考古学）

共同研究員　高木　豊（大阪教育大学教育学部教授，染料分析をはじめとする理化学）

共同研究員　坂本和子（染織史学）

共同研究員　市橋幹蔵（川島織物テキスタイル・スクール嘱託研究員，染織物の研究）

事　　務　石井恵美子

イラク学術調査団代表者　藤井秀夫

学内関連部局　増田末太郎（学術振興課長）

国士館大学イラク古代文化研究所紀要「ラーフィダーン」編集方針

1. 西アジア古代文化の研究およびそれに関連する諸分野を掲載対象とします。
2. 研究所の紀要ですが，外部の投稿希望の方にも広く誌上を開放し，学術の進展に寄与したいと思います。投稿資格は問いません。採否と掲載法は編集委員によって決定します。
3. 用語は日本語または英語を原則とします。他の言語での発表を希望する方は前もって編集委員に相談してください。
4. 年１回発行を原則とします。Ａ４判横組です。

編集委員長（1984年度）：藤井秀夫

投稿規定

1. 原稿は論文・報告・書評・翻訳等の種類と長短を問いません。ただし未発表のものにかぎります。
2. 投稿原稿はすべて，署名原稿としてあつかいます。
3. 引用文献，参考文献はかならず明記してください。
4. 注および引用は，論旨をすすめるうえに，どうしても必要なものに限ります。
5. 注は原則として章末に集中して掲載します。単なる引用文献は注とせず，執筆要項11の要領で本文に示してください。
6. 採否にかかわらず，投稿原稿は返却いたしません。必要なものは投稿前にコピーをとってください。
7. 他言語レジュメ希望の場合は，投稿者において作成の上，原稿と共に送ってください。
8. 英文目次をつけますので，論題には英訳をつけてください。英文原稿の論題には日本語訳をつけてください。
9. 掲載となっても原稿料はさしあげません。発行後は本誌２部と別刷50部まで無料でさしあげます。別刷がそれ以上必要なときは作製実費をいただきます。
10. 原稿の送付先，連絡先はつぎのとおりです。

〒194-01　東京都町田市広袴844 国士舘大学イラク古代文化研究所 「ラーフィダーン」編集委員会

電話　0427-35-3111(内線196)

執筆要項（日本語の場合）

1. 原稿用紙は，横書きのものとします。本誌用原稿用紙を準備してありますので御注文下さい。
2. 原稿は，青または黒のペン書きとします。鉛筆書きはうけつけません。楷書がきを守ってください。
3. 特殊な場合，古典の引用，固有名詞などをのぞき，現代かなづかい・当用漢字を用いることを原則とします。
4. 句読点，括弧，各種記号も，かならず原稿用紙のマスの１箇分を使うこととします。
5. 原則として，原稿中の数字はアラビア数字で表わすこと。年号，月日もアラビア数字を用います。年号は原則として西暦で表わしてください。
6. 論文の第１ページ（表紙）には，本文を書かずに，論題（タイトル）と著者の氏名住所，所属，生年，英

訳論題だけを書いてください。

7. 図，および表は，一図一表ごとに，別の紙に書き，本文とは別に一括してください。図，表ごとに，通し番号，図表名および説明，出典などを記し，本文原稿の欄外にそれぞれの，挿入箇所を指定してください。

8. 図，表の凸版原稿は，原則として，墨入済で送ってください。特殊な場合をのぞき，凸版中の写真植字などは印刷所でおこないます。

9. 写真は，はっきりしたものに限ります。ネガフィルムではなく，手札判以上の大きさに焼付けしたものをお送りください。

10. 写真も，図，表のあつかいにならい，通し番号，挿入箇所の指定をおこなってください。また，かならず写真の説明をつけてください。写真，図表が引用の場合は次項にならって下さい。

11. 引用文献の指示は，本文中に，カギ括弧を付し，著者名，文献刊行年次，引用ページ数の順序で下記の例にしたがって記載することとします。

〔松井，1960：pp. 30-32〕

〔Alnahar,1943：p.123〕

ただし同年次刊行の場合はアルファベットにより下記のように記載して下さい。

〔松井，1963a：pp.20-22〕〔松井，1963b：p.10〕

12. 注は，本文と切り離し，別紙に記すこと。この場合，本文には参照箇所に，番号を，注記載の別紙には，本文のページ数をそれぞれ明記してください。

13. 本文，および注において引用した文献は，すべて原稿の末尾にまとめて，下記の要領で記入してください。

(1) 文献の配列は，著者名のアルファベット順とする。この場合，日本人・アラビア人等の名もラテン字で書いたと仮定して順序を決め，ヨーロッパ人名のあいだに入れてください。

(2) 文献の記載は，著者名，年号，論題（タイトル），誌名，巻，号，出版社（地）名の順に配列すること。欧文の論文集，雑誌の表題には，イタリック体で印刷する指示のため下線をほどこす。単行本の場合も書名に下線をひくこと。日本文の場合は，論題にカギ括弧をほどこし，論文集，雑誌の表題には二重のカギ括弧をほどこす。雑誌の巻数は，ローマ数字(XIV など)，号数はアラビア数字の表記を用いること，同様に，欧文単行本は書名に下線をほどこし，日本文単行本は書名に二重のカギ括弧をほどこしてください。

例　論文の場合

Mallowan, M. E. L., 1947,"Excavations at Brak and Chagar Bazar" Iraq Vol. IX-1,London

川村喜一，1963,「シュメール早期の社会」『オリエント』Vol. VI-4,　日本オリエント学会

単行本の場合

Stein, Aurel, 1940,Old Routes of Western Īrān, Macmillan, London

水野清一，1962,『ハイバクとカシュミル・スマスト』，京都大学

14. 章の見出はⅠ，Ⅱ，Ⅲ，大見出1，2，3，中見出(1)，(2)，(3)，小見出ⅰ，ⅱ，ⅲ，と数字をつかってください。

15. 校正は原則として初校を著者校正とします。その際の加除筆はみとめません。

正 誤 表 CORRIGENDA (VOL. I)

	誤 errata	正 recta
p. 141 図IV-19		削除 (to be removed)
p. 142 図IV-21		削除 (to be removed)
p. 146 図IV-28		削除 (to be removed)
p. 147 図IV-30		削除 (to be removed)

正 誤 表 CORRIGENDA (VOL.II)

	誤 errata	正 recta
p. 6 ℓ. 29	渡辺直径	渡辺直経
p. 9 no. 39	土製品, 石製品	土製品
p. 10 no. 20	X線回析	X線回折
p. 16 ℓ. 26	Pl. 6-2	Pl. 9-2
p. 20 ℓ. 21 ℓ. 24	Pl. 5-2 Pl. 4-1	Pl. 8-2 Pl. 7-1
p. 21 ℓ. 1 ℓ. 28	Pl. 2 Pl. 8-4	Pl. 5 Pl. 11-4
p. 24 ℓ. 8 ℓ. 9 ℓ. 21	Pl. 11-1 Pl. 10-5～8 Pl. 2	Pl. 14-1 Pl. 13-5～8 Pl. 5
p. 27 ℓ. 22 ℓ. 30	Pl. 8-2 Pl. 12-2	Pl. 11-3 Pl. 15-2, 3
p. 31 ℓ. 34	Pl. 10-2	Pl. 13-2
p. 32 ℓ. 12 ℓ. 27 ℓ. 30	Fig. 19-6 17-1 Fig. 12-2	Fig. 19-13 17-4 Figs. 13-2
p. 39 Fig. 17 title	V, VI層	V, IV層
p. 42 ℓ. 15 ℓ. 17 ℓ. 20 ℓ. 33	Pl. 10, 11 Pl. 11-3, 4 Pl. 11-5 Pl. 11-2	Pls. 13, 14 Pl. 14-3, 4 Pl. 14-5 Pl. 14-2
p. 64 ℓ. 1 ℓ. 4 ℓ. 5	12～16 (4, 5)…(13) (21)…(20)	12, 16 (5, 8)…(11) (16)…(15)
p. 76 ℓ. 5	21-4	20-4
p. 97 ℓ. 18	Pl. 23-3	Pl. 23-2
Pl. 2-5	VI b 層, LEVEL VI b	IV b 層, LEVEL IV b
Pl. 19-7	Ubaid Period	Halaf Period
p. 143 ℓ. 20 ℓ. 21	21 m in CW 4	21 m in diameter of CW 5
p. 147 ℓ. 5	Pl. 15-5～8	Pl. 13-5～8
p. 156 ℓ. 19	Pl. 15-2	Pl. 13-2
p. 165 ℓ. 23	2.0cm	20cm
p. 171 ℓ. 7 ℓ. 9 ℓ. 16	feet feet upside down	legs knees upwards
p. 172 ℓ. 24	two steps	another step
p. 176 ℓ. 3 ℓ. 4	(4, 5)…(13). (21),…(20),	(5, 8)…(11). (16),…(15),
p. 178 ℓ. 14	day	clay
p 183 ℓ. 26	Pl. 21-4	Pl. 20-4
p. 206 ℓ. 12	for	far
p. 207 ℓ. 10	Transportaing	Transportation
p. 211 ℓ. 21 ℓ. 31	faily out	fairly our
p. 213 ℓ. 3	nawwor-	narrow-
p. 241 no. 38 no. 39	Pottery, Ubaid Period Terracotta, Stone, Spindle Whorl	Pottery from Graves Terracotta, Spindle Whorl
Back Cover (contents XI-1)	Diffaractric	Diffractometric

刊行物案内

AL-TAR, I, Excavations in Iraq, 1971～1974
藤井秀夫編　A 4 版　英文　全460頁（カラー図版入）
申込先　国士舘大学イラク古代文化研究所
郵便振替口座　東京６－７６２６４
価格１冊9,000円（送料とも）

『ラーフィダーン』第Ｉ巻，藤井秀夫編
(特集記事：イラク、アルタール出土染織皮革遺物の研究)

『ラーフィダーン』第II巻，藤井秀夫編
(特集記事：イラク・ハムリン発掘調査概報)

『イラク，テル・グッバ第VII層発掘の建築遺構復原に関する研究

編集後記

第Ｉ巻，第II巻がともに特集号であったのに対し，III-IV合併の本巻は単独研究論文の集成になりました。今後は，研究所紀要である本誌の定期的刊行へ向けて努力したい所存です。

（大沼）

ラーフィダーン　第III・IV巻
1983年（昭和58年）12月31日発行
編集発行　国士舘大学イラク古代文化研究所
（所長　藤井秀夫）
東京都町田市広袴844
印刷製本　凸版印刷株式会社
東京都板橋区志村1-11-1

© 1983 The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq

ISSN 0285-4406

Published by the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq (headed by Prof. Hideo Fujii), Kokushikan University, 844, Hirobakama, Machida, Tokyo, Japan.

Printed in Japan

AL-RĀFIDĀN EDITORIAL POLICY

This journal is designed to cover various studies on the ancient Western Asia. This is an institute journal, but any external contributor with the intention of writing for it will be widely welcome for the benefit of scientific progress. Therefore, anyone is qualified as a contributor; adoption of the article submitted and the way of its printing shall be left optional with the editorial board. The language used is defined as either Japanese or English. This is a journal based on an annual issue.

NOTES TO CONTRIBUTORS

1. The papers handled contain all sorts of theses, reports, book reviews, and translated ones in any length, but they should be of unpublished ones.
2. As for the translated article, the translator should make himself responsible for contributing it to this journal after he has completed necessary procedures such as for copyright and permission to translate between him and the original writer.
3. All the manuscripts taken up by the editorial board will be published with the writer's names.
4. Contributors should clarify the literature cited or refered in the article.
5. Notes and quotations should be exclusively limited to the ones which are considered indispensable for following up the point of discussion.
6. It is fundamantal that notes should be listed at the end of each chapter. Instead of treating ordinary quotations as notes, please display them among the text according to Item 7 of GUIDELINE TO WRITING mentioned below.
7. Any manuscript submitted to the editorial board shall not be returned to its original writer irrespective of its adoption or not. Copying the papers in advance if necessary will, therefore, be advisable.
8. If a resume is necessary, including the case when the resume is in language other than Japanese or English, please send us the very resume of your own making together with your manuscript.
9. Tables of contents will be in both Japanese and English. So, contributors are required to submit the papers with the title of both English and Japanese. If you entrust the Japanese naming of your title to the editorial board, please let us know as to this matter.
10. No payment shall be made for the manuscript submitted even if it is accepted for printing. In publication, however, 2 original copies and 50 offprints will be distributed free of charge. When 51 or more offprints are necessary, you are required to pay for their actual cost and postage.
11. The following is the address to which your manuscript and inquiries will be acceptable:

AL-RĀFIDĀN Editorial Board (presided by Prof. Hideo Fujii)
The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq
Kokushikan University, 844, Hirobakama, Machida, Tōkyō, 194-01
JAPAN Tel: 0427-34-8295

GUIDELINE TO WRITING

1. Please send us your own typed article.
2. Please do not start writing your sentence on page 1 (front page), but simply fill in the title both in English and Japanese, name, address, position, and birth year.
3. Please be sure to prepare figures, tables, maps, etc. on another paper respectively and compile them separately from the text. Each figure, table, etc. must contain its consecutive number, explanation, and source, respectively. In addition, please designate on the margin of your text where each figure, table, etc. should be inserted.
4. Please send us your traced figures, tables, etc. Photo type-setting of letters, numbers, etc. will be done by the editorial board unless they are of some unusual cases.
5. In principle, monochrome photographs, clearly printed larger than in card-size (12 cm x 8 cm), are acceptable, but not negative films.
6. As already directed in the handling of figures, tables, maps, etc., so shall photographs require consecutive numbers, appointments of insertions into the text and explanations of their own, respectively.
7. Mentioned below are the examples of references identified, where the writer's name, publication year of the literature, and quoted pages are arranged in order, enclosed in brackets among the text:

   〔Childe,1956:pp.30-32〕 〔Alnahar,1943:p.123〕

   If they are of the same year publication, it is requested to classify them by alphabet like this: 〔Hamada,1963a:pp.20-22〕 〔Hamada,1963b:p.10〕
8. Notes should be written in a separate paper from the text. In this connection, please be sure to give a number to reference to notes in the text. Meanwhile, in the notes written in the separate paper, remember to write in the page which corresponds to that of the text, respectively.
9. Please put together all the references that have been quoted in the text and the notes at the end of your papers, and write them as follows: (1) The writer's names mentioned in the references are to be listed in alphabetical order. The names of the Japanese, the Arabians, etc. must be so arranged among the Europeans that they will be based on the supposition of their having been rewritten in Latin; (2) The writer's name, issue year, title, volume name, volume number, issue number, publication company's name (place) are to be filled in the references in regular sequence. The titles of publications of collected articles

or journals are underlined for the necessity of their printing in Italic. Also, make sure to draw a line under the title of a book when it is an independent volume. The journal's volume number is displayed by a roman numeral (i.e., XIV), while its issue number by an arabic numeral.

Article in a journal:

Mallowan, M.E.L., 1947, "Excavations at Brak and Chagar Bazar" Iraq Vol.IX-1, London

Indipendent volume:

Stein, Aurel, 1940, Old Routes of Western Īrān, Macmillan, London

10. Headings such as Chapters are to be preceded by I, II, III; major caption, 1, 2, 3; medium caption, (1), (2), (3); minor caption, i, ii, iii。
11。 As a rule, the initial proof reading shall be done by the original writer himself. On this occasion, however, no permission shall be granted as to the alteration of the existing sentences.

الرافدان

AL-RĀFIDĀN

JOURNAL OF WESTERN ASIATIC STUDIES

VOLUME III-IV 1982-1983

CONTENTS

On the Occasion of the Publication of Al-Rāfidān Vol. III-IV (in Japanese)
Hideo FUJII ·····(3)

Some Notes on the Excavations at Tell Abu Thor, Iraq, 1981 (in Japanese)
Abu Thor Party of Kokushikan Archaeological Expedition in Iraq ·····(5)

Animal Remains from Al-Tar Caves (in Japanese) Mikiko ABE ·····(27)

On the Loose Fitting Trousers from Noin-Ula in North Mongolia (in Japanese)
Kazuko SAKAMOTO ·····(31)

The Latest Discussion on the Textiles from At-Tar Caves (in Japanese)
Hideo FUJII, Kazuko SAKAMOTO, Hiromi OKADA and Mikizo ICHIHASHI ·····(47)

Japanese Translation with Translator's Annotation of Mitwally's "History of the Relations between the Egyptian Oases of the Libyan Desert and the Nile Valley" (in Japanese) Tsurue YOSHIMOTO ·····(53)

The Archaeology of the Arabian Gulf during the First Millennium B. C.
Munir Yousif TAHA ·····(75)

Textile from At-Tar Caves, Iraq
Hideo FUJII, Yutaka TAKAGI, Kazuko SAKAMOTO, Hiromi OKADA and Mikizo ICHIHASHI ·····(89)

Reports of the Institute (in Japanese) ·····(97)

THE INSTITUTE FOR CULTURAL STUDIES OF ANCIENT IRAQ

KOKUSHIKAN UNIVERSITY

Tōkyō Japan